ト返す。

尾扇　イヤ、身共が持つて行つたのは、それではない。この非人の懐中から落した廻文。

與茂　イヽエ、そんな物は存じませぬ。わしが取りましたのはこの鼻紙。大方あなたの、お覺え違ひでござりませう。それとも非人、本當に廻文とやらを落したのか。

庄三　イエ、鼻紙でござります。

與茂　それ御覽じませ。矢ッ張り初手から鼻紙を、廻文狀なぞとは、お醫者樣、あなたも少し狂人と見えますて。

尾扇　エヽ、馬鹿を云ふな……でも、見す〳〵

喜兵　よいヲ〳〵。捨てゝ置け。たとへば、どのやうに浪人めらが、羽ばたきをしたとても、何として何として遣はされませ。

與茂　イヤモウ、氣遣ひの氣の字もある事ぢやァござりませぬ。殊にこんな狂人の非人、御料簡なされ

尾扇　無性に非人をかばふ町人。われも大方

與茂　どうしましたえ。

尾扇　イヤザ、町人が挨拶。狂人とあれば、料簡して遣はさう。

與茂　それは有り難うござります……サア〳〵、狂人の乞食、早く裏の田圃へ行つてナ……サア、早く行け〳〵。

庄三　ハイ〳〵。これは旦那樣、有り難うござりますする。

ト庄三郎に、廻文はおれの懐にあるといふこなし。庄三郎、頷いて下座へ入る。

まき　ほんにモウ、どうなる事かと、大抵案じましたわいなァ。

うめ　それいなう。もう行かうぢやござりませぬか。

喜兵　イカサマ、さぞお梅も待ち遠であつたらう。そこから駕籠に乘つて歸るがよからう。

尾扇　ちつとも早く參りませう。

與茂　左樣なら、もうお歸りでござりまするか。

尾扇　たしかに懐中

ト思ひ入れ。

與茂　お靜かにいらつしやりませ。

ト與茂七、こちらの床几へ腰をかけて思ひ入れ。

喜兵　それはさうと、先刻の浪人。
うめ　ま一度、一目
喜兵　其方も見たいか。
うめ　アイ。
喜兵　おれも逢ひたい。
うめ　エヽ。
まき　サア、お出でなされませ。
　ト唄になり、喜兵衛の一群れ、静かに向うへ入る。與茂七殘り、こなしあつて
與茂　すんでの事にこの廻文
　トあたりを見て、思ひ入れあつて
　爰のおかみさんは、見世を明けて、どこへ行つてゐるかしらん。
　ト双盤になり、下座より宅悦の女房お色、出て來て
いろ　お政さん、この間は……オヤ〳〵、居ないさうだ。
與茂　男の茶見世だけ、流行らうがね。

いろ　オヤ與茂七さん、お前さんが茶見世を出せば、山中の女は皆殺しだよ。
與茂　有り難いね。此方が先へ死ぬであらう。時にお色さん、常住山へ行つて商ひをするが、小間物屋
　といふものは、是非女を相手にしてする商賣だから、うまい事を云はれては倒れ、横目で見たと
　いつては倒れ、差引いて見ると、餘ッほど割りの惡い商賣だね。
いろ　嘘ばつかり、山中の女がお前の來るのを、毎日々々待つてゐるよ。
與茂　氣をよく貸すからの事サ。大きなべら坊だ。
いろ　時に素的なものが出來たよ。
與茂　さうだとサ。この頃二三日山へ來ないが、大層美しいさうだの。
いろ　コレサ、この見世だナな。
　ト楊枝見世を指さす。
與茂　爰はお前、お紋さんの出てゐた所だ。
いろ　そのお紋さんが病氣といつて一昨日から雇つて出した子だがの。内は餘ッほど苦しがりださうだ。
與茂　ムウ。粂三に似てゐるといふ評判だが、本當か。
いろ　ずぶ大和屋と來てゐる。其くせ溫なしくつての、屋敷出ださうだ。

與茂 そいつは猶いゝな。名は何と云ふえ。

いろ 先の名は何といふか知らねえが、袈の内へ出てから、矢ッ張りお紋さんよ。

與茂 名はお紋さんだの……内はどこだえ。

いろ 北新町だよ。

與茂 宗旨は何だ。

いろ 法華だとよ。

與茂 寺はどこだ。

いろ エヽ。

與茂 葬ひは何時だ。

いろ 何を云ふのだ。

與茂 ホイ、あんまり浮れたやつサ。そいつはどうかなるまいかね。

いろ なるどころか、エテ物に出るわな。

與茂 それは妙法蓮華經。

いろ すぐに法華で洒落たの。

與茂 法華の幸ひだ。今夜すぐに出かけようが、出るだらうか。

いろ 商賣だもの。出なくつて。

與茂 サア〳〵、行きやせう〳〵。

いろ 剛氣に急ぐの。マア、荷をどこぞへ預けて來ねえよ。

與茂 イカサマ。カウ、きつと晩には

いろ いゝと云ふ事サ。

與茂 ちよッぴり酒で

いろ さうサ。

與茂 こいつは浮いて來たわえ。

ト荷を背負つて立上がり、ちよつと思ひ入れあつて

斯うして騒げば騒ぐものゝ、同じ姿をやつしても、あの奥田の御子息は

いろ ナニ、奥田より大三ッがいゝわサ。

與茂 忠義ゆゑとて、菰かぶりとは

いろ そんなに呑めるものかな。五合でいゝやな。

與茂　ア、、さぞや苦忠を

いろ　そこが地獄サ。

ト氣を變へ

與茂　おきやアがれ。

ト二人はてん〳〵に思ひ入れ、双盤にてこの道具廻る。

本舞臺、三間の間、二重世話屋體、白く反故貼り、つぎの襖、上の方、破れ障子たてたる一間の屋體、よき所に小さき衝立二枚、貼交ぜの屏風。門口に閻魔の炙をする丸てゐる看板と、奉公人口入れの看板と二つ出しあり。爰にお大、とやにつきし毛の拔けたる女、髪を島田に結ひ、白齒にて、眉毛のなきこしらへ。文嘉、彦兵衛、以前の形にて住ひ、按摩宅悦、盆へ炙をほぐしてゐる。よき所に角行燈をつけ、誂への流行り唄にて、道具とまる。

文嘉　カウ〳〵、おらア素的な大がいゝぜ。

宅悦　ハイ〳〵、この位のがよくきゝます。

文嘉　コレサ〳〵、木當のをすゑられて堪るものか。

宅悦　それは承知でござります。サア〳〵、表向き人氣が悪うござりますから、それで炙をほぐして居

ります。

彦兵　わしは又、一向年のゆかぬ子がよいぢや。至つて小さいがよい。

宅悦　エヽ、番太郎で賣る炙の事でござりまするか。

だい　モシ〳〵、わたしの前でそんな事は、ちつと差合ひだね。

宅悦　コレサ、お前は早く、御拵へでもしねえかな。

だい　アイ〳〵。

ト唄になり、向うよりお政、ぶら提灯を持ち、直助、羽織着流しに着替へ出て來り、花道にて

直助　カウ、お政さん、いよ〳〵あの楊枝見世のお袖さんを、買はしてくれるか。

まさ　お袖といつたか知らねえが、今ではお紋さん、どうであゝいふ事に出る日にやア、否應は無いのサ。

直助　そいつは奇妙。

まさ　コレサ、その奇妙が悪いよ。藤八が現はれるから、お云ひでないよ。

直助　それは承知だよ。

まさ　サアお出で。

ト舞臺へ來り

まさ　宅悦さん〳〵、お客を連れて來たが、いゝかねえ。
宅悦　アイ、そりやァ有り難い。サア、お入りなされませ。
直助　ハイ、御免なせえ。
宅悦　あなたのお望みは、大か、小かね。
直助　なにサ、灸をすゑに來はしません。彼のお紋といふを
宅悦　エヽ、定紋をおすゑなさるのかな。
直助　なにサ、灸の事ぢやァねえ。
まさ　コレ、それは承知だがね、表向き灸のつもりにして置くのサ。そこで看板に閻魔様が灸をすゑて
　ゐるのサ。
直助　ハヽア、成る程こいつは、奇妙。
まさ　コレサ。
　ト直助、口を押へる。
文嘉　いま聞けば、お紋とやらは、先刻見た子だ。おいらも何ならそれにしてえ。
彦兵　さうぢやわいの。とても金出して買ふ位なら、えいのがよい。わしもそれにしませう〳〵。

宅悦　さう大勢で一人の子を目がけてはなりません。こりや斯う致しませう、あなた方は大と小のお望み、跡からお出でなされたはお紋さん、恨みッこのないやうに、籤取りがようござりますて。
まさ　左樣サ、兩方の名を書いて、縁結びがようござんせう。
皆々　それがよい〳〵。
直助　おらァ外の子ぢやァ否だ。
宅悦　マァ〳〵、何にしろ、運は天に任せて
　ト宅悦、縁結びの籤を拵へる。お政これを結び、思ひ入れあつて
宅悦　サア〳〵、みんなしんを取つて、明けて御覽じませ。
文嘉　おれのは何だ。文嘉にお大。
宅悦　こりやァあなたのお望み通りだ。
彦兵　わしは彦兵衛お小。
直助　ドレ、そんなら差詰め、おれは藤八お紋、奇妙。
　ト浮かれて云ふ。
宅悦　斯う誂へたやうに極まる事もないものだ。

まさ　マア、お前はお紋さんの來るまで、あの障子の内に寐轉んでおいで。
直助　先刻の小僧は、酒を持つて來さうなものだ。
まさ　わたしが一遍行つて來よう。
直助　そんなら頼むよ。
宅悅　その次手に、かのもナ。
まさ　承知だよ。

ト唄になり、お政は向うに、直助は上手障子屋體の内へ入る。

文嘉　サア、おいら達のは、どうするものだ。
宅悅　お前は年増だね。
彦兵　わしは若いのぢやぞや。
宅悅　畏まりました、マア、ちつと横におなりなさりませ。

ト宅悅、小さき衝立を眞中へ置き、蒲團を二つ敷き、屏風をたて、行燈を暗くして置く。文嘉寢ころびゐる。宅悅、お大に囁き、奥へ入る。お大うなづき、側にある硯箱を引寄せ、懐中鏡を出し、眉毛を引くこなしあつて、彦兵衛の側へ來り

だい　モシ、お休みなされましたかえ。
彦兵　ホイ〳〵、先刻からお出でを待つてゐたのぢや。
だい　わたしやお山さんといふ名ぢやござりませぬ。
彦兵　ハヽア、成る程さうぢや。

ト大の顔を見て

イヤア、お山どころぢやない、惣嫁のやうぢや。
だい　なんだえお前、おやまだの、さうかだのと、日光道中記を見たやうな事をお云ひだね。
彦兵　お前、年は幾つぢや。
だい　ナイ、わたしが年は、とつて十才。
彦兵　鶏の化け物なら、木菟よりは流行るであらう。なんぼ若いのがよいというて、あんまり若過ぎるな。
だい　よしか、本の年は
彦兵　六十八か。
だい　可哀さうに、たつた十六サ。

彦兵　逆さまにして六十ぢや。

だい　エヽモウ、口の悪い。

トこなし。合ひ方になり、向うよりお袖、以前の形にて、草履を穿き、爪立つて抜き足にて出て來り、門口へ來て

そで　ハイ、御免なされませ。

ト小聲にて云ふ。宅悅出て來り

宅悅　オイ〳〵、御苦勞々々々。今夜は大分遲かつたの。

そで　ハイ〳〵、内の樣子が、ちつと出憎うござりましたゆゑ

宅悅　サア〳〵、あそこの障子の内へ

そで　ハイ、有り難うござります。

ト袖、障子屋體へ入る。

文嘉　ガウ〳〵、おいらが年增はどうしたのだ。

宅悅　ハイ〳〵、只今。ガウ〳〵、お大さん、もう來さうなもんだ。

ト思ひ入れ。お大出て來り、眉毛を拭き、宅悅はお大に囁き、奥へ入る。お大、文嘉の側へ來り

だい　ヤツトコショ、もうお休みかえ。

文嘉　オイ、剛氣に待たせたの。

だい　アイ、年がよると、歩くのに大儀だからね。やう〳〵杖に縋つて

文嘉　エヽカウ、お前いくつだ。

だい　アイ、年は七十九サ。

文嘉　べら坊な年增だの。年寄りでなくつてもの事だ。あんまり年增過ぎるの。

だい　それでも二人や三人位の客は何ともないよ。お前は大年增がいゝと云ふからわたしが來た。この位の年增は、もう滅多にはござりません。頭は黑いやうなれど、殘らず白髮サ。こればかりは本の事サ。皆さんがよく御存じサ。

文嘉　叮嚀に年の寄つた人だね。何たる因果だ。

トこなし。合ひ方、バタ〳〵になり、障子の内よりお袖逃げて出る。直助追うて出て來り、思ひ入れあつて

直助　どうして〳〵逃がすものか。

そで　それぢやというて、どうマア其方と顏が

直助　合はされぬのも尤もだが、お袖さん、お前は孝行なものだなう。

そで　エヽ。

直助　マア下になる。おれが云ふ事をとつくりと聞きなせえ。お前の親も、わしが主人も、不慮なお家の騒動にて、今の流浪。親の難儀を貢ぎの爲、淺ましい此すぎはひ。外の人は兎も角も、わしは推量してゐるゆゑ、せめて少つとも手助けになつて進ぜうと……サア、斯う云つても、わしが無理に口說くゆゑ、お前は得心あるめえが、わしが云ふ事を聞いてくれゝば、こんな商賣させはしねえ。それともお前はすき好んで、さういふ勤めをしなさるのかえ。

そで　なんのマア、苦しいこの身の世渡りも、今云ふ通り親の爲。

直助　親御を思ふ心なら、わしが云ふ事、聞いた方がよからうぜ。又この事が親御へ知れたら、昔氣質の左門樣、貧乏しても穢らはしい、武士の名までをよごすといひ、殊によつたらお主の名までを

そで　エヽ。

直助　サア、三方四方まん丸く、わしが詞に附く方がよからうぜ。

そで　勤めといふは身すぎばかり、餘儀ない事の譯云うて、賴めば人に鬼もなく

直助　その代りにやア、うまい事もねえといふものだ。ハテ、只惚れて口說くと思ふから料簡が違ふ。本の深切といふものだ。マア、この金で親御にも

ト懐より金を出し

給でも買つて着せるがいゝぢやァねえかえ。

そで　そんなら只前、よしみにて、大枚のその金を

直助　浪人なれば大枚だが、今ぢやァ十や二十の金、商人の身ぢやァ何でもないのサ。

そで　その深切な心なら、少つとの間その金を

直助　貸すといふのは他人の事だ。ハテ、いくらでも

そで　嬉しうござんす。

ト金を取りさうにする。

直助　只嬉しうござんすとばかりでは、まづいな。

そで　それぢやというて

直助　マア、一緒に寢る位の事は

そで　エヽ。

ト此時奥より宅悦出て來り

宅悦　お紋さん、何しに爰へ出てゐるのだ。早く客の所へ行きな。

そで　ハイ〳〵。

直助　いま涼みに出たのだ。サア、座敷へ行かう。

そで　どうぞそればかりは

宅悦　そんな事を云つて濟むものかな。

直助　ハテ、いゝわな。サア、來なせえ。

ト直助、お袖の手を取つて障子屋體へ入る。此うち彦兵衛出て

彦兵　わしがけんさいめは、居らぬかえ〳〵。

宅悦　さうでござりますか。お小さん〳〵。

トこれにてお大出て、また眉毛を引き、顏を出す。ト文嘉も出て

文嘉　カウ〳〵、お大さん

だい　ハイ〳〵、今參ります。

トまた眉毛を拭いて顏を出す。この拍子に衝立倒れて、三人顏見合せ

文嘉　ヤア〳〵、頭が島田で

彦兵　顏が年增。

宅悦　面は猿に似て、啼く聲豚に似たり。丹波の國から生捕つた。代はお戻り〳〵。

文嘉　おきやアがれ、とんだものを一座廻し

彦兵　新造のお小さんも凄まじいわいなう。

文嘉　とやについた者を、お大さんも氣が強い。

だい　お大さんだといつて、安くおしでないよ。この三月開帳があつたよ。

彦兵　お小さんはどうしたのぢや。

だい　大分損をしたとサ。

文嘉　惡く洒落やアがる。

ト突きたふし

サア、歸らう〳〵。

宅悦　歸るなら勤めを置いてゆかつしやい。

文嘉　ナニ勤め。押しの強い。こんなものに二百でも置くものか。

彦兵　厚かましいも程があるぞや。其方から錢取つても否ぢや。

だい　否ぢやも凄まじい。
二人　眞平御免なさい。
だい　それぢやァお前方は逃ける氣だね。
文嘉　エヽ、やかましいわえ。
宅悅　勸めがなければ、歸す事はならぬぞヽ。
　　ト爭ふ。流行り唄になり、向うよりお色先に、與茂七、出てくる。跡より大三ツの升太、五合徳利を
　　下げて出て來り
いろ　大三ツの升太、どこへ持つて行くのだ。
升太　お前の所サ。
いろ　誰れがさう云つた。
升太　額堂のおばさんがさう云つたから、持つて來た。
いろ　ドレ〳〵、おれに渡した。
升太　イエ〳〵、誂らへた人に渡しませう。
いろ　いゝわな。錢さへ拂つたらよからう。

升太　ナニ、錢は先刻取りやした。それでなくては、お前の所へ持つて來やァしません。顏が惡いもの
　　を
いろ　この小僧は外聞の惡い。お客も聞いてゐる前で
升太　人の聞いてゐる時でさへ拂はねえもの、誰れもゐねえ時は猶拂はねえ。
與茂　ハヽァ、こいつは違えねえ。マァ〳〵、內まで持つて行くがいゝ。
　　トこれにて三人舞臺へ來る。
升太　代が濟んでゐるから、置いて行きやせう。
だい　サア〳〵、勸めをおくれ〳〵。
兩人　否だ〳〵。
宅悅　放すな〳〵。
　　ト文嘉と彥兵衞は宅悅を突き倒し、一散に逃げ出す。
だい　小僧どん〳〵、つらめえてくんな。
　　ト升太、兩人を捕へ
升太　此奴等は泥坊か。

だい　その人達は食ひ逃げだ。
升太　とんだ奴等だ。サア、金を出しやァがれ。
文嘉　あんな面の奴に、誰れが金を出すものか。
升太　あんな面でも、初手から承知の上であらう。銭を置かねえが最後、これから山へ來た時に、子供を集めて囃させるぞ。
文嘉　イヤ、それは恐れる。山でそれを囃されては
彦兵　これがほんの劍の山。
升太　針の山をば、棒ほどに觸れて歩くぞ。
兩人　そんなら出します〳〵。
ト二人とも二朱づゝ出す。升太取り
升太　これさへ取りやァ赦してやるワ。
文嘉　なんの事はねえ、三途の川で剝がれたやうだ。
升太　こま言吐かさず、手に手を取つて死出の山、づん〳〵連れて、うしやァがれ。
兩人　イヨ高麗屋の若旦那。

ト文嘉と彦兵衛、一散に逃げて入る。
だい　小僧どん、おかたじけ。まづその金をおくれ。
升太　この金か。遣りは遣らうが、アレ〳〵、そこを見な。
だい　なんだえ。
ト振りかへる。
升太　べら坊あまやァい。
ト一散に走り入る。
だい　ヤイ小僧め、泥坊々々。
ト同じく追ひかけて入る。
いろ　なんだ、イケ騒々しい。
宅悅　騒々しいどころか、泥坊だ。
いろ　恐ろしい亡者だ。然しその埋め草に、いゝお客をお連れ申した。サア、此方へお入りなされませ。
ト與茂七、内へ入る。
宅悅　ようお出でなされました。

與茂　ハイ〳〵、わしは急ぐから、早いがようございます。
いろ　あのお紋さんはゐるかしらん。
宅悅　丁度此方へ來てゐる。
いろ　それは幸ひ。ちよつと賴んで
宅悅　然し今の二の舞はあやまるぜ。
いろ　ナニ、そんな氣遣ひは少しもない。
宅悅　そんならおれが呼んで來よう。
　ト宅悅、奥へ入る。お色、行燈をよき所へ置き、風呂敷をかけて暗くする。
與茂　なぜ眞暗にした。
いろ　爰が地獄の名代所サ。
與茂　成る程ナ
　ト上手よりお袖出て來る。
そで　退引きならぬ所へ、呼び出して下さんしたゆゑ、ひやいな所を
いろ　コレ、お紋さん、隨分おとなしいお客だから、叮嚀に勤めなよ。

そで　ハイ、有り難うござります。
いろ　おしかりなされませ。
　ト與茂七の側へお袖を押しやり、お色奥へ入る。お袖、思ひ入れ。
そで　モシ、お休みなされましたかえ。
與茂　どうして〳〵、一人で寢る位なら、内で寢てゐるのサ……コレサ、どうしたものだ。此方へ寄んなせえ。なぜウヂ〳〵してゐるのだ。エヽ、眞暗で顔が見えねえ。ちよつと行燈を
そで　アヽモシ、灯をおつけなされずとも
與茂　エヽ、恥かしいか。畜生め。
　トこなし。お袖思ひ入れ。
そで　モシ、私しはあなたへ、お願ひがござります。
與茂　なんだ、お願ひとは。どうせろくな事ぢやァあるめえ。
そで　サア、申し憎い御無心ながら、私しが斯ういふ事に出まする譯、お聞きなされて、どうぞ不便と思し召し、一つ寢だけは
與茂　なんの事だか、一向わからねえ。マア〳〵、その譯を話しなせえ。

そで　ハイ〳〵、お恥かしい事ながら、私しの内は、もと武家でござりまするが、樣子あつて父さんは浪人、一人の姉さんもござりまするが、さる屋敷へ縁附きましたところ、懷妊して、どういふ譯やら離縁になり、今日一日の煙りも、立てかねまする程の貧苦の中へ、病氣の姉を引取りましたゆゑ、よんどころなう晝の間は楊枝見世、夜は此やうな淺ましい、すぎわひを致しまするも、せめて少しのお錢をもらひ、父さん姉さんを過したいばかり、心にもない隱し勤め。お情深いお客樣に、この身のしがを打明けて、お願ひ申すは無理ながら、どうぞ切ないわたしが身を、不便と思し召しまして、一つ寢いたします事は、お免しなされて下さりませうなら、ハイ〳〵、有り難うござります。

與茂　成る程、聞けば氣の毒な事だが、親の爲に斯うした勤めをしようより、いつそ吉原へでも行つておいらんになつたら好さゝうなものだぜ。

そで　イエ、此やうな事いたしまするも、親姉へは一向沙汰なし。

與茂　ハテ、隱れて出るのか。孝行者だの。その孝行な心を聞いて、猶々思ひが增して來た。お前、よく積つても見なせえ。中には腹を立つて歸る客もあらうし、また、とても孝行する位なら、思ひ切つてその譯を云へば、出やう次第でいゝ旦那が附かうも知れぬ。つい一通りの客だといつて、

二朱や一分は遣る氣になるわサ。

そで　それがなります程なれば、申し憎い事、お賴み申しは致しませぬ。

與茂　どうしてもならぬといふは、ハヽア、云ひ號けでもあるといふ事か。

そで　エヽ……イエ、さういふ譯でも

與茂　そんなら仕もいゝぢやアねえか。

そで　でも、どうぞこればかりは

與茂　ハテ、惡い合點だ。

そで　アレ、およしなされませ。

ト飛びのくはずみ、行燈の風呂敷落ちて明るくなり、兩人顏見合せ

與茂　ヤア、其方は女房

そで　お前は與茂七さん、面目なうござんす。

ト顏を隱して思ひ入れ。與茂七ムツとして

與茂　面目ない……イヤ面目ないも凄まじい。コレ、お袖、てめえは〳〵。屋敷の騷動あつてから、散り〴〵に別れたが、今まで便りをせぬおれゆゑ、忘れ果てゝこんな勤めに出るのだな。現在亭主

がありながら、男欲しさのいたづらか。あんまり呆れて物が云はれねえ。

そで　モシ、與茂七さん、樣子御存じないからは、そのお腹立ちも尤もでござんすが、男欲しさのいたづらとは、あんまりむごい仰しやりやう。お屋敷の騒動より、みな散り〴〵に御浪人。今もお話し申した通り、親の爲に斯うした勤め。いたづらな心なら、何しに親のしがまでも、打明けて話しませう。これまで一度の便りもなう、つれないお前に操を立て、切ない苦しいその譯も、聞きわける人は稀れにして、大概みんな無得心、それを兎やかう云ひ抜ける、人一倍のこの苦勞、誰れに立てうと辛苦をすると思うてゞ。わたしの斯うした勤めより、恨みは却つてお前にある。現在女房のある身でゐながら、斯ういふ所へ遊びに來て、女房と知らず此わしに、貞女を破らせやうとさしやんした。斯ういふ所に、遊んでゐる間はありながら、女房の所へは、便りする間はござんせぬか。ほんに〳〵あんまりな、お前の心に引くらべ、逆捻ぢな今の腹立ち。あんまりぢや、あんまりぢやわいの。

與茂　さう云はれて見れば一言も無いが、さぞかし今までいかい苦勞。おれも折々其方の所へ、便りしようと思うてゐれど

そで　イエ〳〵、その便りのない事は、實は恨みは致しませぬ。その譯は、由良之助樣の思し立ち、御主人の敵討……

與茂　コレサ、譯も無え事を聞きかじつて、ズバラ〳〵と。外の浪人にそんな噂があるか知らぬが、おれは少つともそんな氣遣ひはない。今は商人、小間物屋の與茂七、何しに敵討なぞは

そで　サア、女子は口のさがないものゆゑ、お隱しあるは御尤も。斯うした所へうか〳〵と、遊びあるくも、敵に油斷させる爲

與茂　これはしたり、又しても敵々と、そんな時代な事は聞くも否。久しぶりで女房ども、今までの事は、腹が立つならあやまらう。行燈の明るくなつたが結ぶの神。

そで　成る程、迂闊に大事も……ほんに思へば久し振り。ようマア、まめでゐて下さんしたなア。

與茂　おぬしも無事で、めでたい〳〵。

ト奥よりお色出て來り

いろ　ハイ、きまりましたらお勤めを

與茂　ほんに、それ〳〵

ト金を出してやる。

うぬが女房に勤めを出すのも

いろ　エヽ。

與茂　これも話しの種だらう。時に、先刻の酒があるだらう。

いろ　爰にあるが、冷でござります。

與茂　冷でもかまはぬ。

いろ　たんとお樂しみなされませ。

ト酒を出して、奥へ入る。

與茂　サア、嗚ア、一つ飲まつし。

そで　ほんにマア、いつの間に其やうな物云ひに

與茂　へヽ、古風な事を云ふ奴サ。

トこの時奥の障子を明け、直助、この樣子を聞いてゐる。

そで　お前、酒を深うはあがらぬぢやないかえ。

與茂　なんだ、さゝをあがらぬ。お富士樣の蛇ぢやァあるめえし。併し、誠に久しぶりで、女房と二人で水入らずの酒盛り。

そで　斯ういふ所へ、遊びにござんすからは、定めし方々へも、行かしやんしたでござんせうな。

與茂　どうして〳〵、てめえの所なればこそ。

そで　そんなら、初手から知つてござんしたか。

與茂　なにサ、知りもしねえが、……カウ、よく詞咎めをするなア。さう云へばおれも云はねえぢやア
ならねえ。今まで多くの客に出た内ぢやア、定めし自由になつたのもあつたらう。

そで　イエ〳〵、神さんかけて、そんな事はござんせぬ。その證據にはコレ、お前にもあの通り

與茂　そりやこそ、おれと知つてゐても

そで　イエ、知らねばこそあのやうに

與茂　もしおれのやうに、無理やりにあゝしたらどうする。

そで　そりやわたしが心一つ。人を見て法とやら、勇み肌のお客なら、馴れぬながらも職人の、女房で
ござると嘘ついて、亭主の病氣に勤めはすれど、心は清さきよがんな、かけて去なして又明日の
夜。坊さん客には此方から、帶も解かいで永々と、お談議說いて詫び事も、御出家方は溫なしう、
緣なき衆生は度し難しと、得心づくで歸るわいなア。

與茂　また店向きの商人ならば

そで　宵を限りの四つの鐘、これが別れのきぬ〴〵と、思へば遲うどこへ行て、歸らにやならぬ勘定も

ツイうかく〳〵と悪戯の、たま〳〵ごんせと騙してやる。

與茂　侍ひ賽の山まんなら、抜ける手管はあるまいが。

そで　武家は弱より其方の物。手討ちにあはうが、殺されうが、忠義の爲とたらしこみ、頼めばグツと侍ひ冥利、せう事なもの褒めそやし、去なした跡へ旅人客、一しほ哀れに、年貢の代りの勤めと云へば、蹄々の片手にも、小豆一升、大根一把、貰うた事もあるわいなア。

與茂　ハテチテ。商賣に騙れるとはいひながら、天晴れ嘘の上達、來世は必ず、閻魔に舌を抜かれるぞや。

そで　イエ、その氣遣ひはござんせぬ。この世からなる地獄の責め。

與茂　イカサマ、云やればそんなもの。思はず今宵逢うたのも

そで　ほんに地獄で佛とやら

與茂　もうこれからは奈落の底も

そで　離れぬ夫婦。

與茂　女房ども。

そで　こちの人。ほんに夢ではないかいなア。

與茂　夢なら覺めるな。

そで　オヽ嬉し。

ト縋りつき、互ひに懐へ手を入れる。與茂七はお袖が懐の財布を引出す。お袖は與茂七の廻文を引出す。

與茂　貧苦に迫ると云ひながら、この金は

そで　さてこそ義士の廻文狀。

ト與茂七手早く取る。

與茂　これ見られては

そで　エヽ。

與茂　女房なれども

ト思ひ入れ。

して、この金は

そで　その金は……マア寢て話さうわいなア。

ト頓になり、屏風を引廻す。直助、こちらへ出て來て、いろ〳〵口惜しき思ひ入れあり。無性に手を

叩く。奥より宅悦、お色、出て來り

いろ　モシ〳〵お前、如才もなくて、靜かになさいまし。

宅悦　夜更けさふけ、世間の前もありますわな。

直助　やかましいわえ。うぬら、よく女の二重賣りをしやァがつたな。

いろ　モシ〳〵、聲高に仰しやりまするな。いつ二重賣りを致しました。

直助　しねえものか。おれが買つた女は、この屏風の中にゐるわえ。

宅悦　そりやお前、一人で買うてゞはあるまいし、廻しといふ事もございます。

直助　ナニ、隱し賣女の癖に、廻しも氣が強い。あの女は泥坊だ。大騙りだ。それを承知で買はせるからは、うぬらも盜人の同類だ。

いろ　なんぼ出たらめの惡態でも、泥坊と云はれては濟みませぬ。それには何ぞ證據がございますか。

直助　證據といふは、この屏風の中に寢てゐる野郎も、大泥坊だ。

トこの時、與茂七、お袖出て來り

與茂　先刻から聞いてゐれば、盜人の、泥坊のと、そりやァ誰れの事だ。

直助　外でもねえ、うぬ等二人の事サ。

與茂　ヤァ、さういふわれは、ハテ見たやうな

直助　見た筈サ。以前屋敷の同家中、奥田の家に下部奉公、今は商人藥賣り、藤八五文で仕出した金、地獄の女のおこわにか、つちやァ男が立たねえ。それゆゑ騙りといふ事サ。

與茂　そんなら今のその金は

直助　女が懷ろ、財布の金、ほつかと渡して置いたのも、もしやにかゝつたその上で、夫婦呼はり剩さへ、おれが錢で買つた酒まで、只飲まれていちやつかれちやァ、佛のやうな男でも、胸の炎は地獄の廻し。うぬらは盜人、大騙り、とサァ、云つてはあんまり有りふれた、憎まれ口も餘ッぽど古風。どうで賣女に出るからは、一座廻しを合點で、おれが方へもすべよく出れば、金も遣らうし、この場も濟ます。洒落てしまふがいゝぢやァねえかえ。

與茂　イヽヤならぬ、武士の相方。金銀づくで外の男に、添ひ寢さす事罷りならぬ。

直助　なんだ、武士だ。コレ、以前は武士でも、今は浪人、町家の住居の小間物屋、それでも武士か。

與茂　ヤァ。

直助　女房々々とイケ騷々しく、どこで貰つて、誰れが仲人。よし又相對づくの夫婦にもしろ、隱し賣女も同然だ。買ひに來たおらァ客だ。但し武士の浪人が、女房を拵がせても濟むか。

與茂　サア、それは

直助　ソレ見ろ。おらア畢竟深切づくで、親の難儀とあるゆゑに、金まで遣らうといふ男を、ぬらくらり騙して一文の、働きもねえ浪人を、亭主でござると嬉しがる。思へば矢ッ張り親に孝。金もいらずば此方へ返せ。貧乏神のとッついた、うぬらに金は授からねえ。キリ〳〵表へ出てしまへ。

ト いろ〳〵惡口云ふ。與茂も、口惜しき思ひ入れ。

與茂　エヽコレ、貢ぎの金はありながら、義士の神文、外へ遣はぬ配分金。

直助　ヤ。

與茂　エヽ、石、瓦も同じ事。

ト 我が懷へ思ひ入れ。これにてお袖、思ひ入れあつて、以前の財布を取出し、直助の前に投げ出す。

直助　すんでの事に。危ない事。

そで　それ返したら、云ひ分もござんすまい。

直助　あつても云はねえ。ナニ、未練らしく

そで　最前いろ〳〵深切に、云うたこの金、その時も、底に針ある詞の端。取るまいとは思うたれど、そこが侍ひ、世につれて、親の難儀とッイ金を、入れて置いたが此方の誤まり、それを云ひ立て

盜人の、ヤレ騙りのと聲高に、僅かな金で腹立てる。ほんに貧するわたしより、心のむさい直助どの。千金萬金積んだとて、なんの心に隨はう。たとへ浪人であらうとも、わたしが好いた心が金。日本中の寶をば、一つ所へ山と積んでも、替へられぬ大事の男。この後わたしがどういふ苦患、身を切の寶りにしてなりと、可愛い、男の爲と思へば、辛苦な事もござんせん。ほんに今までアタ嫌らしい、附はつ廻しつ無理口說き。この後フツツリ、うるさい頭拂うたと思や、此やうな嬉しい事はないわいな。

直助　それ程までに惚れた男と

そで　嫌な男と比べては、毒と藥の隣り同士、目に見るさへも嫌ぢやわいなア。

直助　ムウ。

ト 思ひ入れ。流行り唄になり、向うより藤八、以前の形にて出て來り

藤八　あの野郎め、どこへはまり込んでゐるかしらん。なんでも、びりにかゝつてゐるに違えねえ。大方冥らだらう……ハイ、御免なさりませ……ヤア、冥にゐるな〳〵。

直助　ヤア、お前は

ト 逃げにかゝる。

藤八　ドッコイ〳〵、大方こんな所にゐるであらうと思つた。道理でこの頃は賣溜めも寄越さず、藥も固めて卸し賣り、親方へ仕切りの金まで、みんな汝が引摺り込んで、女狂ひとは太え野郎だ。

直助　モシ〳〵、わしがなんの、そんな事をするものかな。賣溜めも、藥の代も、明日親方へ持つて行くところでござります。

藤八　そんなら何しに爰へ來てゐるのだ。

直助　サア、爰へ來たのは……オヽ、それ〳〵、肩がつかへたから、灸をすゑに來たのサ。爰は灸點所だから。ナウ、おかみさん

いろ　左樣々々、今すゑかゝる最中でござります。

宅悦　そこに艾がほぐしてあるワ。

直助　コレサ〳〵、本當にすゑなくつてもいゝわサ。

藤八　灸をすゑるとは嘘つきめ、矢ッ張りぴりには嵌りやァがつて

直助　どうして〳〵、いま灸をすゑかゝる所サ。

ト肌を脱ぐ。

いろ　ソレ、皮切りぢや。

ト本當に灸をすゑる。

直助　熱々々……これが本當の焦熱地獄。もうよい〳〵。

藤八　たつた一つで、もうよいとは、ハテ、よく利く灸だ。この灸は一つで二朱か。もう一つすゑると、お直しになるだらう。何でもかでも、賣溜めと藥を持つて行かねばならぬ。サア、寄越せ〳〵。

直助　明日わしが持つて行きますよ。

藤八　何を、うぬは親方の所へ出入りは叶はぬ。おれに取つて來いと云はれた。キリ〳〵と出しやァがれ。

ト直助が懐へ手を入れて、以前の財布を引出す。

そりやこそ〳〵。爰に持つてゐる癖に……藥の代の代りにやァ、着物を脱ぎやァがれ。

直助　これも取るのか、情ない。

藤八　みんな親方の仕着だ。灸をすゑに來るのに、羽織で極まつて來ずともの事だ。サア〳〵、脱げ〳〵。

ト直助を裸にして、羽織、着物を取上げ、金財布も取上げ

太え奴でござるわえ〳〵

ト抱へたまゝ表へ出て

どなたもおやかましうござりました。
宅悦　斯う丸裸にされては、此方の勤めも
いろ　ちやァふうかえ。
直助　ふられたからは、遣らずともいゝわえ。
宅悦　ほんに今まで楽賞りの、藤八がざまは、奇妙。
藤八　誠に太々しい奴でござるわえ。
ト雑物を抱へ、藤八向うへ入る。與茂七この様子を見てゐて
與茂　成る程、金持ちは違つたものだの。一文無しの素浪人でも、親方の物を引摺り込んで、着物まで
剝がれるやうな事アねえ。金持ち〳〵と、金びら切つた商人が、立派な形だの。人の金で金持ち
といほうなら、お金蔵の番人は、みんな金持ち。盗人、騙りと云つたその身が、いま目前、ほん
の正銘、太盗人。ハテサテ、氣の毒千萬な。
そで　ほんに思へばあの金を、取らぬが仕合せ盗人の、既に同類、オ、、怖い事。
宅悦　カウ〳〵、裸でおらが内に、ゐられてはあやまるぜ。
いろ　早く出て行きなせえ〳〵。

直助　エ、、やかましい。今出て行くわえ。いま〳〵しい。とんだ所で躓つちゃ
與茂　恥と思はゞ逃げ支度。思へば汝まで無駄にする。
そで　山も見られぬあの姿。
與茂　此方は蚤から夫婦連れ。
そで　手に手を取つて
宅悦　お帰りなら、提灯を貸して上げませう。
與茂　アイ、そんなら提灯借用代。
ト懐から二朱出してやる。
宅悦　これは有り難うござります。
與茂　カウ、あんな者が内にゐるから、油断をしなさるな。
いろ　今に叩き出しますよ。
宅悦　ハイ提灯。
ト蔵の内と書いたる提灯を與茂七に渡す。
そで　サア、モシ、こちの人。

與茂　今宵は内でしつぽりと
直助　うぬ、これ見よがしに
與茂　羨ましいか。
直助　どうで今夜は
與茂　積る話しを
そで　道々二人が
宅悦　早く出て行け。
ト宅悦かゝる。直助、宅悦を殴り倒す。與茂七、お袖は門口で寄り添ふ。
直助　目當は提灯。
ト直助「ムウ」と行くを、お色、シヤンと門口を閉す。これを木の頭にして、よろしく　幕
禪のツトメにてツナギ、引返し。

本舞臺、向う一面栗丸太の垣、土手板、上の方に稻村、石地蔵、すべて觀音裏田甫邊の道具、爰に、
づぶ六、泥太、顧鐵、以前の茣かぶり。庄三郎、同じ形にて、皆々酒を飲んでゐる。禪のツトメにて

幕明く。
づぶ　なんと、今日のやうな仕事が毎日あればいゝ。
泥太　一人前二朱づゝの立前サ。
庄三　いゝ仕事をしたな。おいちにも汰沙なしに。
顧鐵　それだからこんなに奢るのだ。
づぶ　てめえの仲間入りの時も、矢ッ張りこんなに奢つたぜ。
泥太　これ見や、これが二升目の酒だ。素人でもこんなに奢るものはあるめえ。
顧鐵　ナテあるものか。昔の紀文大盡でも、おいらにやァ叶ふめえ。看を見やな。
づぶ　なんだ、鰯だな〳〵。
顧鐵　鰯も野暮に身ばかりはないワ。あら煮だワ。
泥太　さうサ、素的なあら煮だな。あんまり叮嚀に身を取つてしまつたな。
づぶ　その代り、どんないゝ女がしやぶつた骨かも知れねえ。
庄三　そりやァ大方、富士屋のお剩りだらう。先刻見てゐたら、鼻の缺けたカサかきがしやぶつてゐたッけ。

づぶ　エヽ、碌ない事を云ふな。おらア穢ねえ事を云ふと、ぢきに胸が悪くなるわえ。

泥太　ざまを見ろ。てめえの形が綺麗な形か。

づぶ　それでもおらア綺麗好きだ。決して捨てゝある菰は着た事がない。しつけのかゝつた新しい菰ばかりだ。

顔鐵　菰にしつけがかゝつてるものか。

泥太　體にしつけがあるといふのだ。

庄三　こいつは違えねえ、大笑ひだ。

一同　ハヽヽヽヽ。

づぶ　大笑ひか中笑ひか知らねえが、なぜみんなおれを安くして笑ふよ。太平樂ぢやアねえが、この仲間ぢやアおれが一番古いワ。腹からの宿なしだ。憚りながら田圃のづぶ六さんといつちやア、人に知られた宿なし樣だ。あんまりこめてくれるな。

一同　ソリャづぶが、怒つた〳〵。

泥太　なんだ此奴らア

ト無性に腹を立てゝゐる。

顔鐵　ヤアー、小屋の始めの一踊り、づぶ六踊りが所望ぢやが、合點か。

一同　オヽサナチヤ合點だ。

ト皆々、づぶ六の手を待ち添へ、踊りながら下座へ入る。

庄三　ハテ、騒々しい奴らだ。

ト思ひ入れあつて、あたりを見て

今日晝間地内にて、とり落した廻文狀。その時來合せた與茂七どの、どうぞ安否が聞きたいものだが。

ト時の鐘、合ひ方になり、向うより與茂七、プラ提灯を提げて出て來て、透かし見て

與茂　庄三郎が居る所は、慥か爰ら。

庄三　さういふ聲は與茂七どのか。

與茂　庄三郎どの……コレサ、嗜みめされい。いかに若いといひながら、最前とても思案もなく、高野の家の侍ひに、身の上を悟らるゝやうな事。畢竟、身共が參り合せたればこそよけれ、重ねて氣を附けさつしやるがようござる。

庄三　御厚志の御意見、恭うござる。併し鬱憤忘れかね、思はず知らず

與茂　それも尤も。御主人御無念の程、朝暮忘れぬ我れ〳〵なれば、かゝる姿も皆忠義。

庄三　それにつけてもその砌り、とり落したる義士の廻文。

與茂　その廻文も身共が所持。これより直ぐに某は、鎌倉表へ立ちこえ、それより都山科へ通達して、思ひ〳〵に出立の、支度を知らするこの廻文。

庄三　鎌倉へお出でとあらば、敵の近邊、身の上を悟られぬやう、拙者が姿と

與茂　成る程、非人の姿となり、貴殿は江戸に徘徊なす、一味の者へ

庄三　最前聞きたる屋敷替への趣き、花水橋の向う河岸へ引移るとある、この旨いち〳〵知らすでござらう。

與茂　然らば姿を變へ〴〵に

ト手早く着類を脱ぎ、庄三郎の襤褸と着替へ、庄三郎も與茂七の衣裳を着て

庄三　この提灯は

與茂　非人に提灯はいらぬ物。これも貴殿へ

庄三　然らば與茂七どの

與茂　後して面會

庄三　隨分御無事で

與茂　お別れ申す。

ト與茂七は、菰を冠り、よろしく向うへ入る。庄三郎、こなしあつて

庄三　これにて先づは一つの安堵、……併し急に違つたこの姿、仲間の乞食どもが見附けたら又面倒。少つとも早く今の内に、さうぢや〳〵。

ト庄三郎は頷いて、下座へ入る。すぐに向うより四谷左門、最前のまゝの形で出てくる。跡より伊右衛門追ひかけ出て

伊右　アイヤ左門どの、お待ちなされい。しつこく申すやうでござるが、お岩ことも身ごもつてまで居る仕儀でござるゆゑ、勘辨下されて、どうぞ此方へお返しなされて下されい。

ト左門、ちよつと振返り、知らぬ顔して行きかける。

左門　待たッしやい。一言の挨拶もなく、近頃無禮でござらうぞ。

伊右　無禮といふ事、よく知つてゐさつしやるな。身共が物を申さぬは、一旦娘をやつたよしみ。親の氣に入らぬ婿ゆゑ、取返したあのお岩。幾度云つても御返答は、ならぬといふより外は無い。それゆゑ無駄に物は申さぬ。こなたも若い者のやうにもない、女一人ではあるまいし、しつこく云

はずと、思ひ切つたがよいわサ。

伊右　すりや、どのやうに申しても

左門　君子に二言なしサ。

伊右　貴様が君子か。ハヽヽヽヽ、君子はその罪を憎んでその人を憎まず。よしや手前に不始末な事がござらうとも、そこが親身。若い者ゆゑ、意見を云つて下さつてもよさゝうなものを、僅かな事を云ひ立てに、娘を引揚げ、苦しまぎれに、遊女はしたにでも賣る心か。大概そこらでござらうがの。

左門　ハヽヽヽヽ。成る程、おのれの心に引くらべ、大事な娘を添はしておいたら、おのれこそ夜鷹にがな賣りこくるであらう。それが不便さ二つには、盗人根性のある者を、縁家にしてはこの身の穢れ。

伊右　なんと。

左門　云へば云ふ程その身の破滅、年寄りは悪い事は云はぬ程に、諦めてしまはつしやれサ。

伊右　イヤ諦めぬ。一旦武士が云ひ出した事、刀にかけても。

左門　刀にかけて、どうおしやる。

伊右　最前といひ、今といひ、あくまで身共をさみする老ぼれ。女房の縁に繋がりやこそ、舅あしらひもモウこれまで。娘を返さぬ上からは、他人の左門、打果すのが武士の意地。

左門　年は寄つても四谷左門。ナニやみ〳〵とお身達に

伊右　その舌の根を

ト白刃を抜いて切りかける。左門も抜き合せ、立廻り。左門、手ひどく切りつける。伊右衛門あしらひかれ、石地蔵のうしろへ廻る。左門、及び腰に切らうとする。この時、伊右衛門、石地蔵を突き倒す。左門の足にあたり、拯となる。すかさず左門を一かせ切る。よろしく立廻りあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、一面のまさき垣、上の方、富士權現の賽錢箱、すべて裏田圃の道具、爰に直助、頬かむりにて、與茂七の衣裳を着たる庄三郎を出刃にて刺し殺してゐる。時の鐘にて道具とまる。

直助　戀の敵の佐藤與茂七、宵の意趣、思ひ知つたか。

ト止めを刺し

後日に見咎められぬやう、面の皮を

ト持つたる出刃にて面の皮をくり
刃物があつては
ト思ひ入れあつて、垣根の中へ刃物を隠す。バタ〳〵にて下座より、左門、朱に染まり、出る。跡より伊右衛門、抜刀にて出で、ちよつと立廻りあつて左門を切り倒し、止めを刺す。

伊右　強情ぬかした老ほれめ、刀の錆は自業自得。ハテ、いゝ態だわえ。

ト直助、伊右衛門を透して見て

直助　さういふ聲は、たしか民谷どの。

ト同じく直助を透して

伊右　奥田の下部直助か。どうして爰へ。

直助　戀の意趣ある佐藤與茂七。たうとう爰で

伊右　女房の親の四谷左門、お岩を返さぬその上に、國で盗んだ用金を、氣取つた老ぼれ、後日のさはり、それゆゑ是非なく

直助　丁度揃つた人殺し

伊右　よく似た事もあるものだ。

トこの時向うより、足音するゆゑ、二人とも小隠れする。時の鐘、合ひ方になり、向うよりお岩、手拭をかむり、安下駄をはき、糸立てをかゝへ、辻君の姿にて出て來り

いは　もう餘程夜更けであらうに、このマア父さんは何をして、歸りの遅いことやら。お年の上といひ、宵からの胸騒ぎ。急に案じられるゆゑ、お迎ひに出て見たが、どこにお出でなさんすことやら。

ト云ひながら舞臺へ來る。下手よりお袖、小提灯を持つて走り出て來て、思はずお岩に突きあたり

そで　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。心の急く者でござります。

いは　ヤ、其方は妹ぢやないかいなう。

そで　オヽ、姉さんかいなア。

ト お岩の姿を見て

お前マア、味いな形をしてゐなさんす。殊に夜更けといひ、只の身でもないのに、冷えては悪いぢやござんせぬか。さうしてマア、なんぼ別れてゐればとて、夫のある身で、賤しい辻君のいは　アヽコレ、滅多な事云やんな。……成る程、朝夕貧しい暮らしをするゆゑ、其やうに思やるも尤も。又わしが此やうな物を抱へてゐるゆゑ、猶更さう見える筈ぢやが、先刻に内を出るとき、少しばら附いてゐたゆゑ、傘はなし、それでこれを……マア〳〵、わしよりは其方の身の上。お屋敷

に居る自分、與茂七といふ云ひ號けがありながら、この頃聞けば、味な勤めとやらに出やるげな。

そでエ。

いはなんぼ貧しい暮らしをしても、武士の娘があらう事かと、サア、表向きでは云はねばならぬが、そこを云はれぬわしが身も、有やうは、其方の推量の通り、賤しい業を勤めるも、年寄つた父さんが、貧苦の上にわしらへ氣兼ね、現在娘の姉妹にも隱して、朝夕觀音樣の地内へ出て、一錢二錢の袖乞ひなさるゝといなう。お留め申すも、隱してお出でなさるゝ所へ、其やうな事云うたら、面目ないとて、もしひよつと……ほんに日頃の御氣性ゆゑ。そこでわしが思ふには、内の事さへ相應に廻つたなら、父さんの御苦勞もやむであらうと、思ひ附いた辻君も、肌は觸れねど釋云うて、矢ッ張り袖乞ひ同然な、今の世渡り。

そでわしも同じその心で、父さんにもお前にも、隱してこの頃二三度は、恥かしい事に出ますけれど、それが勿怪の幸ひやら、今日云ひ號けの與茂七さんに、不思議にお目にかゝつて、いろ〳〵話しのその上にて、又どこへやら行かしやんしたゆゑ、その跡慕うて爰まで來る道、どうやら頻りに胸騷ぎ。

いはムウ、さう云やれば、わしも父さんの歸りが遲いゆゑ、矢ッ張り胸騷ぎ。なんぞ兇事がなければ

よいが。

ト此うちお袖あたりを見て

そでエ、モ、氣にかゝる所へ、それ〳〵姉さん、お前の側へも、血がこぼれてゐるわいなア。

ト提灯を出す。

いはエ、モ氣味の惡い……オ、、大さうな血ぢやわいなア。

トあたりを見て、お岩は左門の死骸、お袖も庄三郎の死骸を見つけて思ひ入れ。

いはヤア、そりやこそ父さん

そでヤ、、覺えの召し物、印しの提灯、與茂七さんもこの所で

兩人こりやマアどうせう、どうせうぞいなア。

ト兩人よろしく泣き伏す。この時、伊右衞門、直助、そつと兩花道へかゝり、窺ひゐる。お岩、左門の死骸を抱きおこし

いは申し、父さんいなア〳〵、氣を確かに持つて下さんせ。敵は何者でござんす。コレイナア、物云うて下さんせいなア。

そでほんにマア、父さんといひ夫まで、一つ所であへない御最期。

いは　時が延びたか、もう死に切つて、今際の際の一言さへ、叶はぬ事か、淺ましい。

そで　ほんに果敢ない

兩人　別れぢやわいなァ。

ト兩人大泣き。この時、伊右衛門、直助、バタ〳〵と足音をさせて駈け來り

伊右　夜陰に何やら女の泣き聲……ヤァ、わりや女房お岩ぢやないか。

いは　ヤァ、お前は伊右衛門どの、父さんが殺されて居ますわいなァ。

伊右　ヤァ、こりや舅どのを何者が、……エヽコレ、今一足早くんば、おめ〳〵とは討たすまいもの。

エヽ、殘念千萬な。

直助　此方に居るのはお袖さんか……ヤァ〳〵、こりやァ先刻見覺えのある提灯といひ、さては與茂七どのは

そで　父さんと同じ所で此やうに

直助　オヽ〳〵〳〵、これは大變々〻。

伊右　すりや、お岩が妹の云ひ號け、佐藤與茂七もこの所で……察するところ舅の身の上、危ふい所へ駈けつけて、助太刀せんと思ひし與茂七、却つて共に討たれたに違ひあるまい。さすれば討ちし

曲者は、餘程手だれと見えるわえ。

ト此うち直助、思ひ入れあつて

直助　南無阿彌陀佛。

ト伊右衛門の脇差にて腹切らうとする。伊右衛門とめて

伊右　ヤァ、其方は奥田の下部直助、何ゆゑ切腹。

直助　サァ、切らねばならぬこの身の云ひ譯。安い奉公する者は、心も惡く現在の、御家中の娘御、これなるお袖樣に横戀慕、云ひ號けの與茂七樣の、ある事まで知つてゐながら、金ぴら切つてこのお子を、無理に口說いた罰が當り、宵に思はぬわしが耻。二言三言云ひ合つた、揚げ句に切られた與茂七樣。わしに疑ひかゝらにやならぬ。わしも宵には與茂七樣を、恨んで見たが、よく〳〵思へば、忠義一圖に凝り固まり、二君に仕へず、貧しい浪人してござる、各〻樣をよい事にして、色にせうの何のと、思へば〳〵勿體ないと、前非を悔いてせめてもの、その云ひ譯に來かゝるこの場。思ひがけない横死の樣子。それだに依つて

伊右　成る程、さう聞いては其方が身に、疑ひかゝると思ふも尤も、また疑ふまいものでもないが、其方は刃物帶した物も持たず、舅といひ與茂七どの、二人の死骸、中間小者の其方の手で、やみ〳〵

と討たるゝやうな人達でもない。そこを思へば、其方の業でないは明白なれど、さほど本心に返り、前非を悔い、云ひ譯いたす所存なら、與茂七討つたるその敵、探し出してあのお袖に、討たしてやるが其方の潔白。

直助　それは下郎が願ふところ。この身の面晴れ二つには、お袖樣へ今までも、無理なじやら附き申した云ひ譯、この身を粉に碎いても、敵討の助太刀を

いは　つらい貧苦の其うちも、云ふに云はれぬ才覺して、一日送るも父さんを、少しも樂にさせましたいと、思ふばつかり。その父さんには敢へない別れ、なに樂しみに世の中に、生きてゐらるゝものぞいなア。

そで　さうでござんす。姉妹互ひに隱し合うて、つらい苦しい恥かしい、苦勞をしたのも皆無駄事。とりわけ戀しい與茂七さんに、逢うて嬉しと思ふ間も、なき別れとは情ない。いつそ逢はぬその前に、死んだと聞いたら諦められう。夢見たやうな女夫の緣。

いは　親の死骸のこの場にて

そで　夫と共に親子四人

いは　あの世へ一緒に

そで　さうぢや。

ト死骸の側にある刃物にて自害しようとするを、伊右衞門直助留めて

伊右　コリヤ、うろたへ者め。いま姉妹が自害して、親夫の敵は誰れが討つ。

兩人　エ、。

伊右　妹お袖は親夫、一度に別れてその悲しみ、死なうといふは尤もなれど、姉のお岩は現在の、夫を捨てゝ相果てなば、孝は立つても、操は立つまい。

いは　でも別れたる夫婦仲、今更どうも

伊右　サア、飽きも飽かれもせぬ仲にて、殊に姙娠、子まで儲けし女房を、何とて身共は身捨てやう。舅の心に叶はぬゆゑ、まづ逆らはず戻したが、死なれて見れば差あたり、去り狀やらぬ女房の親、この儘にも捨ておかれず、身共の爲にも舅の敵。

いは　そんならこれから伊右衞門どの、便りになつて親の敵

伊右　知れた事、女房が親は身共が親サ。

そで　成る程、相對で別れたとはいふものゝ、去り取狀らねば矢ッ張り女房。

伊右　親の敵は身共が討たす。氣遣ひせずと、身共と一緒に

そで　飽かぬ仲の元々へ、お歸りなされて父さんの、敵の助太刀、力になつてやらうとは、お羨ましい
　　お二人さん。
直助　ハテ、今もわしが申す通り、與茂七樣を討つたる敵、尋ねてお前に討たせねば、この身の潔白濟
　　みませぬ。どうぞそれまでお前の命、わしに預けて下さりませ。
そで　それぢやというて、これまで愛想をつかしたこなさんを
直助　サア、そこが前非を悔いたる直助、善心になるからは。是非ともお前のお力に
伊右　直助が申す通り、兎角悲しい辛抱も、つゞまる所は夫の爲、首尾よく敵討つまでは、その直助と
　　假りの夫婦に。
そで　エヽ。
伊右　サア、それが卽ち世を忍ぶ、世間の思惑、敵に油斷さする手立て。
そで　でも直助どのと假初めにも、夫婦とよんでは、未來の夫へ
直助　立たぬも道理、さりながら、夫婦といふは人目ばかり、志ばかりがわしが潔白。
そで　それでも、どうやら
いは　アヽコレ妹、うはべばかりの夫婦になりや。姉が願うても、結んでほしいこの緣組み。直助どのと

やらの先刻の詞も、嘘か誠か側にゐて、とつくり敵を糺したなら、敵も矢ツ張り……サア、つい
ちよつと知れる手がゝりが、あるまいものでもない程に、姉が詞に從うて、假りに夫婦にナ、ソ
　　レ、なつた方がよからうぞや。
　　ト呑みこませる。
直助　エヽ。
そで　うはべばかりの、そんなら夫婦。
伊右　それで互ひに
いは　力と便り
そで　とは云ふものゝ、これがマア
いは　諦められぬが女氣の
伊右　それも尤も。
直助　併しいつまで云つたとて
伊右　盡きぬ名殘と
いは　盡きせぬ緣。

そで　鶯書の袋にひきかへて
いは　心の剣羽。
直助　やがて本望。
ト兩人につこり思ひ入れ。この時、最前の、づぶ六、泥太出て
づぶ　人殺しめ。
泥太　さてこそてめえは
ト兩人へかゝる。伊右衛門は拔討ちにづぶ六へ一刀浴びせる。直助は泥太の腕を捻ぢ上げ
伊右　敵討ちと婚禮の、門出の血祭り。
直助　假初めながら祝言の
伊右　これが卽ち色直し。
そで　涙の杯。
いは　さん〳〵くどい
直助　エ。
いは　くり言ながら

ト死骸へ思ひ入れ。
伊右　どうやら、斯うやら
直助
ト兩人顏見合せ、につこりと舌を出す。お岩、お袖は死骸へ取りつく。
いは　思へば果敢ない
そで
ト伊右衛門、直助、非人を見事に投げる。お岩、お袖は手を合せて拜む。双方よろしく顏見合せ
いは　ハア、。
そで
ト泣き落す。伊右衛門直助は、指先きにて「ヨイ〳〵〳〵」とめる思ひ入れ。これをツナギにて、
ひやうし

幕

二幕目

雜司ヶ谷四ッ谷町の場
伊藤喜兵衛内の場

役名――民谷伊右衛門。秋山長兵衛。關口官藏。中間、伴助。伊藤喜兵衛。同娘、お弓。同孫娘、お梅。同乳母、お槇。按摩、宅悅。小平父、佛孫兵衛。利倉屋茂助。民谷小者、小佛小平。伊右衛門妻、お岩。

本舞臺、三間の間、平舞臺、正面のれん口、下手に杉戸の押入れ、よき所に床の間、上の方障子、内に蚊帳吊つてあり、六枚屏風にて、いつもの所に門口、一體に造作そこれし家作、雜司ヶ谷四ツ谷町、民谷伊右衞門浪人住居の體、四つ竹節の合ひ方にて幕明く。

ト爰に伊右衞門、浪人の形にて、仕入れ提灯を貼つてゐる。下の方に孫兵衞、木綿やつし、老けたる拵へにて、うづくまつてゐるを、按摩宅悦、執成してゐる體、よろしくあつて

宅悦　モシ〳〵、伊右衞門樣、左樣ではござりませうが、そこが御料簡でござります。

孫兵　どのやうにもお詫び申しまするほどに、いま一兩日の所を

伊右　イヤ〳〵、待つ事はならぬ〳〵。いはゞあの小平めは、取り逃げ、駈落ち。捕へ次第身共が手討ちにせねば、腹が癒えぬわえ。此やうな賃仕事いたしをるも、浪人ぐらしのコリヤ慰みと申すものぢや。御主人が榮えてゐらるれば、鹽冶の家中、民谷伊右衞門、きつと致した侍ひぢやぞ。なんと心得て居るのぢや。返答次第で、年寄りとは云はさぬぞよ。

ト細工を仕かけて立ちかゝる。

孫兵　ヘイ〳〵、御尤もでござります〳〵。どのやうに仰しやりましても、此方に一言の申しやうもござりませぬ。小平めが不屆き、只今も仰しやります、取り逃げいたした代物は、マア何々でござ

ります。

伊右　何と申して、おのれらが存じた品ではないワ。この民谷家に先祖より、持ち傳へ居るソウキセイと申す唐藥。こりや外には少ない藥種、腰膝ぬけたる難病にも、忽ち眼前の不思議。浪人の身の不自由ながらも、外手さへ渡さぬ品、それを盜んで駈落ちひろぎ、コレ

ト粗末な脇差を出し

このがたく〳〵丸を忘れてうせた。彼奴が雜物といふはこればかりだ。近所の衆も氣の毒がつて、今朝早々、小平めが行くへの詮議。おれも常なら駈け出すが、何をいふも折惡う、女房の初產ゆゑ、人手が欲しさ、雇つた小平め、却つて主に手を煩はせる。思へば〳〵腹の立つ。捕へ次第に、左樣心得うせをらうぞ、

ト叱りつける。孫兵衞思ひ入れ。

宅悦　御尤もでござります〳〵。按摩とりのわしが口入れで、雇ひに抱へた小平が駈落ち。折惡いお內儀の初產が、血が納まらないで後の御病氣。その中での駈落ち。誠にわしが旦那へ云ひ譯がござらぬ。親仁どの、こりやマア貴樣は、何と思はつしやる。

孫兵　イヤモウ、何と申してようござりませうやら。併し常から私しが悴ながらも、正直者の役立たず、

殊に取り逃げ駈落ちの、持つて參つたその品は、あなた樣の御先祖から、お家に傳はるその藥種。

ア、、何とも以て

ト考へる。

宅悅　錢金は取り逃げの當り前。藥を持つて駈落ちは

孫兵　そんならもしや、古主の御病氣、あなたへ用ゆる心から、そのお藥を

伊右　どうしたと。

孫兵　へイ〳〵、憎い奴でござりまする。

伊右　コレ親仁、今申したソウキセイは、僅かな物と思はうが、世間に稀れなる代物ゆゑ、藥種問屋へ持つて行つても、十兩や二十兩には直きなるワ。先祖よりの添へ書、お醫者方の鑑定もある、相違ない代物だ。併しそれほど願ふ事なら、其方に免じて、一兩日の日延は致しくれう。その內に行くへ知れねば、藥種の代り、代金を持參いたして、その上に濟ましてくれうぞ。左樣心得、歸れ〳〵。

孫兵　ハイ〳〵、それは有り難うござりまする。只今からきつと尋ね出しまして、その上お詫びを申しませう。これはお前、いかい苦勞をかけまする。

宅悅　イヤモウどうも、迷惑ながら掛り合ひ、誠に人の世話は、こゝが怖いて。

トこの間に孫兵衞、草鞋を穿き、身拵へする。

伊右　併し彼奴が宅は、どの邊であつたな。

宅悅　エヽ、深川の寺町邊でござりますれば、誠に遠方でござりまする。……歸りがけでも氣を附けて尋ねながら行かつしやいよ。

孫兵　イヤモウ、その心懸けでござりまする。左樣なら旦那樣、お暇申しまする。

伊右　一兩日にきツと詮議して參れ。さもないと、われもその分ではさしおかぬぞ。

孫兵　ハイ〳〵、畏まりました。宅悅樣、御厄介にござりまする。

宅悅　氣を附けてござれよ。

孫兵　ハイ〳〵。

ト門口へ出て、ちよつと考へ

常から正直な小平め、取り逃げしをるとは、誠にこれが、子は三界の首枷、とはいふものゝ、藥

とあれば、テツキリお主の

ト思ひ入れ。

宅悅　またござらぬか。

逃兵　ハイ、おやかましうございました。
　　ト唄になり、孫兵衛、菅笠を持ち、思案しながら向うへ入る。
宅悦　さう云つてもあの親仁は、氣が氣ではあるまい。
　　トこの時蚊帳の中にて手を打つ音する。
　ハイ〳〵、お藥かな。
伊右　氣を附けて下さいよ。
宅悦　畏まりました。
　　ト屏風の中へ入る。伊右衛門思ひ入れあつて
伊右　この無けなしのその中へ、餓鬼まで產むとは氣のきかねえ。これだから素人を女房に持つと、こんな時に亭主の難儀だ。
　　ト小言を云ひながら又仕事にかゝる。宅悦出て來て
宅悦　サア〳〵、藥だ〳〵。溫めてあげませう。
　　ト七輪へ土瓶をかけて煽ぐ。
伊右　お岩の藥か、產れ子の藥か。

宅悦　イエ〳〵、お岩樣のでございまする。あの子はグッとも仰しやらぬ、鷹揚なお子樣だ。誠にお前によう似て、爭はれぬものでございまする。
伊右　ナニ、おれに似てゐるか。
宅悦　左樣でございまする。
伊右　親に似たなら、定めし目玉が思ひやられる。
宅悦　ハヽヽヽヽ。
　　ト思ひ入れ。角兵衛獅子の合ひ方になり、向うより秋山長兵衛、さんすゐなる形、大小にて走り出て來り、門口より
長兵　伊右衛門どの、お宅か〳〵。小平めを見附けて來た〳〵。
伊右　これは秋山氏、見當りましたか。
長兵　左樣々々。まづ心當りは下町邊と存じつき、わしの身寄りが築地にあるゆゑ、あの邊まで參り、新堀通りにかゝる道にて、見當りました。なんでも彼奴は、深川邊へ參ると見えました。
伊右　深川は彼奴が親の內でござる。今まで親仁も呼び附けておきました。
長兵　オヽ、左樣か。イヤ、何よりは貴殿が苦勞にさしつたソレ、持つて逃げた藥はこれでござらう。

ト木綿の小風呂敷に包みし薬包みを渡す。

伊右　これは／／。誠にこれが返れば安堵します。して小平めは

長兵　アレ／／、あそこへ官藏どのが引ッ張つて参つた。

ト また角兵衛獅子の鳴り物になり、向うより官藏、浪人、伴の形。伴助、中間にて、小平をグル〳〵巻きに縛り、髪も亂れ、着類も破れし體なるを、二人して捨ぜりふにて手荒く引摺り來る。

小平　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

官藏　御免といつて濟むものか。

伴助　うぬァ太い奴だなァ。

ト 此やうなセリフ云ひながら舞臺に連れてくる。

官藏
伴助　サァ入りやァがれ。

ト 内へ引摺り込む。

伊右　これは官藏どの、御苦勞千萬。秋山氏に樣子を承つてござる。何かと忝う存ずる。オヽ、伴助か、大儀であつたなァ。

伴助　ヘイ〳〵。モシ旦那、御安堵でござりませう。

官藏　コレ、伊右衛門どの、身共なぞが出まするとて、直きに斯樣ぢやて。懐中に彼の一藥を持つてゐましたが、誠に見掛けに依らぬ大い奴でござる。

宅悦　コレ／／、てめえゆゑにナ、おれまでが難儀をするワ。コレ、今まで親仁を呼び附けておいたが、マァ〳〵てめえ、どういふ心になつたのだ。

ト これにて小平、やう〳〵顔を上げ

小平　口入れして下すつた、お前にまでも苦勞をかけまする。フトした出來心。左樣なら、親仁も參つて歸りましたか。ア、氣の毎や、さぞ案じませう。申し、旦那樣、持つて走りましたお藥も、長兵衛樣がお取上げなされました。もう〳〵、外に何も取りました品はござりませぬ。どうぞ御勘辨の上、穩便にお願ひ申しまする。

ト 思ひ入れ。

伊右　ナニ、穩便に致してくれろとか。イヤ、此奴不屈きな事をぬかすな。おのれが取り逃げ駈落ちを、主のおれがナニ穩便に致すものか。誠に此奴、呆れるほどな太い奴だ。

官藏　左樣々々。殊に常から此奴が申すを聞けば、此奴が古主は鹽冶の家中、お手前が朋輩、小汐田又之丞が小者との事。親仁は勿論、女房子までござるとの事。誠に人は見かけによらぬものでござる。

伴助　左樣でござりまする。聞けば此奴の内に、その又之丞どのとやらが、居候ふにゐるとの事。
伊右　何といふ。同家中であつた又之丞が、こいつ小者か。ヤイ小平め、おのれ、いよ〳〵左樣か。
小平　ハイ〳〵、それに違ひはござりませぬ。私しが親元は、又之丞樣の御家來筋。御恩を受けしお主樣は御浪人の上、この間は御難病。それに附き私しが雇ひ奉公。女房、悴親仁まで、皆それ〴〵に賃仕事やら商ひやら、貧な中へ主人の御病氣。その御用にも立たうと存じたゆゑあのお藥。全く惡氣では致しませぬ。主人の爲と忠義の盜み。捕へられたは誠に天命。旦那樣、どうぞお助けなされて下さりませ〳〵。

ト いろ〳〵に詫びるを聞いて

伊右　そりや何か、われが古主の又之丞が病氣につき、おれが家に持ち傳へた一藥を盜み取れと、又之丞がわれに賴んだのか。
小平　イエ〳〵、毫頭主人は存じませねど、こりや私しが出來心で
伊右　出來心であらうが、忠義であらうが、人の物を盜まば盜人。忠義で致す泥棒は、命を助けるといふ天下の掟があるか。たわけ面め。一藥も取り返し、取り替への金子さへ返せば助けてやらう。その代り、おのれが指を一本づゝ折つてしまふワ。

長兵　これはよい慰みでござらう。然らば十本の指を、殘らず折つて見ませうか。
官藏　金の代りに指十本。イヤハヤ廉いものでござるな。
伴助　私しも稽古の爲に、折つて見ませう。
長兵　サア〳〵。手傳へ〳〵。

ト 皆々小平に立ちかゝる。宅悦、捨ぜりふにてとめる。小平思ひ入れ。

小平　ア、モシ〳〵、この上指を折られましては、手が不自由となり、お主や親を過す事が出來ませぬ。
三人　それをおい等が知るものか。
小平　お慈悲でござりまする。どうぞこの儀は
長兵　エヽ、やかましい。猿轡でもはめさつしやい。
三人　合點だ〳〵。

ト 三人立ちかゝり、伴助、手拭を取つて、小平の口をゆはへて

伊助　これでようござりまする。
長兵　まづ手初めに鬢の毛を拔け。
官藏　こいつはよからう。

ト立ちかゝつて、小平が小鬢の毛を抜き、莫を吹きかけ、いろ〳〵さいなむ。唄になり、向うよりお槙、前幕の乳母にて、供の中間、隅田川の酒樽と、重詰め物を持ち出て來り、門口へ來て

まき　ハイ、お頼み申しませう〳〵。

三人　ア、、誰れか來たぞ〳〵。

伊右　客とあればその下郎、押入れへなりとぶち込め。

三人　合點だ〳〵。うしやアがれ。

ト杉戸を明け、小平を打込み、戸をさす。此うち宅悦出迎ひ

宅悦　ハイ、どれからお出でなされました。

まき　ハイ、御隣家の伊藤から參りました。お取次ぎの儀を

ト云ふを長兵衛聞きつけ

長兵　ア、、伊藤からのお使ひか。……オ、、お乳母のお槙どのか。サア〳〵此方へ、入りやれ〳〵。

まき　ハイ〳〵、左樣なら御免なされませ。

ト内へ入る。

長兵　伊右衛門どの、喜兵衛どのから使ひが來ました。

伊右　ア、左樣か。これへ〳〵。誠に御近所にあつて、御疎遠仕る。御主人にもお變りはないかな。

まき　有り難うござります。主人喜兵衛はじめ。後家弓ことも、よろしうお言傳を申しまする。承りますれば、御内室お岩樣が、御産ありしとおめでたきお噂。この品は、あまりお麁末にはござりますれど、お目にかけまする。また御酒とお煮染は、お夜伽遊ばしまするお方へ、お慰みのためお目にかけますと、遣はしましてござりまする。よろしくお頼み申しまする。

ト切溜めに煮染め。酒樽。三重の組重へ、切り餅、白味噌、鰹節の類の詰めたるを差出す。

伊右　これは〳〵、いつもながら御叮嚀に、誠に痛み入りまする。恭う存じまする。お入れ物は此方より持たせ遣はしませう。よろしく申して下され。

まき　畏りました。……また一品の粉薬、これは卽ち手前隱居の家傳とござりまして、調合いたされまする血の道の妙薬、お岩樣へお上げなされても苦しうござりませぬと、わざ〳〵遣はしましてござりまする。

ト懐中より粉薬の包みを出す。伊右衛門取って

伊右　これはお心附かれ、恭う存ずる。早速に用ひませう。コレ、てめえ、白湯を仕掛けてくれろ。

伴助　畏りました。

ト別の土瓶へ水を入れてかける。この時、屋體の内にて、赤兒頻りに泣く。

まき　オヽ、やゝ様が、いかうおむづかり遊ばしまする。して、御男子でござりまするか。

伊右　左様々々。

まき　それはおめでたうござりまする。

ト此うち矢張り、見はせわつて泣く。

これはしたり、いかうおむづかり遊ばしまする。大方蚤がせゝりますのかも知れませぬ。私しが見てあげませう。

伊右　それは忝い。何分よろしく

まき　ハイ〳〵。

ト立ちあがり

コレ、こなたは先へ歸つて、申し上げてくりや。わしは只今歸りまするとお上へ申して下され。

中間　畏りました。左様なら御免遊ばしませう。

ト唄になり、お槇、風呂敷包みを持つて屏風の中へ入る。長兵衛、官藏、切溜めを出し、梅を引寄せ

長兵　伊右衛門どの、始めさつせえ〳〵。

伊右　ハテ、せわしない手合ひだ。

ト云ひながら、打寄つて酒を始める。角兵衛獅子になり、向うより茂助、大風呂敷を肩へ掛け、質屋にて出て來り、内へズツと入り

茂助　伊右衛門どの、お留守かな。

伊右　イヤ、宿に居る。

茂助　これは珍らしうお宿ぢやな。此方からお宅かと云ふと、留守と云はつしやるから、お留守かと云つたら、お宿とは珍らしい儀でござりまする。モシ、伊右衛門様、この間からお貸し申しました蚊帳蒲團に、搔卷まで、代りも來ぬのに上げましたが、あの損料の元利〆め高二分二朱、サ、勘定なさるとも、品を返さつしやるとも、方附けて下さりませ。又その外に、去年中から不義理なあれなりの五両の一件、サア、片附けてもらひませう。しないと今日は、この地面のお屋敷へ、斷つて出ねばなりませぬ。サア、どうでござります〳〵。

ト せき立てる。伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　これはしたり、この間は取込みがあるゆゑ、挨拶も延引いたすが、いづれ近々のうちに

茂助　イエ〳〵、待ちませぬ〳〵。左様なら是非がない。御地面のお屋敷へお斷り申して

ト行かうとする。皆々とめて

長兵　コレサ、おいらが請け合つたからは、あの一件は

茂助　イエ〳〵、お前様方のお請け合ひ、これまで一つも解りませぬ。お構ひなされますな〳〵。

ト行かうとするを、伊右衛門、思ひ入れあつて

伊右　利倉屋待ちやれ。

茂助　エ。

伊右　五兩の勘定、致してやらう。

茂助　エヽ、左様ならアノ五兩を……サア、受取りませう。

伊右　イヤ、その金は無いが、その代りにはこれを渡さう。

ト薬包みに、鑑定書、残らず附けて渡す。

茂助　モシ、これは何やら薬の包み。アヽ、これが、五兩の抵當になりまするか。

伊右　その唐薬は民谷の先祖、持ち傳へたるソウキセイ。賣り買ひなれば二十兩、それ以上にもなる薬種、相違のないはその添へ書。さる奥醫者の鑑定もある。不請であらうが利倉屋茂助、五兩の代りに預かつてくりやれ。

ト茂助、薬包みをよく〳〵見て、

茂助　成る程、お醫者方の御判の据つたこの唐薬。さう仰しやれば違ひもあるまい。幸ひ私しが下質を送る、深川の金子屋、亭主は以前薬種屋あがり、それへ見せたその上にて

伊右　わづか五兩だ、預かつておきやれ。

茂助　そんならこれはマアこれで

ト懐中し

これからは入れ替へへの代物、蚊帳と蒲團を持つて行きます。御免なされませ。

ト立ちかゝる。

伊右　これはしたり、まだその外に借り着の品を

茂助　あの二分二朱の勘定が濟まぬと、棚卸しが片附きませぬ。御免なされませ。

ト屏風へかゝるところへ、お槇出て來り、茂助をとめる。

まき　コレ、町人どの、産婦のお居間へぶしつけな。聞けば何やら金子のこと……コレ、それで大方ナ、その儘おいて

ト思ひ入れ。紙に包みし小判壹兩、ソツと茂助に握らす。茂助、思ひ入れあつて

茂助　ヤア、こりや小判

まき　サ、産所へ聞えて益ない事。それではこなさん。

茂助　アイ、云ひ分もござりませぬ。誠にこれは、大きにお世話でござります。

伊右　何やらかやら、度々のお心附け。お禮を申さうやうもござらぬ仕合せ。

まき　何しに左樣な。御心配御無用に遊ばしませ。私しはもう、お暇仕りませう。

ト門口へ行く。

茂助　左樣なら私しも、道までお供いたしませう。伊右衛門樣、唐樂の儀は、下質へ見せた上にて、その御返事を

伊右　何分預かつてもらはう……これはお乳母どの、よろしう賴みます。大儀でござつた。

まき　ハイ〳〵。あなた方も御ゆるりと。サア、茂助さんとやら

茂助　ドリヤお、暇申しませうか。

ト唄になり、お槇に茂助附き、向うへ入る。皆々思ひ入れあつて

長兵　コレ〳〵、民谷氏、あゝマア伊藤の屋敷から、こなたの所へ叮嚀に、折々の見舞ひ。一度は禮に行つたといつて

伊右　サア、さう思つても、あの屋敷へは、どうも身共は世間の手前で

官藏　そりや又なんで

伊右　ハテ、伊藤喜兵衛は高野の家中、今は町家のあの屋敷。この伊右衛門は鹽冶の浪人。それゆゑどうも肩身がすぼまつて

官藏　成る程、そこもあるわえ。

トこの時、上手の屋體にて、赤兒泣く。

伊右　よく泣く餓鬼だ。蚤でもくふのか。

ト障子を明ける。此うちに木綿蒲團を敷き、お岩、産後の體、蠶に苧を引かけ、赤兒を抱き、いぶりつけゐる。此うち合ひ方。伊右衛門見て

お岩、今日は心よいか、どうだ。

長兵官藏　見舞ひに來ました。

トお岩思ひ入れあつて

いは　有り難うござりまする。産後と申し、この間の不順な陽氣。その所爲かして、一倍氣持ちが

ト思ひ入れ。此うち、赤兒の上に、結構なる小袖かけあるを、伊右衛門見て

伊右　コレお岩、その小裁は見馴れぬ着物。そりやアおぬしが

いは　イエ〳〵、こりや今、喜兵衛様のお宅から、後家御様が内證で、わたしが方へ心附けて下さりました。お前、禮に行て下さんせ。

伊右　アヽさうか。あの内からは、氣の毒なほど物を贈るが、どうもおれは氣が知れぬて。

長兵　それだによつて、度々身共が申すはこゝサ。以前は以前、今は浪人民谷伊右衛門、敵同士の義理を捨て、あの屋敷へ行くがよからう。

いは　仰しやる通り隣家の事、どうぞお禮に行て下さんせ。

伊右　イカサマ、お岩が云ふ通り……すりや、ちよつと行かずばなるまいが、何をいふにも、おれ一人ではいは　お前その心なら、お二人を連れにして

長兵　さうサ〳〵、おいら二人が

官藏　行つて進ぜう。

伊右　そんなら直ぐに、思ひ立つ日を吉日と、行きませう〳〵。

兩人　さうさつしやい〳〵。

伴助　私しがお供を致しませう。

宅悅　お留守は私しが致しませう。ちよつとお禮にお出でなさるがようございます。

ト此うち伊右衛門、大小を差し、古き羽織を着て、支度をする事あつて

伊右　イヤ、行きは行かうが、今日はまだ飯を炊かずにおいた。コレ、てめえ、飯を焚いてくれめえか。

宅悅　ハイ〳〵、何でも致しませう。

伊右　併し、あの押入れの奴を逃がすなよ。コレ、これが彼奴の扶持方棒。

ト一本差を見せて

ほんに、この粉藥は、いま伊藤の屋敷から、お岩が所へ寄越さしつた血の道の藥、これを服むがよい。家傳だといふ事ぢや。

ト藥を渡す。

いは　左樣でござりまするか。いまお乳母どのが、その噂を致されました。爰へ下さりませ、白湯が沸いたら下さりませうが、モシ、お前は早う戻つて下さりませえ。

伊右　直に歸るわサ。サア行きませう。コレ、飯を頼むぞよ。

宅悅　心得ました。

伊右　行くぞよ、お岩

いは　アイ、必ず早う

伊右　何をしてゐるものか……サア、行きませう。

ト唄、時の鐘になり、伊右衛門に三人附き、向うへ入る。宅悦、奥へ入る。あと合ひ方、捨て鐘。お岩あと見送り、思ひ入れあつて

いは　常から邪慳な伊右衛門どの、男の子を産んだというて、さして喜ぶ様子もなう、何ぞといふと穀つぶし、足手まとひな餓鬼産んでと、朝夕にあの悪口、それを耳にもかければこそ、針の席のこの内に……ひよんな男に添ひとげて、辛抱するも父さんの、敵を討つてもらひたさ。

ト思ひ入れ。この時、頭に差したる鑑甲の誂への櫛落ちる。取上げ見て

こりやこれ、母様のお形見の、三光のこの差し櫛。物好きなされし菊重ね。胸に工風の銀細工。身貧な仲でも離さぬは、どうで産後のこの病氣、とても命も危ふいゆゑ、わしが死んだら妹に、せめて形見と贈るのは、母の讓りのこの差し櫛。これより外に、この身に附いた

ト思ひ入れ。この時赤兒頻りに泣くゆゑ、いぶりつけ〳〵、產所を離れ、よき所へ來り、よろ〳〵として

ア、、また眩暈がする。血の道の所爲であらう。この粉藥、マア、これなと服んで

ト合ひ方。蟲の音。時の鐘。お岩、件の粉藥を茶碗へあけ、土瓶の白湯を茶碗につぎ、服む事あつて

これで少つとは心持も直らう。ドリヤ、大事のやゝを

ト抱き取らんとして、俄に病氣起りし體にて、苦痛の思ひ入れ。

ヤ、、今の藥を服むと頻りに、常より氣持が……ヤ、、こりや顏が熱氣して、一倍氣合ひが……

ア、、苦しや〳〵。

ト思ひ入れ。宅悦、奥より何心なく出て來り

宅悦　モシ〳〵、お汁でも仕掛けませうかな。これはしたり、どうなされた〳〵。お前は、それ〳〵、顏色が變つて、どうやら樣子が

いは　今の粉藥を服むと其まゝ……ア、、苦しや〳〵。

宅悦　ナニ粉藥をあがつて苦しいとは、藥違ひではないか。マア〳〵、風にあたつては惡い。サ、、此方へござつて

トいろ〳〵介抱する。赤兒頻りに泣く。お岩苦しむ。宅悦、あちこちしてゐる内、押入れの戸をやう

やう明けて、小平出ようとするを見附け

ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ。

ト戸をたて、思ひ入れあつて

一方ふせげば又一方、二方三方、イヤ、とんだ留守を頼まれたわえ。

ト思ひ入れ。お若苦しむ。駈けよつて介抱する。時の鐘にて、道具、鷹揚に廻る。

本舞臺、三間の間、伊藤喜兵衛が宅、座敷の體。床の間、違ひ棚、よき所のれん。結構なる襖。下には生垣、枝折り門。よろしく飾りつけ、甚句の唄にて、道具とまる。

ト伊右衛門、上座に坐り、お弓、後家の形、お槇つき、銚子杯、鉢肴など取散らし、長兵衛、官藏、酒盛りの體。伴助、甚句を踊りゐる。二重舞臺よき所に喜兵衛、眼鏡をかけ、隠居の體にて、銅盥にて小判を洗ひ、箱にしまうてゐる。よろしく納まる。伴助踊り、ころぶ。皆々笑ひになり

長兵　イヤ、どうでも伴助は越後産れゆゑ、甚句はきついものだ。

ゆみ　とてもの事に秋山樣、何ぞあなたのお隠し藝を、拜見いたしたうござりまする。

長兵　イヤ、それは迷惑。身共が藝と申しては、聲色ばかりでござるて。

喜兵　それは一興。聲色は誰れを遣はつしやる。

長兵　矢張り築地（坂東善次）の聲色サ。

官藏　イヤ、貴公の築地も、あまり流行に遲れた。ちと外の者でもお遣ひなさい。

長兵　その外の者と申しては、然らば聲色のてんたくは、愛宕の下ではござらぬか。

官藏　何を云はつしやる。

ト笑ひになる。奥より若黨、吸ひ物椀を三人用意して運ぶ。

まき　お吸ひ物が宜しうござりまする。あなた方へ上げませうか。

ゆみ　さうしてたも〳〵。

ト お槇、三人へ膳を据ゑる。伊右衛門、喜兵衛へ目をつけ

伊右　イヤ御隠居、あなたのそれに洗うておいでなさるは、目貫の類でござるかな。

喜兵　イヤ〳〵、左樣の品でござらぬ。これは親どもより貯へ罷り在る小判小粒でござるが、折々錆が出まするゆゑ、金銀を洗ひまするが、隠居の役でござるて。ハヽヽヽヽ。

まき　サヽ、お麁末にはござりますれど、お吸ひ物にて御酒一献。

長兵　それは御馳走。時に伊右衛門どのへ膳が足りぬが、マア〳〵これなと

ト手前の膳を据ゑようとする。

まき　イエ〳〵、伊右衛門樣には、外に上げまするお吸ひ物がござりまする。マア〳〵あなた方、お麁

末ながら

三人　然らば御馳走に相成りませう。

ト銘々吸ひ物の蓋を取ると、中に小粒の金澤山入つてゐる。三人惚りして

長兵　このお吸ひ物は誠に珍物。

官藏　イヤ、恐れ入りました。

伴助

ゆみ　常から願ふ伊右衛門様を、御同道なされて下さりましたあなた方、どのやうに御馳走申しても、決していとひはござりませぬ。お心に叶ひましたら、槇や、お替へ申して上げや。

三人　それは何より御馳走でござります。

ト云ひながら皆々袂へ入れる。

喜兵　何れも方へ御馳走は申せども、肝腎の伊右衛門どのへは、ア、、何を馳走に

三人　その御馳走を、拜見いたしたうござるな。

まき　左樣御意なされまするなら、分けてあなたへ御馳走に

ト あたりへ心遣ひして

お二人樣は、少しの間お席を

ト こなし。兩人のみこみ

三人　心得ました。然らば此まゝ

ゆみ　お附き申して。

まき　サア、御案内仕りませう。

ト合ひ方になり、お横先に、長兵衛、官藏、伴助附添ひ奥へ入る。三人殘り、喜兵衛、洗つてゐたる小判を手箱にのせ、伊右衛門の前へ差出し

喜兵　伊右衛門どの、不躾ながらこの品、御受納なされて下されい。

伊右　見れば多くの金銀を、拙者が前へ差置いて、受納いたせとお云やるは、何か仔細の

ト思ひ入れ。

ゆみ　その儀はわたしが、只今これにて

ト合ひ方髮つてすんと立ち、お弓、奥より振り袖姿のお梅の手を取り、よき所へ坐らせ、思ひ入れ。

これなる者は、病死いたしたわたしの連合ひ、又市どのと二人が仲の、娘のお梅。

喜兵　これに居る身が娘の、お弓が腹に儲けましたる孫のお梅、どういふ緣か其許樣を、見染めました

が病ひの起り。養生の爲淺草へ、同道なして又ぞろや

ゆみ　思はずお見受け申してより、この子の喜び。サア、常々思ふ心のたけを

ト云はれて、お梅、恥かしき思ひ入れあつて

うめ　母さんの其やうに、心を附けてのおいつくしみ。何をお隱し申しませう。いつぞやより御近所へ、お宅替へなされし民谷様、どうした事やらお目もじの、その時フッと恥かしい、女心の一筋に、思ひ詰めたるこの身のわづらひ、明暮れ思ふが戀病みの

ゆみ　枕につかねど顏形、日にまし痩せるその様子。やう〳〵問へばあなたの事、忘れかねたる娘氣の

うめ　奥様のあるお前様、思ひ切らうと思うても、因果な事に忘れかね、せめてあなたの召仕へ、水仕奉公いたしても、わたしは大事ござりませぬ。どうぞお側に、お使ひなされて下さりませ。

ト恥かしき思ひ入れ。

喜兵　サア、お聞きの通り。ならう事なら聟に取り、梅が願ひを叶へてやりたさ。

ゆみ　あれ程までに思ひ染めし娘が心根。町人の身で暮らしなば、お岩様の手廻りにて、お使ひなされて下さるか、但しあなたの妾にも、遣はしたう思うても、武士の家にて世間の聞え。殊に連合ひ病死の上は、位牌の手前、どうも左様な

ト これにて伊右衞門、こなしあつて

伊右　委細の様子を承り、申しやうなき娘御の心根。いはゞ拙者も民谷家へ養子の入り聟、義理のある女房お岩、こればつかりは、氣の毒ながら

喜兵　然らば孫めが、斯程の願ひも

ゆみ　叶ひませぬも皆御尤も。この上は、わが身はあなたの事を

うめ　アイ、思ひ切ります。その證據は、爰でわたしは

ト帶の間より剃刀を出して

南無阿彌陀佛。

ト自害せんとする。皆々とめて

喜兵　こりや尤もぢや。其方が願ひが

ゆみ　叶はぬ時はとひきつめし、娘心も武士の胤。可哀や其方の願ひもこれでは

ト思ひ入れ。この時長兵衞出て來り、伊右衞門に向ひ

長兵　コレ、伊右衞門どの、こなたは大きな料簡違ひ。どうで死にかゝつてゐるあのお岩どの、遲いか早いか死んだ跡では、女房を持つは今の間だ。お二人の氣休めに、こなたはいつそ巢を替へる、その相談が、よさゝうなものだぞよ。

伊右　イヤ〳〵、この上有徳になるとても、お岩を捨てゝは世間の手前、こればつかりは出來ますまい。

トこれを聞き、喜兵衛思ひ入れあつて、伊右衛門の前へ坐り

喜兵　サア、伊右衛門どの、殺して下され。この喜兵衛めを、殺して下され〳〵。

伊右　お年寄りの突き詰めた樣子。この相談が調はねば、なぜ又殺せと仰せらるゝな。

喜兵　サヽ、そこでござる。孫めが事を不便に存じ、聟に取らうも女房持ち、アヽどうがなと工風をこらし、お弓にも知らさずに、身が覺えたる面體崩るゝ秘法の毒藥、お岩どのに服ませなば、忽ち相好變るゆゑ、その時こそは、こなたも、女房に愛想づかし、別れ引きにもなつたなら、後へ持たせるこの孫と、惡い心が出たゆゑに、口外せねど、先刻こなたへ血の道の藥と、内へ持たせて遣はしたるは面體變る大毒藥。併し命に別條なし。こればかりを取得にして、よもや罪にもなるまいと、お岩が所へやつたるが、事叶はねば身の懺悔、それだによつて殺して下され。

ゆみ　すりや其やうな恐ろしい、巧みの元もこの子ゆゑ

うめ　逆罰あたるはそりや眼前。

喜兵　こなたが得心ある時は、家の有り金殘らずこなたへ

長兵　その据ゑ膳を食はぬのは、こなたの料簡ちがひといふもの。

喜兵　サヽ、腹が立つなら殺して下され。

ゆみ　ぢやと申しても、あなたを爰で

うめ　いつそわたしが

ト死なうとするを、お弓とめる。

長兵　承知はねえのか。

伊右　サアそれは

ゆみ　死ぬるこの子を、どうぞ助けて

伊右　ぢやと申して

喜兵　然らば身共を

伊右　サアそれは

兩人　サア

伊右　サア、サア〳〵〳〵

喜兵　横しまながら

ゆみ　御返事を

ト思ひ入れ。伊右衛門、こなしあつて

伊右　承知仕りました。お岩を去つても、娘御を申し受けう。

喜兵　すりや御得心下されて

ゆみ　さすればこの子も

長兵　願ひが叶うて。

伊右　その代りには拙者もお願ひ。

喜兵　して其許の願ひとは

伊右　高野の屋敷へ推擧の程を

喜兵　承知いたした。お頼みなうても一家となれば

伊右　御息女もらへば聟舅、民谷の家名も、いつしか伊藤の

ゆみ　思ひ立つ日も今宵は吉日。

喜兵　内祝言も直ぐに今晩。承知でござるか。

伊右　いかにも承知サ。

長兵　まづ何よりはこれにて杯。仲人はこの長兵衛。コレ、お梅どの。へゝ、あやかり者め。

うめ　今更どうやら

ゆみ　流石初心な

喜兵　そりや、聟どのぢやぞ。

ト お梅を突きやる。伊右衛門へ倒れかゝり、恥かしきこなし。伊右衛門氣を變へて

伊右　女房でござる。變ぜぬ金打。

ト小柄をとつて金打の體。兩人見て

喜ゆ　エゝ、忝い。

ト手を合せる。時の鐘、唄になり、この道具鷹揚に廻る。

本舞臺、元の伊右衛門の世話場に戻る。爰にお岩、面體恐ろしき樣子に變り、苦しみ倒れゐる。宅悦、介抱してゐる體にて、道具とまる。

宅悦　イヤ、誠にとんだ留守を頼まれた。モシ、お岩樣、どうでございます。氣持はようございますか。

いは　アゝ、何ぢやゝら、喜兵衛樣より下された血の道の藥を服んで、俄に顔が發熱して……アゝ、苦しうなつたわいの。

宅悦　イヤモウ、大きに案じました。マア〳〵よいさうで、落ち附きました……これはしたり、もう日暮れたさうな。灯をつけずばなるまい。ドレ〳〵

ト行燈を出し、灯をつけて

併し、今の薬で、どうして俄にあの苦痛を

ト云ひさま行燈の灯にて、お岩が顔の變りしを見て、恟りして

マア、お前は顔が

いは　顔がどうぞしたかいの。

宅悦　サア、少つとのうちに、マア其やうに

ト云はうとして、思ひ入れ。

サア、其やうに癒るとは、大方そこが、家傳の良薬でござりませう。

いは　わしも最前は俄の熱氣。どうなる事と思うたが、併し、苦痛も、少しは癒つたわいの。

宅悦　イヤ、お仕合せでござります。イヤ、灯はついたが、油がなかつた。私しが、ちよつと買つて参りませう。

いは　さうして下され。この樣子では叶はぬ。コレ、爰にお銭が

尾上
菊五郎
松本
幸四郎

尾上
菊五郎
京大坂
河内屋
関三十郎

ト あたりより小錢を五十ばかり通したのを探り取り

これを持つて、早う頼みますぞえ。

宅悅　畏りました。

ト 油注ぎを取つて

まだ〳〵、歸つてくるまではござりませうよ。

いは　早う頼みますぞや。

宅悅　ハイ〳〵。

ト 門口へ出て、身慄ひして

ハテ、奇體な事だわえ。先刻までは何ともなくつて、ちつとのうち苦しむと思つたら、あれ程ま

でも

ト これを聞きつけ

いは　まだ行かぬかいの。

宅悅　ハイ、鼻緒が切れましたから

ト 時の鐘、合ひ方にて、宅悅、向うへ入る。お岩殘り

いは　何ぢやゝら、伊藤様から下されたお藥は、血の道にはよいやうなれど、顔の熱氣は今に癒らず、惡い御酒などたべた氣持ぢや。

ト此の時赤兒泣く。

ア、又せわるかいの。添へ乳してやりませう。

ト赤兒に添へ乳しながら

サア、今に父さんがお歸りであらう。爰では蚊がさしまする。マア〳〵蚊帳へ入つて、添へ乳してやりませう。

ト上の方蚊帳の内へ入り、赤兒をたゝきつけてゐる。唄、時の鐘になり、伊右衛門、腕組み、思案の體にて出て來り、花道にて

伊右　今の喜兵衛が話しでは、命に別條ないかはり、相好變る毒藥と申したが、もしや女房があの跡で……物は試しだ。

ト門口へ來り、ズッと入つて思ひ入れ。お岩、蚊帳の中より

いは　油買うて來て下されたか。

ト蚊帳の中から聲をかける。

伊右　イヤ、油は買ひに行かない。おれだ。

いは　オヽ、伊右衛門どの、お歸りでござんすか。

伊右　どうだ、先刻貰つた藥は服んだか。血の道はどうだ。

いは　アイ、血の道にはよいやうなれど、不思議な事には、服むと其まゝ發熱して、その苦しさといふものは、分けても面體俄かの痛み。

伊右　熱氣が強くて、その顔が

いは　しびれるやうに、覺えたわいなア。

ト云ひながら、蚊帳より出て來る。伊右衛門見て惝り

伊右　ヤア、變つたヲ〳〵。ちつとの内に其やうに。ハテ、爭はれぬ。

いは　何が變りましたぞいなア。

伊右　サア、變つたと云つたは、オヽ、それ〳〵、おれが喜兵衛どのへ行つて來たうちに、てめえは大きに顔色がよくなつたが、それも先刻の藥の加減でがなあらう。顔が大きに直つた。

ト呆れし思ひ入れ。

いは　わたしの顔附きが、よいか惡いか知らねども、氣持は矢ッ張り同じ事。どうで死ぬでござんせう。

死ぬゝ命は惜しまねど、生れたあの子が一しほ不便で、わたしや迷ふでござんせう。モシ、こちの人、お前、わたしが死んだなら、よもや當分

伊右　持つて見せるの。

いは　エ、。

伊右　女房ならば直ぐに持つ。しかも立派な女房を、おらァ持つ氣だ。持つたらどうする。世間にいくらも手本があるわえ。

トずつけり云ふ。お岩、呆れし思ひ入れ。

いは　コレ、伊右衛門どの、常からお前は、情を知らぬ邪慳な生れ。さういふお方を合點で、添うてゐるのも

伊右　親仁の敵討を賴む氣か。コレ、否だ。今どき親の敵も、あんまり古風だ。よしにしやれ。おれは否だ。助太刀しようと受合つたが、否になつた。

いは　エ、、そんなら今更、アノお前は

伊右　オヽ、否になつた。否ならどうする。それで氣に入らずば、この内を出て行けよ。外の亭主を持つて、助太刀をしてもらふがいゝ。これればかりは否だの。

いは　エ、、今更否だと云はんしても、外へ賴む當て便りもなき女の手一つ。さすれば願ひも叶はぬ道理。さりながら、わたしに爰を出て行けなら、成る程出ても參りませうが、跡でお前は繼母に、あの子をかける心かいの。

伊右　コレ〳〵、繼母にかけるが否なら、あの餓鬼も連れてゆけ。まだ水子のあの餓鬼と、新規に入れる女房と、一口に云へるものかえ。

いは　すりや、こなさんは女には、實の我が子も

伊右　見替へねえでどうするものだ。われもおれを見替へたから、おれもわれを見替へるのだ。

いは　エ、、なんでわたしがアノお前を、誰れに見替へましたぞいなア。

伊右　サア、その見替へた男はアノ

いは　誰れでござんす〳〵。サア、聞きませう。云はしやんせ。

伊右　オヽ、それ〳〵、あの按摩坊主に見替へた。わりやァ彼奴と、間男をしてゐるな〳〵。

いは　エヽ、何を云はしやんす。いかにわたしのやうな者ぢやというて、あのやうな男と、不義間男をしやうぞいなア。

伊右　わりやァしまいが、おれがの、外で色事をしたらどうする。

いは　サア、そりや男の名聞とやら、どのやうな事さんせうが、願うておいた敵討、力となつて下さらば、なんの、どのやうな事があつても

伊右　かまはぬといふ代りには、敵討を頼むのか。品によつたら、餓鬼まで出來た女房だから、助けてもやらうが、知つての通り工面が悪い。コレ、何ぞ貸してくれろ、急にいる事がある。と云つて何も質草が

ト　あたりを見廻して、落ちてある櫛を見て

コレ、これを借りよう。

ト　取り上げる手に縋り附き

いは　アヽ、そりや母さんの形見の櫛。外へやつては

伊右　ならねえのか。コレ、有やうはナ、おれが色の女に、不斷差す櫛がない、買つてくれと云ふから、これをやらうと思ふが、悪いか。

いは　こればッかりは、どうぞ免して下さんせ。

伊右　そんなら櫛を買ふだけの物を貸せ。まだその上にナ、おれも今夜は身のまはりがいるから、入替へ物でも工面せねばならぬ。何ぞ貸せ。サア、早く貸しやアがれ。

ト　手荒く突き飛ばす。お岩、是非もないといふ思ひ入れ。

いは　何と云うても品は無し。いつそわたしが

ト　着る物を脱ぎ、下着になり

病氣ながらもお前の頼み。サア、これ持つてゆかしやんせ。

ト　涙ながらに出す。伊右衛門取つて、よく〳〵見て

伊右　これぢやアア足りねえ。もつと貸してくれろ。何も無えか……ヨシ〳〵、あの蚊帳を持つてゆかう。

ト　駈け寄つて、吊つてある蚊帳を外し、持つて行かうとする。お岩、悔り縋り附き

いは　アヽ、モシ、この蚊帳がないとナ、あの子が夜一夜、蚊にせゝられて

ト　取りつく。

伊右　蚊がくはゞ親の役だ、追つてやれサ。放せ〳〵。エヽ、放しやアがれ。

ト　手荒く引つたくる。お岩、これに引かれ、タヂ〳〵として、蚊帳を離すとて、指の爪を剝がし、手先は血になり、擡となる。伊右衛門ふりかへり

それ見たか。エヽ、イケあたじけねえ。併し、これで足りればいゝが。

ト　唄、時の鐘になり、伊右衛門セヽラ笑ひ、蚊帳と小袖を抱へ、悠々と向うへ入る。お岩やう〳〵起

上がり

いは　コレ、伊右衛門どの、その蚊帳ばかりは

トあたりを見て

そんならもう行かしやんしたか。あの蚊帳ばかりはやるまいと、病みほうけても子が可哀さ。放さじものと取り縋り、手荒いばかりに指先の、瓜ははなれて此やうに。斯程邪慳なこなさんの、胤とはいへど、いとゞ不便に

ト思ひ入れ。赤兒泣く。お岩、よろ〳〵しながら、あたりを尋れ、土火鉢を出して蚊遣りを仕掛ける思ひ入れ。この内、捨て鑓の合ひ方。向うより伊右衛門、件の品々を肩へ引っかけ、宅悦の手を捕へて出て來り、花道にて

宅悦　モシ〳〵旦那、それはあんまりお情ない。さう致しならお岩様と私しと、悪い浮名が

伊右　立てさせるのがおれが仕事だ。首尾よく致せば、コレ

ト囁く。

宅悦　エヽ、左様ならあなたは、今宵アノ内祝言を

伊右　コレ、口外するな。ソレ。

ト包み金を一分やる。

宅悦　エヽ、この金を下されて、アノ私しに

伊右　やり損ふとやらかすぞ。

ト刀の柄へ手を掛けて嚇す。宅悦ブル〳〵して

宅悦　アヽ、呑み込みました〳〵。

ト伊右衛門頷き、引き返して入る。宅悦門口へ來り

お岩様〳〵、さぞ待ち遠でござりませう。サヽ、油々。

ト行燈へつぎ、お岩の顔見ては、薄氣味のわるき思ひ入れ。お岩、蚊やりをあふぎながら

いは　オヽ戻つてか。こなたの跡へ伊右衛門どのが戻つてござんして、吊つた蚊帳まで取り上げて

宅悦　アヽ、又えて吉へやられましたか。ハテ、むごい心だ。……アヽ、見ればお前は大分薄着に

いは　冷えては悪いといふ病氣、それを貸せとて此やうに、剝いでしまうて

ト涙ながらにふさぐ思ひ入れ。

宅悦　剝いでござつたか。アヽ、困つたものだ。お前もいかい御苦勞なさる。その苦勞をなさるより、いつそ亭主を持ちかへる、工面をなさるが

ト云ひながら、側へ寄つてお岩の手を取り

こりやアお前の手には、悪い筋がございます。一體、コレ〳〵この筋は、女は貞女で苦勞の絶えぬ、これが筋ぢやて。そこでこの筋を切るがようございます。切るとは、その男の縁を切る事でございます。

ト云ひながら、お岩の手を取り、いろ〳〵いやらしき身振りする。お岩、惘りして突き退け

いは　これはしたり、アタ滅相な。コレ、其方はマア武士の女房に、なんで其やうなみだら千萬。重ねて左樣な不行跡な事しやると、今度は免さぬぞよ。

ト強く云ふ。宅悅笑つて

宅悅　モシ、お前樣ばかり其やうに、眞實をお盡しなされても、あの伊右衛門樣は、遠から心が變つてをります。それを知らずに貞女を立てると、跡で難儀をなされませうぞえ。それよりお前樣、いつそ私しと

ト云ばうとする。お岩腹を立て

いは　何と云やる。貞女を立てゝ難儀をしようより、私しとゝは、そりや聞き事。サア、それを云や、それを云や。

云はぬと、わが身は不義云ひかけるか。慮外な奴の。女でこそあれ武士の娘、侍ひの妻ともいはるゝこの岩が、品によつては

ト有り合ふ小平の脇差を取つて、スラリと拔いて立ちかゝる。宅悅は惘り、狼狽へ

宅悅　これはしたり、何をなされます。危なうございます。

トその手を留めんとして、あちこちするはずみに、白刃を誤つて後へ飛ばす。この白刃、後の欄間の下の所へ突ッ立つ。宅悅うづくまつて

モシ〳〵、お待ちなされませ〳〵。嘘でございます〳〵。今のやうに申したは、誠に嘘でございます〳〵。お前の貞女を見ませうと、存じたからの皆僞り。モシ、必ずお腹をお立てなさるな。有りやうは、只今までとは事かはり、お前のやうなそでない顏の女なぞと、なんぼ私しがやうなものでも、アヽうとましやく〳〵、何の罰にか病氣の上に、二目と見られぬそのマアお顏。ハテ、氣の毒千萬なものだ。

ト此せりふの内、お岩、不思議の思ひ入れあつて

いは　ナニ、わしの面が先刻のやうに、熱氣と共に俄の痛み。もしやあの時

宅悅　サア、そこがお前は流石女氣、喜兵衛どのから參つたる、血の道の藥は、ありやみんな嘘。人の面

を變へる毒藥。それをあがつたお前の顔は、世にも醜い惡女の面。それをお前は御存じないか。私しが斯う申すのが、疑がはしくば論より證據。コレ〳〵、愛の

ト櫛疊より鏡を出し

これでトックリ御覽じませ。

ト お岩猶々不思議の思ひ入れ。鏡を手に持ち

いは　何をマア、いろ〳〵の事云うて、人に氣ばかり揉ませるわいなう。

宅悅　何は兎もあれ、早くお顏を御覽じませ。必ず惚りなされますなえ。

ト宅悅、手を持ち添へて鏡を見せる。お岩、ちよつと見て、恐ろしき顏ゆゑ惚りして

いは　あれいなう、誰れぞ後に

ト俯向くを、宅悅、猶も鏡をさしつけ、よく〳〵見せる。お岩、又怖々と鏡に向ひ、よく〳〵見て、思案の體。

いは　ヤ、、着類の色あひ、頭の樣子、ヤア〳〵〳〵、こりやこれ本間にわしの面。マアいつの間にわしの顏が、此やうな惡女の面になつて、マア、こりやわしかいの〳〵。ほんまにわたしの顏かいなう。こりやマアどうせう〳〵。どうしたらよからうぞいなう。

ト大惚り。途方に暮れて泣き落す。宅悅背中を撫で

宅悅　サ、、御尤もでござります〳〵。それにも外に作者がござる。卽ち隣家の喜兵衞樣。孫のお梅に伊右衞門樣を、貰ひたいにも女房持ち。流石向うは金持でも、ちつとはお前に義理もあり、斷わらしつたを曲事と、血の道の藥と僞つて、お前に服ませて顏を變へ、亭主に愛想を盡かさす工面。さうとは知らいでうか〳〵と、一ぱい參つたお岩樣、近頃以て氣の毒千萬。

ト殘らず口走る。お岩、だん〳〵と腹の立つてくる思ひ入れにて、鏡にうつる我が顏をヂット見込んで

いは　さうとは知らず隣家の伊藤、わしが所へ心附け、日毎に贈る眞實を、忝いと思ふから、乳母や婢女へ最前も、この身を果す毒藥を、兩手を突いての一禮は、今に思へば恥かしい。さぞや笑はん、口惜しいわいの〳〵。

ト泣き伏す。宅悅さし寄つて

宅悅　まだ〳〵そんな事ぢやござりませぬ。愛想を盡かして伊藤の聟樣、お前と手を切るその爲に、どうぞ汝は女房と、間男いたせとお賴みを、ならぬと申せばスツパ拔き。よん所なう今の戲れ。お前の着類を其やうに、非道に剝いでござつたも、有やうは今宵が內祝言、聟の支度の入替へに、

持つてござつたお前の代物。その上お前へ私しに、色を仕掛けてくれろと頼みは、即ち嫁をこの内へ、連れてくるにもお前が邪魔、それゆゑわしを頼んだ間男。一部仔什はこの通り。なんぼ頼まれた事ぢやというて、そのお顔ではどうして色に、イヤ、御免だ〳〵。

ト お岩これを聞き、きつと思ひ入れ。

いは　もうこの上は氣を揉み死。息あるうちに喜兵衛どのへ、この禮云うて

ト よろ〳〵する。宅悦、有りあふ衝立にてとめ

宅悦　そのお姿でござつては、人が見たなら狂人か、形もそほろなその上に、顔のかまへも只ならぬ

ト お岩また鏡を取つて、よく〳〵見て

いは　髪もおどろなこの姿。せめて女の身嗜み、鐵漿なとつけて髪も梳き上げ、喜兵衛親子にこの場の禮を……コレ、鐵漿の道具を、揃へて爰へ。

宅悦　ヤヽ、産婦のお前が鐵漿を附けては

いは　大事ない、サヽ早う。

宅悦　すりや、どうあつても

いは　エヽ、持たぬかいなう。

ト 焦れて云ふ。宅悦、悔りして思ひ入れ。

宅悦　ハアイ。

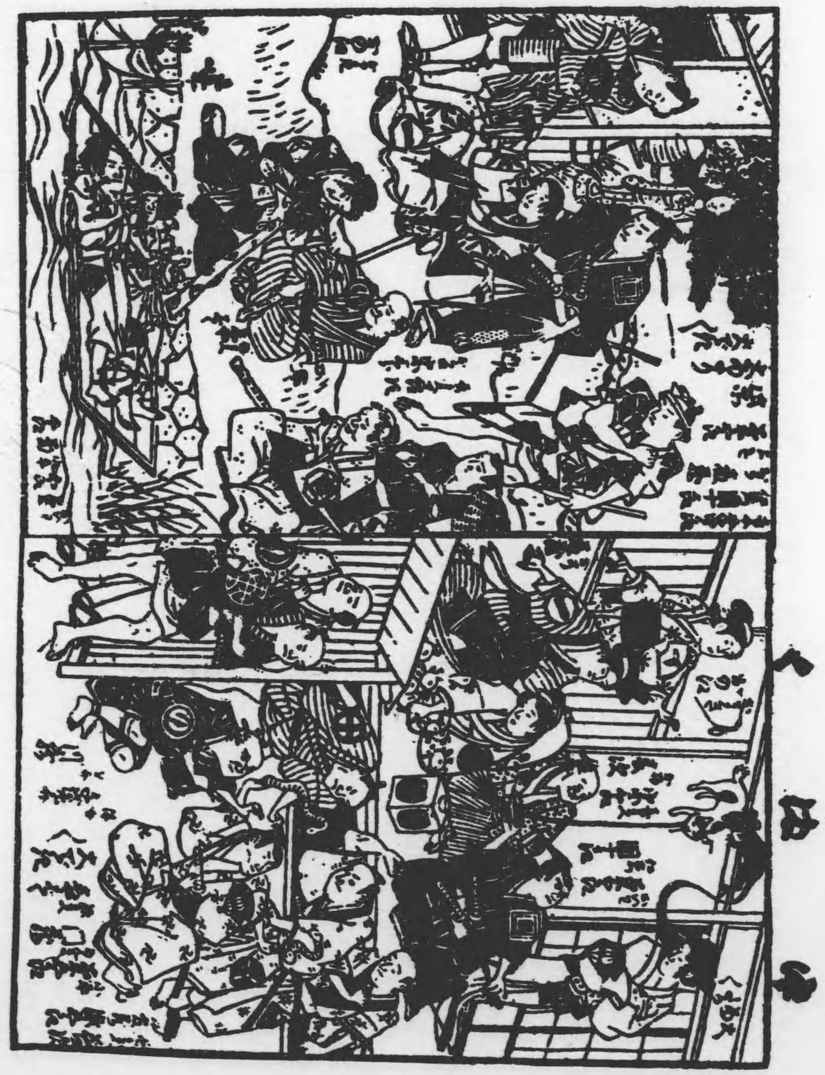
ト これより獨吟になり、宅悦、鐵漿の道具を運ぶこと。蚊いぶしの火鉢へ、さんすいなるぜうづを掛け、麁末なるはんぞうに、道具とも揃へて持ち來る。これにてお岩、こまかに鐵漿をつける事。此うち件の赤兒泣く。宅悦駈けよつて叩きつける。唄一ばいに切れる。お岩、鐵漿をつけしまひ、件の櫛を見て

いは　母の形見のこの櫛も、わしが死んだら、どうぞ妹へ……アヽ、さはさりながらお形見の、せめて櫛の齒を通し、もつれし髪を、オヽ、さうぢや。

ト また唄になり、件の櫛にて俯向きになり、髪を解き、細かに梳く。赤兒泣くを、宅悦抱いてあちこち歩く。此うち唄切れる。お岩、髪を後へ下げ、この時正面を向くと、生え際うすく拔げあがり、猶更凄き顏色となり、前へ落ち毛山の如くにたまる。右の拔け毛を、櫛と共に持つて思ひ入れ。

今をも知れぬこの岩が、死なば正しくその娘、祝言するはこれ眼前。たゞ恨めしいは伊右衛門どの、喜兵衛一家の者どもゝ、なに安穩に置くべきや。思へば〳〵、エヽ、恨めしい。

ト 云ひながら、持つたる拔け毛を櫛もろとも、きつと摑み、思ひ入れ。この髪の毛の中より血汐、タ



ラ〳〵と落ち、前へ倒れし白地の衝立へ、その血かゝる。宅悦見て怖り

宅悦　ヤヽ、落毛から滴る生血は

ト慄へ出す。

いは　一念通さでおくべきか。

ト叫びながら、よろ〳〵と立ち上がり、向うを見詰めて、立つたまゝ片息になる。宅悦、兒を抱きながら駈け寄つて

宅悦　コレ、お岩様、モシ〳〵

ト思はずお岩の立ち身へ手をかけてゆすると、又よろ〳〵として、上の屋體へバツタリこけかゝる。そのはずみに、最前鴨居に立ちし白刃、程よき所へ落ちかゝりぬて、思はずこけかゝりしお岩の咽喉を貫く。顔へ血かゝり、よろ〳〵と屏風の間をよろめき出て倒れる。宅悦驚き、慄へながら

ヤア〳〵〳〵、小平めの白刃で、思はず止めもこりや同然。ヤア〳〵〳〵、大變々々。

トうろたへ、兒を抱きながら驚いでゐる。此うち凄き合ひ方。捨て鐘。この時、誘らへの猫一疋出て、

幕明きの切溜めへかゝる。宅悦見て

この畜生め。死人に猫は禁物だ。シイ〳〵〳〵。

ト追ひ廻す。猫は逃げて屋體の中へ駈け込む。宅悅追うてゆく。このときドロ〳〵、障子へタラ〳〵と血かゝる。途端に欄間よきあたりへ、大きなる鼠、猫ゝ咬へて走り出る。猫は死んで疊の上へ落ちる。宅悅は慄へ〳〵見る。ドロ〳〵にて、鼠は一つの心火となつて消ゆる。

誠に大變々々。こりやこの内には、居られぬ〳〵。

ト兒を寢かして一散に向うへ逃げ出す。揚幕より伊右衞門、着類を着替へ、上下を着て、綺麗に拵へ出て來り、花道にて宅悅に行きあひ

伊右　ヤア、わりやア按摩か。どうした。して、お岩を連れて逃げたか、首尾はよいか〳〵。

宅悅　ア、モシ〳〵、お前のお賴みだが、そこ所ぢやアござりませぬ。

伊右　そんならまだ逃げねえのか。エ、、埒の明かない奴だ。コレ、おれは伊藤の屋敷で、内祝言をして來てナ、あのお岩はわれが引出してくれたらうと思つたから、今夜向うから花嫁を連れて來る。お岩がうせては、大變々々。

宅悅　左樣々々、大變でござります。お岩樣も大變。大きな鼠が……あの又猫も、イヤ大變々々、アノマア鼠が

ト云ひながら、無暗に向うへ逃げて入る。伊右衞門見送り

伊右　なんだ彼奴は、鼠々ど、跡もぬかさず逃げうせたが、それにしても、お岩を引出すその相手は、誰れにしような。

ト考へて

オヽ、あるぞ〳〵。あの中間の小平めを間男にして、彼奴等二人み叩き出し、いづれ今夜中に梅を爰へ

ト舞臺へ來て内へ入り

お岩〳〵、どこに居る。お岩〳〵。

ト呼び立てる足許に、赤兒泣き出す。惘りして飛び退き

こりやアどうだ。この餓鬼を道端へ。すんでの事に踏み殺さうとした。お岩〳〵。

ト呼ぶうち、ドロ〳〵になり、又ぞろ大きなる鼠現はれ、赤兒を咬へて行くを、伊右衛門見附けて

ヤア、こりやア鼠がこの餓鬼を……エヽ、とんだ畜生だ。シイ〳〵。

ト追ひ散らし

うぬが餓鬼を鼠が引くも知らないか。コレ、お岩〳〵。

ト赤兒を抱へて暴れ廻り、お岩の死骸を見附けて

ヤヽヽヽ、こりやアお岩が死骸。咽喉に立つたは小平めが赤鰯。そんなら彼奴が殺したか。それにしても、あの押入れの

ト駈け寄つて押入れを明け、縛られたまゝの小平を引出す。

此奴が縄目は矢張り其まゝ。そんならよもやお岩をば……此奴を相手に

ト思ひ入れあつて、いきなり小平の縄を解く。小平、急き込んで涙交りに伊右衛門に縋り

小平　旦那樣。エヽ、こなたはなう〳〵。

伊右　なんだ此奴は。おれがどうした。

小平　兩手も口も叶はねば、お岩樣を此やうに、氣を揉み死に殺したも、みんなお前のさつしやる業。コレ、何もかもあの按摩が、隣り屋敷の喜兵衛樣と、云ひ合せたる一部仔什、殊に面體忽ちに、相好變へたも藥の業。現在女房を今更に、宿無しにしてその身の出世、どうしてそれが榮えませう。エヽ、お前樣は、見下げ果てたお人だなう。

ト强く詰めよる。

伊右　やかましいわえ駄折助め。お岩が死んだも汝が刃物、そんなら主の女房をウヌ、殺したな〳〵。

小平　エヽ、滅相な事云はつしやりませ。たつた今まで兩手も口もゆはへられ、どうして左樣な

伊右　それでもソレ〳〵、兩手がその通り自由に動くワ。そんならお岩は、てめえが殺した〳〵。

ト捲し立てゝ怒鳴り散らす。小平、いろ〳〵に云うても耳にもかけぬゆゑ、思ひ入れ。

小平　さう云はつしやりますなら、成る程、お岩樣を殺したは、わしが科になつて、人殺しの罪も負ひませうが、その代りには、モシ旦那樣、どうぞ盜んで走りました、唐藥のソウキセイ、あのお藥を私しに

伊右　べら坊め、あの唐藥なら、先刻質屋へ五兩の質にやらかして、爰には無いワ。

小平　そんなら藥はアノ質屋に……先さへ知れゝば、參つて願うて

ト門口へ駈け出さうとする後より、伊右衞門、拔討ちに一刀切る。……小平は、ワツと倒れながらも、その手に縋り

小平　こりやお前、何科あつて騙し討ち。

伊右　知れた事、お岩が敵だ。たつた今、わりやア人殺しになつたぞよ。殊に隣家の企みの樣子、聞いたとあれば猶更に、生けて置かれぬ小佛小平。民谷が刀で往生ひろけ。

ト又切り附ける。小平、數ケ所切られて苦しみながら伊右衞門に縋り

小平　わづか一夜の雇ひでも、假の主ゆゑ手出しをすれば

伊右　主に刃向ふ道理だワ。それだによつてなぶり殺し。お岩が敵だ、くたばれ〳〵。

ト滅た〳〵に切り倒す。このうち木魚の入りし合ひ方。向うより秋山、關口、足早に出て來て、內へ入り、この體を見て驚き

兩人　こりや小平めを、伊右衞門どの

伊右　何かを聞いたこの小者、殊に死んだるお岩が不義の

兩人　そんなら內儀のお岩どの

伊右　相好變へて此奴等二人が、この家を逃げんとひろいだ不義者。

兩人　聞けば聞く程野太い野郎め……して、この死骸は

伊右　世間へ見せしめ、二人の死骸、戸板へ打ちつけ、姿見の、川からどんぶり、直ぐに水葬。

ト押入れの戸板を外して、小平の死骸を戸板へ打ちつけようとする。この時、ドロ〳〵になり、小平の兩手の指、殘らず蛇の形になつてうごめく。兩人膽をつぶし

長兵　アレ〳〵、兩手の指が

官藏　どうやら蛇に

伊右　何をたわけた

トこの時向うより伴助、走り出て來り、内へ入り

伴助　伊右衛門さま〳〵、喜兵衛樣から花嫁御が、只今これへ御一緒に

伊右　それは早急。然らば二人の死骸は奥へ。

長兵　心得ました。

伴助　ヤア、小平が死骸にお岩樣、そんなら二人は

伊右　間男心中二人を、戸板で直ぐにどんぶりと、仕事は奥で

三人　呑み込みました。

伊右　見られまいぞ。

ト唄、時の鐘にて、兩人は小平の死骸を杉戸のまゝ、氣味惡さうにさし擔ひ、伴助はお岩の死骸を引少抱へ、何れも奥へ入る。この唄をかり、向うより中間二人、箱提灯を持つて出る。喜兵衛、袴、大小、羽織にて、お梅の手を引き、跡よりお槇。中間二人、吊り臺に絹地の夜具、六枚屏風さし擔ひ、出て來り、門口にて

喜兵　伊右衛門どの〳〵、約束の通り、喜兵衛が參つた〳〵。

伊右　これは〳〵御隱居には、早速に、お梅を同道。サ、〻、これへ〳〵。

うめ　アモシ、只今も申します通り、最前いたせし内祝言、それさへあるに、あなたのお宅へ

喜兵　ハテ大事ない。伊右衛門どのも、家内に間違ひ出來し、家を賄ふ者なきゆゑ、緣者となつたを幸ひに、武家にあるまじき引ッ越し女房。それゆゑにこそあの通り、夜具も屏風も持たせて參つた。

サ、、大事ない〳〵。

まき　左樣ではござりませうが、何を申すも、お年のゆかぬお子樣を

喜兵　ハテ、大事ないといふに。

ト恥かしさうに、モヂ〳〵してゐるお梅の手を無理に引ッ張つて内へ入り、皆々座に附き、喜兵衛、思ひ入れあつて

時に伊右衛門どの、いよ〳〵貴公の申されし通り、お岩どのには

伊右　先刻内祝言の砌り、お話し申した男と違ひ、小者の小平といふ者と、又ぞろの不義間男、事現はれしを存じつき、産後の女を同道いたし、この如く乳呑子を捨ておき、家出いたせし憎くき兩人。さすれば直ぐにお梅どの、今晩よりして泊めまする。舅御にも、左樣御承知下されい。

喜兵　アヽ、まだ外に男がござつたか。重ね〴〵の不埒千萬。併し、その間違ひも此方が爲には、誠にあうたり叶うたり。丁度折よく斯樣な間違ひも出來ぬもの。コレ、梅、これからは天下晴れて、其

方は爰の女房ぢや。何も考へてゐるには及ばぬ。乳母も喜べ〳〵。

まき　先刻も左樣なお話し、よもやとは存じましたれども、あの御病後の御樣子で、どうして家出なされしやら。マア〳〵、それは格別、さし當つて御男子樣が

伊右　イヤ、誠に小兒に弱り果てます。

喜兵　サア、それゆゑ身共も今晩は、留守居がてらに泊つて進ぜる。明日は早々、乳母を尋ねる分の事。

コリヤ、槙よ、勝手よき所へ、おれが床をとつてくれい。

まき　畏りました。

ト槙は下手の方へ、持參の夜具を敷き、屏風を立てゝ

ハイ〳〵、御隱居樣のお床は、これへのべましてござりまする。

喜兵　して聟どのと、孫めが寢間はな。

伊右　只今までお岩が罷り在つた一間、彼奴等へ面當て、矢張りあれへ臥りませう。

喜兵　成ゐ程、それもようござらう……コリヤ、梅よ、これは其方が守りぢやほどに、大事にこれを掛けて居やうぞ。

ト赤地錦の守り袋を渡す。

うめ　左樣なら、離さずに掛けて居りませうが、心がゝりは、あのお岩樣の事が

まき　左樣ではござりますれど、マア〳〵、それは格別でござりまする。

伊右　ハテ、大事ない。身がよいと申すに、誰れが何と申すものぢや。

ト少し立腹の體。

まき　イエ〳〵、誰れも左樣は申しませぬ。左樣ならばお前樣は

ト お梅の手を引き、上の方、お岩の寢てゐた床の上へ連れてゆき

今宵は日頃のお恨みを

うめ　それぢやというて、モシひよつと、わたしが事ゆゑお岩樣

まき　ハテ、それ仰しやると、あなたの願ひが

ト無理に屏風を引廻し、此方へ來る。赤兒、頻りに泣く。

伊右　ハテ、折わるいあの乳呑子。

喜兵　今宵は身共が乳のない乳母、かんがくいたし、寢させて進ぜう。

ト赤兒を抱いて床の上へあがる。

伊右　然らば舅御、何分よろしく

まき　して、私しは
喜兵　何かゞ濟んだらめでたく開き、今宵の始末を娘にも、話してくりやれ。
まき　畏りました。そんなら私しは、めでたくお開き申しませう。
伊右　何かと大儀。お内方へも宜しう傳言。
まき　あのお子樣を、何分お願ひ申しまする。
　ト唄、時の鐘になり、お横、中間を先に、供を殘らず連れて向うへ入る。喜兵衞、屏風を引廻す。眞中に伊右衞門は一人立ち、思ひ入れ。
伊右　ハテ、物事も、これ程までに巧くゆくか。
　ト正面のれん口より秋山、關口、ヌッと顏を出し
長兵　伊右衞門どの、戸板の二人を
官藏　早稻田のあたりの流れへ突き出し
兩人　不義の成敗。
伊右　コレ。
　ト押へる。兩人、顏を引ッ込ませる。

さてこれからは新枕。
　ト凄き合ひ方、時の鐘になり、一間の屏風を明け
お梅どの、さぞ待遠で
　トお梅、床の上に俯向きゐる。
お梅どの、これサ花嫁、俯向いてばかり居る事はない。恥かしくとも顏を上げ、日頃の戀の叶うたしるし、今宵めでたくこちの人、我が夫かいのと、笑うて見せやれ。
　ト寄り添ふ。この時、薄ドロにて、お梅、顏を上げると、顏はお岩にて、恐ろしき顏色、恨めしげに伊右衞門を見詰め、皺枯れたる聲にて
うめ　アイ、こちの人、我が夫、必ずともに末長う
　トきつと見詰め、件の守り袋を差出す。伊右衞門、ゾッとせし思ひ入れにて、直ぐに側なる刀を取り、拔討ちにポンと首を切る。この首、前の緣へ見事に落ちると、お梅の本首になり、大ドロ〳〵にて、この首へ數多の鼠むらがる。伊右衞門悔りして
伊右　ヤ、、、、、お岩め、と思ひの外、矢ッ張りお梅だ。こりや早まつて
　ト狼狽して、刀を提げたまゝ下手の屏風を明けると、内に喜兵衞、赤兒を抱き、掻卷を着て寢てゐる。

コレ、舅どの〳〵、珍事がござる。アノ間違ひで

ト喜兵衛を引起すと、その顔、凄き小平にて、赤児を喰ひ殺せし體にて、口は血だらけにてふり返り、

伊右衛門を見つめて

小平　旦那様、藥を下され。

伊右　ヤア、わりやァ小平め。現在小兒を

ト云ひさま、又拔討ちに首打落すと、よき所へ喜兵衛の本首、血に染みて出る。この首へ、蛇出てま

とひつく。伊右衛門、よく〳〵見て驚き

ヤ、、、、、切つたる首は矢ッ張り舅。さては死靈の仕業よな。かゝる祟りにウカ〳〵こゝにはト門口へ駈け出し、戸を明けて逃げようとする。戸はシヤンと自然にしまる。悔りして跡ずさりに退り、ホッと息をする。大ドロ〳〵にて心火燃える。伊右衛門これを見てギョッとして

ハテ執念の……なまいだ〳〵〳〵。

ト手を合せる……これをキザミにて、よろしく拍子

三幕目

砂村隱亡堀の場

幕

役名――民谷伊右衛門。伊右衛門母、お熊。佛孫兵衛。伊藤後家、お弓。同乳母、お槇。秋山長兵衛。鰻掻き、直助權兵衛。お岩の亡靈。小平の亡靈。佐藤與茂七。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕、高足の土手。上の方に土橋、下に枯れ蘆、干潟の體。爰にお弓、お槇、非人の姿、焚火に土瓶を吊し、舞臺一面流れの體。よき所に樋の口。石地藏。稻村。松の大樹、吊り枝。水草。すべて隱亡堀の景色。禪のツトメ、時の鐘にて幕明く。

トお弓、病氣の體。お槇、介抱してゐる。

まき　イヤ申し、只今の御樣子は、どのやうでござります。

ゆみ　イヤ、もう案じてたもんな。いつもよりは別して快い程に、案じてたもるな。たゞ心にかゝるは行くへの知れぬ民谷伊右衛門。何の遺恨に親人樣、娘までも殺害なし、恩を仇なる人非人、わしや腹が立つわいの〳〵。

まき　御尤もでござりまする。よしない者を聟金と、なされたゆゑに、伊藤のお家は師直樣よりお取上げ。非人になつて此やうに、伊右衛門の行くへを詮議。乳母の私しが附添ひましての御奉公。必ず、きな〳〵思し召さぬがよろしうござります。

ゆみ　それ程までに、以前を忘れぬ志し、召仕ひとは思はぬわいの。

ト云ひながら、懐より守り袋を出し

コレ、この守りは、娘が横死の砌りまで、肌に附けたるお守りなれど、あのやうなる時節にも、守りの奇特の無いといふは、誠に死ぬる約束事。今思へば、この守りも恨めしいわいなう。

まき　ア、申し、また愚痴な事仰しやりまする。其やうなお心をお出しなされては、あのお子様のお爲にもなりませぬ程に、いつものやうに御回向なされてお上げなされませ。私しはお夜食の、御飯ごしらへを致しませう。

ト木魚入りの合ひ方になり、お槇ば布袋の中より米を出し、あたりより小さき桶を出し、川水をすくひ、洗ふ。お槇、守りを竹に吊し、回向する思ひ入れ。この鳴り物にて向うより佛孫兵衛、手に卒塔婆を持ち、川の中へ氣を附けながら舞臺へ來て、二人を見て

孫兵　ア、仁ぢや。この衆は物貰ひにしては、さて人柄のよい女非人。コレ、こなた衆は、この川端にゐるからは、ひよつと爰へ、杉戸に縫うたる男と女の死骸が、流れて來はしませぬか。どうぢやな。

ゆみ　イエ〳〵、見當りませぬが、その又死骸を、なんでお前は尋ねてござつたぞ。

孫兵　コレ、聞いて下され。わしの悴が、さる武家方へ奉公に行きをつた、先から駈落ち、今に行くへが知れぬ。今日聞けば、女と男の浮き死骸、戸板に打ち附け流るゝと、きつい評判。もしや悴が

其やうな目にあひはせぬかと、心ならず。此やうな事内へ歸つて話しては、嫁や孫が案じ居らうと、云はれもせず内證で、靈岸様へお參じ申し、御回向願うてこの塔婆。息才で居をれと祈禱。もし死にをつたらと思ふから、戒名附けてもらうて、出た日を命日。ア、、うとましの娑婆世界。

南無阿彌陀佛々々々々々々々々々。

ト思ひ入れ。お弓、これを聞いて

ゆみ　ア、、いづれを聞いても悲しい話。世間には似た事も

まき　まゝある事でござりまする。お前様はそのお守りを、毎日御覽の度に物思ひ。そりや斯う致しませう。私しが明日早々、靈岸寺へ持參いたして、納めて參りませう。

ゆみ　成る程、其やうなものかいの。持つてゐるほど涙の種、後生にもなるまい。そんなら納めて來やいなう。

まき　左様いたしませう。晩程參りませう。

ト何心なく守り袋を取つてせりふのうち、薄き風の音になり、蔦間ザワ〳〵とうごめき、大きなる鼠一疋出て、件の守りを咬へ行く。兩人見附け

ゆみ　ソレ〳〵、鼠が守りを

まき　これはしたり、どこから鼠が

ト狼狽へて追ひ廻すうち、鼠は守りを咬へたまゝ川へ飛び込む。お槇惚りして

アレ〳〵鼠が

ト手を伸して捕へんとして、そのまゝ川へ、ヅカ〳〵と落ちんとする。お弓うろたへ、お槇が帶の端をとらへ

ゆみ　コレ、危ないわいの〳〵。

ト引けども及ばず、孫兵衞も手傳つて、お槇が帶を捕へ引戻す。この時、お槇が帶の端、切れてお弓の手に殘り、お槇川の中へ落ちる。お弓。ハツととりつめ、氣を失うて倒れる。孫兵衞、介抱して

孫兵　コレ〳〵、物貰ひの女中、氣を附けさつしやれ。

トいろ〳〵こなしあつて

これはしたり、あの鼠が出たゆゑ、一人の女は思はず川へ落ち込み、殘つた女中は氣を失うて、こりや怪しからぬ……イヤ〳〵〳〵、通りがゝりの袖乞ひ女、おれも生中かゝり合ひになつては迷惑、というて捨てるも氣の毒……アヽ、いづくの女か、ハテ氣の毒な……人の事見て我が身の上。アヽ、怜めはどうしをつたぞ。

ト側にありし赤合羽を、お弓に打着せ、卒塔婆を持つて、思ひ入れあつて下座へ入る。佃節になり、向うより直助權兵衞、鰻掻きの拵へ、誂へのやすをかつぎ、うきと樽を持ち、川のあたりを見やり〳〵、出て來て、花道にて

直助　さて、今年のやうに筌坊に漁の無い事は覺えぬ。したが、こゝらはどうか水の濁りがよささうな。ドレ、こゝらをやつて見ようか。

ト舞臺へ來り、川の中へ入る。腰たけになり、鰻を掻く事。此うちかすめて佃節。直助、捨ぜりふよろしく、鰻掻きに何やらかゝりしゆゑ、取上げ見ると、髮の拔け毛一かたまり、この毛の中に籠甲の櫛、搦み上がる。直助取つて、よく〳〵見て

ヤア、こいつア鼈甲だ。萬更でもねえ。ドレ、磨いて見ようか。

ト土手へ上がり、稻村の葉を取づて、櫛を磨いて見んと、煙草のみながら磨いてゐる。かすめし佃の鳴り物になり、向うよりお熊、世話の婆アにて、これも卒塔婆を持つて出て來る。跡より伊右衞門、深き編笠、浪人にて、大小、びくを提げ、釣り道具をかつぎ出て

伊右　申し母者人、お前も御健勝で、マア〳〵、めでたうござります。伊右衞門も安堵しました。

くま　イヤモウ、わしも其方の惡い噂を案じてゐましたが、マア〳〵、息災な樣子を見て、安堵しました。

知りやる通り、昔の連合ひ近藤源四郎どのが離別してより、師直様へお末奉公。その砌り顔世どのを、御前様へ執持たうと、かゝつて見たが、し太い顔世、強情ゆゑに鹽冶の騒動。その節師直様の仰しやつたは、其方もしや後々に、難儀な身分となつたなら、これを證據に願うて來いと、コレ〳〵

ト懐の風呂敷包みより書き物を出し、伊右衛門へ渡し

これは御前様の判の据つたお書き物、師直様のお直筆。いはゞわしへのお墨附も同然、願うて出て、其方の難儀を救はうとは思うても、今の亭主は鹽冶の陪臣ゆゑ、知られてはと思ふうち、民谷伊右衛門といふ浪人が、女房のお岩といふを殺し、その上隣りの屋敷の親子を殺して、立退いたとの噂まち〳〵。それゆゑ此やうに

ト塔婆を見せ

これ見や、「俗名民谷伊右衛門」其方は死んだと噂をさせる、その爲のこの卒塔婆、立てゝ置くのは、なんと智恵者であらうがの。

伊右　これは〳〵、母者人のお志し、先づは大慶。併し隣家の喜兵衛、娘のお梅を殺したるも、死靈の業。それゆゑ工夫をめぐらして、親子の者を害せしは、朋輩の官藏、彼れと小者兩人に、なすり附けておくからは、よもやこの身にかぶれも來まいが、マア〳〵、お前の氣休め、そこへ立て

ゝ置かつしやりませ。

くま　合點ぢや〳〵。人目に立つやう、この土手のこゝらへ立てゝ

ト好き處へ塔婆を立てゝ

コレ、悴、わしが住家を尋ねんと思はゞ、あの深川の寺町で、佛孫兵衛といふ苦しがり。必ずともに尋ねて來や。

伊右　心得ました。この間に尋ねませう。わしは當分、本所蛇山庵の坊主を頼んで、暫らく隱れ家。

くま　そんなら悴、其方の住家へ

伊右　尋ねさつしやりませ。

ト木魚入りの合ひ方になり、お熊、そこへ卒塔婆を立てたまゝ、急いで入る。此うち直助、櫛を磨きながら聞いてゐる。伊右衛門、川を見廻してゐるうち、入相の鐘。

もう入相か。ドレ、こゝらへおろして

ト釣竿を二三本川へおろして、煙草を出して、直助が煙草をのんでゐるを見て

火を借りませう。

直助　お附けなされませ。

ト出しながら、笠の中を覗き

伊右衛門さん、お久しうござります。

伊右　ヤ。さう云ふてめえは直助か。

直助　アイ、その直助も今では改名、鰻掻きの權兵衛。モシ、伊右衛門樣、いはゞお前はわしが爲には、姉の敵といふところだね。

伊右　コレ、洒落か無駄かは知らないが、なんで身共が、てめえの敵。

直助　ハテ、忘れなすつたか。わしが女房の姉といふなア、四谷左門が娘のお岩、わしが女房は妹のお袖。そんなら萬更わしとお前は、敵同士でねえ事もなからう。爰で逢うたりや優曇華の、女房が姉のお岩が敵、民谷伊右衛門、イザ立上がつて勝負なせ……と云ふところだが、そこを云はねえの。その代りはお前が又、出世する話しが出來ると、今のお前の貰はしつた、師直樣の書き物を、わしは借りに行きやす。その時知らねえ顏をなさるなよ。

伊右　どうして〳〵、その時はわれにも遣らうが、おれも有やうは出世の種を

直助　種を蒔くなら權兵衛が、ほじくり出しても尋ねて行きやす。

伊右　そりやァ承知サ。てめえとおれの仲だもの。ナニその時に

ト話しの內、釣り絲へ魚の附きし樣子にて、ピク〳〵引く。伊右衛門、手早くあげる。小鮒かゝりゐる。

アヽ、出來たな。

ト云ふ內、外の竿また動き出す。

そりや、又かゝつたワ。

ト大きな聲で云ひ、伊右衛門、その竿を上げると、今度は鯰かゝつて上がる。

ソレ、逃げるワ〳〵。

ト側にてあせり、手傳うても、ぬらつくゆゑ、立てゝある卒塔婆を拔き、鯰をやう〳〵押へ、卒塔婆はあたりへ捨てる。この時、氣を失ひしお弓があたりへ卒塔婆落ちる。この前よりお弓心附き、胸撫でおろし居たりしが、この時思はず卒塔婆を取上げ、よく〳〵見て

ゆみ　ヤヽ、卒塔婆に記せし戒名の、下に俗名民谷伊右衛門。そんならもしや、父さんと娘を殺したる、民谷はこの世を

トこの聲を聞いて、伊右衛門、お弓を見附け、さてこそといふ思ひ入れ。顏を外けて、直助の袖を引き、何やら書いて見せる。お弓はこれを知らず、思ひ入れあつて

申し〳〵、あなた樣、ちとお聞き申したい事がございます。

直助　ア、、何だえ。
ゆみ　外でもございませぬが、爰にありまする卒塔婆に、民谷伊右衛門とございまするが、この人は病死でも致したのでございまするか。
直助　ナニ滅法界な。伊右衛門は死にはしませぬ。コレ〳〵爰に
　　トうか〳〵云ひかける。伊右衛門、袖を引いて、目くばせする。直助頷き
　　ほんに、死んだ〳〵。コレ、死んだに依つて、塔婆を仕立てたのだ。生きてゐる者に、ナニ塔婆を立てるものか。死んだ〳〵。
　　ト無性に云ふ。お弓こなしあつて
ゆみ　して、そりや、いつの頃の事でございました。
直助　ア、、そりやア何よ、たしか今日は、大方、それ〳〵、四十九日だ。
ゆみ　エ。すりや、相果てまして四十九日に……エ、。
　　ト云ひかけて無念泣きに泣き入る。直助見て
直助　コレ〳〵、其やうに泣くのは、こなたは兄弟か、亭主か、なんだ。
ゆみ　イエ〳〵、私しが親と娘を、この民谷伊右衛門と申す者が、殺害いたして行くへ知れず、その敵

たる伊右衛門を、女なりともおのれやれ、一太刀なりとも恨みんと、斯樣な姿になりましたに、その敵が病死と聞いては、誰れを敵と打ちませう。願ひの綱も切れ果て、
　　ト無念の思ひ入れ。伊右衛門聞き、また直助へ書いて見せる。
直助　コレノ〳〵、非人の女中、よし又伊右衛門が生きてゐても、ナニあの人は、敵ぢやアない〳〵。
ゆみ　エ、。して、民谷を退けて、誰れが敵でございまする。
直助　コレ、まこと殺したその時の相手は、秋山長兵衛、關口官藏、家來が一人、此奴らが殺したのだ。
　　伊右衛門さんと思ふのは、こなたの大きな料簡ちがひサ。
ゆみ　そんならあの時仲人せし、あの兩人が仕業なるか。何の恨みで父さん娘。思へば〳〵口惜しい。
　　トきつとなる。伊右衛門、よき時分より、そろ〳〵立つて窺ひ來り、この時、驚にて、だしぬけにお弓を前なる川に蹴落す。水音して、姿、深みへ落ち入る。兩人顔見合せ
直助　伊右衛門さん、成る程お前も、強惡だなア。
伊右　この強惡も、見やう見眞似の
直助　そりやア誰れを
伊右　おぬしが仕草を

直助　アノ、わしが平常を
伊右　見習つたのよ。
直助　誠に感心。……奇妙。
　　ト時の鐘になり、思ひ入れあつて直助、下座へ入る。伊右衛門こなし。
伊右　いらざる所にうせたばつかり。益ねえ殺生。
　　トこのとき、釣竿、ピク〳〵引く。急いで上げ見て
　　南無三、餌を取られた。
　　ト附けかへる思ひ入れ。禪のツトメになり、向うより長兵衛、頬かむりに顔を隠し、キヨロ〳〵として出て來り、伊右衛門を見つけ
長兵　ヤア、民谷氏。爰にござつたか〳〵。
伊右　コレサ、ひそかに〳〵。
長兵　コレ〳〵民谷氏、こなたがお岩と小平を殺し、又その上に喜兵衛親子も、殘らず、こなたのした事だに、おいら主從三人へ、思ひがけなき疑ひかゝり、もうこの上は面晴れに、これから直ぐにお上へ訴へ、あの人殺しは民谷が業、伊右衛門でござりますと、貴樣の舊惡一々云ひ上げ、おいらが

身拔けをせねばならぬ。必ず後にて恨まつしやるな。伊右衛門どの、斷わりましたぞ〳〵。
伊右　コレ〳〵、そりやアおてまへ、これまで懇にした甲斐がないといふものだ。たとへにも云ふ如く、人の噂も七十五日、その内には又どのやうな風が、吹くまいものでもござらぬて。
長兵　コレ〳〵、それを手前も存じてゐるから、當分われらは遠國へ、影を隱すつもり。それでよからう。
伊右　サ、、さう致せば手前も安堵。
長兵　然らばこなたの安堵の代り、路銀を貸しやれ。
伊右　ナニ路銀を……コレ、日頃から苦しがりの身共。どうして金の工面は
長兵　出來ない。出來ずば此まゝ訴へるか。
伊右　アヽコレ、それをこなたが
神谷　云はぬ代りに路銀を少し
伊右　どうして金は
長兵　貸さずば直ぐに
　　ト行きかける。

伊右　アヽコレ、それ云はれては
長兵　路銀はどうだ。
伊右　サア
長兵　サア
二人　サア〳〵〳〵
長兵　路銀の工面は出來ぬのか。
　ト云はれて伊右衛門、思ひ入れ。懐よりお熊の渡した書き物を出し
伊右　コレ、この書き物は師直樣の、御判の据つた墨附き同然。おれが母から斯ういふ廻りで。コレ。
　ト長兵衛に囁く。長兵衛呑みこみ
長兵　成る程、さういふ手堅い書き物なら、路銀の代りに、當分身共が
伊右　預けるからは、金が出來たら、その時引替へ。
長兵　承知しました。民谷氏。
伊右　秋山どの。
長兵　隨分ともに、氣を附けさつしやい。

　ト時の鐘、蟲の音、合ひ方になり、長兵衛、向うへ入る。伊右衛門、跡見送り
伊右　よしなき秋山うせたばつかり、口ふさぎの墨附も、彼奴に渡したこの身の舊惡。ハテ、いらざる
　所へ、うせずとよいに。……南無三、暮れたな。ドリヤ、竿を上げようか。
　ト伊右衛門、竿をあげてしまふ。凄き合ひ方。薄ドロ〳〵。このとき、兩方の雨窓をおろし、暗くな
　る。前の流れへ、お岩小平を兩面に打ちつけし、前幕の杉戸、流れ寄る。伊右衛門見て
　ヤヽ、覺えの杉戸は
　ト思ひ入れ。この時大ドロ〳〵にて、件の杉戸、自然と正面の土手へ立ちかゝる。その拍子に、かけ
　てある菰落ちると、お岩の死骸、水に溺れ、肉脫せし見ぐるしき拵へ、首は本首を出し、鼠の咬へし
　最前の守り袋を手に握つて居る、ドロ〳〵烈しく、兩眼見開き、恐ろしき相にて伊右衛門を見詰める。
　伊右衛門、思ひ入れ。
　お岩、迷つてゐるか。コレ、女房、免してくれろ、往生しろよ。
　トお岩の亡靈、伊右衛門を見詰め、守り袋をさしつけ、凄き聲音して
いは　民谷の血筋、伊藤喜兵衛が、枝葉を枯らさん、この身の恨み。
　ト物云ふゆゑ、伊右衛門惚りして、手早く菰をかけ

伊右　まだ浮かまぬな。南無阿彌陀佛々々々々〳〵々々。此まゝ川へ突き出したら、鳶や烏の餌食となり、業が盡きたら、佛になれ。

ト突き出さうとする。杉戸、パツタリとかへつて、裏のかた小平の死骸、首へ藥をかむり、同じく恐ろしき凄き拵へ。薄ドロ〳〵にて、藥はパラリと落ちて、小平、兩眼見開き、片手を差出し

小平　お主の難病、藥を下され。

ト伊右衛門見ると見る。伊右衛門又ギヨツとして

伊右　又も死靈の……立去れ〳〵。

ト拔討ちに死骸へ切り附けると、大ドロ〳〵になり、この死骸戸板の上のまゝ殘らず骨となつて水中へ落ちる。何もなき綺麗の杉戸となる。伊右衛門ホツと溜息つき、杉戸を川中へ落し、きつとなる。パツタリ音して、正面の稻叢より直助權兵衛、鰻掻きを持つて窺ひ出る。途端に早變りの佐藤與茂七、非人の姿、桐油に包みし廻文狀を首にかけ、糸立に卷きし一腰を持つて、樋の口より出てキツと見得。窺ひながら出て高土手へ上がる。これより誂への鳴り物になり、伊右衛門、廻文狀へ手をかけ、直助、この中へ入り、だんまりよろしくあつて、直助、鰻掻きにて打つてかゝるを、與茂七、拔討ちに鰻掻きを切折り、權兵衛と書いた燒印のある柄の方、與茂七の手に入り、廻文狀は直助の手へ入る。三人、立廻りよろしく、足許に落ちてある魚籃を取つて、三人取上げると、ドロ〳〵になり、右の魚

籃、忽ち人の顏になり、籃の中より心火燃えあがる。三人、顏見合せ、キツと思ひ入れ。ドロ〳〵打上げ、心火消えて、暗くなると、析の頭、三人、三方へ別れてホツと思ひ入れ。……拍子　幕

四幕目

深川三角屋敷の場
寺町孫兵衛内の場

役名――鰻かき、直助權兵衛。佛孫兵衛。孫兵衛女房、お熊。蜆うり、次郎吉。小平女房、お花。古着屋庄七。米屋長藏。小汐田又之亟。赤垣傳藏。按摩、宅悅。女房、お袖。小平の亡靈。佐藤與茂七。

本舞臺、三間の間、二重の世話屋體。正面、暖簾のかゝりし納戸口。鼠色の古びし壁。二つ竈、引窓。上手の方、卒塔婆まじりの生垣、草むしたる五輪の頭なども見へ、下手の方寺の入口にて、黑き冠木門をとりつけ、門口よりその門へ物干竿をわたし、前幕の、小佛小平の着物干してある。入口の醬油樽に樒の花を突ツ込んであり、すべて深川三角屋敷、法乘院門前のかゝり。爰に金子屋の手代庄七、風呂敷包みを持ち、長藏、米屋の若い者、叺を持ち、煙草をのんでゐる。蜆賣り次郎吉、荷を擔いで立つて居り、仕出し、花を買つてゐる。序幕のお袖、世話女房の拵へ、山刀を持つて樒の根を廻してゐる。弔ひの鳴り物、てんつゝにて、幕明く。

長藏　モシ、米を持つて參りました。
そで　どうぞ、いつもの所へ明けて下さんせ。
長藏　オツトのみこみやした。
庄七　わしが頼んだ洗濯物は、まだ干ぬかしらん。
　ト云ひながら干し物を見てゐる。長藏は押入れを明けて米櫃へ米を入れる。
そで　庄七さん、お前もせはしない。冬の日で其やうに早く干るものかいな。元の通りにして置きなさんせ。
庄七　成る程、どうして見ても、爰が一番日當りがよいやつサ。
　ト元の所へ干しておく。
仕出　コレ〳〵お内儀、爰へも花を十六文賣つて下さい。
そで　ハイ〳〵、只今あげまする。
長藏　モシ、今入れた米の錢はどうなされやす。待つて居りやせうか。
そで　どうぞ、もそつと待つて居て下さんせ。お前に話しがござんす。
庄七　わしも急に頼みたい事があつて、また來やした。何にし、ろちよつとお目にかゝりたいね。

そで　せはしない、此やうに手がふさがつて居るものを……サア、お持ちなされませ。
仕出　アイ、錢はそこへ置きましたよ。
次郎　をばさん、鯉買うて下され〳〵。
そで　ホイ、、、、今買うてやるほどに、少つとのうち、そこに遊んでゐや。ほんに可愛らしい……サ、
　アお前さん、お持ちなされませ。
　ト仕出しに花を渡す。
仕出　アイ〳〵。今日はこの法乘院に、弔ひがござるかな。
庄七　しかも二つあるが、イヤ、珍らしい亡者を持ち込んだな。
長藏　オランダからでも渡りはしまいし、亡者に珍らしいといふ事があるものか。
庄七　コレ、こなたは萬年橋へ流れ附いた、戸板の死骸の噂を、まだ聞かないのか。
長藏　その話は聞いたが、そんなら今日の佛は、戸板をしよつた土左衛門にお土左の弔ひかね。
庄七　男と女を戸板の兩面に釘附けにして、どんぶりやらかすといふは、成る程、世の中には、むごい奴があるものサ。
そで　どのやうな惡い事をして、其やうな目にあうたやら。ほんに氣味の惡い話しでござんすな。

仕出　そりやァてつきり、間男出入りでござります。
長藏　それだからお袖さん、お前間男はしない事だ。
庄七　併しこの庄七となら大事あるまい。
長藏　おきやァがれ。
仕出　こなさんは、その弔ひを、見に行く氣はござらぬかな。
同　サァ〳〵、行つて見ませう。そんならお内儀
そで　どなたも詣つてお出でなされませ。
　　ト弔ひの呼り物になり、仕出し、門の中へ入る。
庄七　時にお袖さん、お賴みといふは外でもないが、どうぞ又この着物を、ざつと振り出してもらひたいね。
　　ト風呂敷包みより、お岩の死骸が着てゐたる衣裳を出す。
そで　もう日暮れぢやに、洗うたというて、干る事ぢやござんすまいぞえ。
　　ト手に取り上げ見て、思ひ入れあつて
この着物はどうやら見覺えのある、慥かにこりや、わたしが姉さんの……モシ庄七さん、こりやお

前、どこから買うてござんしたえ。
庄七　こりやァ何サ、あすこに干してある着物と一緒に、戸板の土左に
長藏　ハヽァ、それぢやァお株で湯灌場物だね。
そで　エヽ、何ぢややら氣味の惡い。
庄七　コレサ〳〵、ナニそんな物ぢやァない。コレ、お前も野暮な事を云ふものだ。たとへ湯灌場物だといつて、門前住居をしてゐて、香花を賣るお内儀が、それを嫌つてなるものかな。成る程お前も、まだ商賣じみないぞ。
そで　ぢやというて、わたしや其やうな物なら御免ぢやわいなァ。したが、モシお前、その着物は、どこから借りて來やしやんしたえ。
庄七　そりやァ何サ、おいらが見世の流れだが、あんまり穢れてゐるから、ざつと振り出してもらつてせりにでも出さうと思つてサ。
長藏　おきやァがれ。見す〳〵知れた土左衛門の着物を
庄七　これサ、胸氣な事を云ふまい。お袖さん、この男の云ふ事を、必ず誠にせまいよ。何しにおれが湯灌場まで買つてあるくものか。それほど慾張りはしねえわサ。

長藏　あんまり慾張らねえ事もあるめえ。
庄七　成る程、胸氣な事を云ふ男だぞ。
　　ト門口にある中盥の中へ、その着物を浸けて
　　斯うして置くから、どうぞお賴み申しやす。
長藏　ほんに胸氣といへば、お袖さん、米の代はどうしてくんなさる。一體置きかへのつもりだから、
　　先頃の代の濟まぬうちは、入れるぢやァなかつたが、お前が度々さう云ふから持つて來たが、今
　　直ぐに代を遣はして下されまし。
そで　サア、尤もでござんすが、こちの人が歸らしやんしたなら、直ぐにも持たして上げるほどに、後
　　まで待つて下さんせ。
長藏　そりやァ迷惑なものだ。
　　トこのうち次郎吉、表で楮の葉を持ち、遊んでゐる。庄七見て
庄七　この子は小佛小平どのゝ子だが、ハヽア、蜆を賣りに來て遊んでゐるな。
長藏　ヨシ〳〵、おいらが内へ行つて、あの婆さんにいひ附けてやるぜ。
次郎　それではわしが叩かれます。否ぢや〳〵。

　　ト泣く。お袖、駈け寄つて
そで　お前方も可哀さうに、其やうな事云うて泣かしてからに
庄七　ハヽヽヽ。そんならどうぞお賴み申しやす。
長藏　モシ、親方へは、後程と云つておきますぞえ。
そで　ほんに憎らしい伯父さんぢやなう。
　　ト佃節、木魚の音になり、長藏、庄七は向うへ入る。お袖、次郎吉の顏を拭いてやる。
次郎　伯母さま、蜆買うて下され。
そで　商ひしようと先刻から、爰で遊んでゐたお前の物、買うてやりたいが、今日は大事の佛の日ぢや
　　によつて
　　ト錢を出して
　　蜆はいらぬほどに、これを持つて行きなさんせ。
　　ト次郎吉にやる。
次郎　イエ〳〵、蜆買うて下されねば、錢はいりませぬ。
そで　ホヽヽヽヽ、ほんに正直な溫なしい子ではある。コレ、其やうに思ふなら、斯うしなさんせ。

わたしに賣るだけその蜆を、川へ放して下さんせ。それではよからうがな。

次郎　アイ〳〵、そんなら、あの川の中へ逃がしてやりませう。

そで　オヽ、さうして下さんせ。お前は悧巧な子ぢやなア。

ト次郎吉を見つめて、ホロリとせし思ひ入れ。木魚入りの合ひ方、寺の門の中より孫兵衛、しほ〳〵出て來り、次郎吉を見て

孫兵　わりや次郎吉、また今日も蜆賣りに出をつたなア。アヽ、何にも知らずに生き物の

ト云ひながら、干してある着物に目を附け

あそこに干してある着物は、悴が死骸に

そで　エ。

孫兵　南無阿彌陀佛々々々〳〵々々。

次郎　祖父樣、今日は蜆が賣れぬゆゑ、晩に婆樣に、また叩かれるわいなう。

孫兵　オヽ、いとほしなけに、年端もゆかぬ孫めに、此やうな商ひさせて。コレ、案じやんな、祖父が錢遣るほどに、これを今日の賣溜めぢやと、あの婆めに見せてやりや。

ト懐より小錢を出して、次郎吉にやる。

次郎　あの伯父樣にも、只錢を貰つた。

孫兵　そんなら何といふ。爰の内の伯母樣にも、只錢を貰うたといふのか。

ト此うちお袖、茶を汲んで來り、孫兵衛へ思ひ入れあつて

そで　すりやお前さんが、此お子のお祖父さんかいな。マア、お茶一つお上りなさんせ。モシ、此方へお入りなされませ。

孫兵　これは〳〵、お手で下さりませ。ほんに孫めに錢下されたさうにござります。忝うござりまするが、なぜ又、蜆とつては下されぬぞいの。

そで　今日は大事の佛の百ケ日ぢやによつて、それでの事でござんすが、ほんに、いとしらしい子ではござんすわいなア。

孫兵　でもマア、若いに似合はぬお優しい。それに引かへ、聞いて下さりませ。この孫めが婆は、わしが後添ひではござるが、それは〳〵邪慳なやつ。少つと商ひがたるいと、年端もゆかぬこの坊主めを、ぶつたり、抓つたり、それを見るのが不便でござるわいの。

そで　それはマア可哀さうに。その婆樣の代りに、お前、いとほしがつてあげなさんせ。してお前は、この近所でござんすか。

孫兵　アイ、この二三町先きでござるが、こなさんは、この頃爰へ越してござつた樣子でござるの。

そで　わたしも段々不仕合せな事がござんして、先月爰へ參りまして、此やうに、香花を賣つたり、濯ぎ洗濯、艱難な暮らしをして、お恥かしうござんすわいなア。

孫兵　ナニそれが恥かしうござらう。コレ、艱難の暮らしといへば、この子の母親めを聞いて下され。それは〳〵甲斐々々しい生れ。まだなま若い身の上で、正月の薺から始めて、嫁菜たんぽゝ、はうれん草　又は枝豆、ゆで玉子、ありとあらゆる出商ひ。その艱難の中で、舅のわしをば、よう孝行にしてくれまするて。

そで　それはマア、奇特なお方でござんすなア。そんならこの子の親子の衆は、夫婦養子とやらでござりまするかえ。

孫兵　イエ〳〵、悴めは、わしが爲には血を分けた

ト云ひかけ、着物に目を附けて、こなし。

そで　それでは賴もしうござんせう。モシ、必ず心細う思はしやんすなえ。これいなア、父さんがもう待つてぢやあらうほどに、商ひやめて、祖父樣と歸つて、なんぞよい物を、父樣に買うてもらはしやんせ。

次郎　コレ、祖父樣、父樣に、よい物買うてもらうて下されや。

ト聞き、孫兵衛、たまりかねて

孫兵　南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト花道へ行きかける。

そで　もしいなア。お前もマア何ぢややら心細いやうな。可哀さうにこの子も、一緒に連れて行かしやんせいなア。

孫兵　アイ〳〵。ほんに年寄ると、何かにつけて涙もろうて。サア、次郎吉、祖父と一緒に……これは大きに厄介になりました。

そで　モシ、また寺詣りの次手に、必ずお寄りなされませ。

孫兵　ほんになア、袖ふり合ふも多少の緣とやら。悴が死にがらあのやうに

そで　エ。

孫兵　もう洗濯物を、取り入れさつしやれ。

ト入相の鐘、唄になり孫兵衛、次郎吉を連れて、しほ〳〵と向うへ入る。お袖殘り、思ひ入れ。

そで　ほんに、あのお人も年寄つて、何ぢややら、いかう物案じのある樣子。兎角苦勞の娑婆世界……待

たぬ月日は早いもの。今日は義理ある父さん、云ひ號の夫與茂七どのゝ百ケ日。同じ場所にて同じ日に、親や夫を非業の刃に失ふといふは、よく〳〵因果なわたしの身の上。まだその上に、枕こそかはさね、今の權兵衛どのを夫に持ちしも、何卒お二人の仇敵……モシ、堪忍して下さりませ……ア、、もう日が暮れるに、庄七さんに頼まれた洗濯物。これは斯うしておいて、明日の朝のこと。

ト外へ出て、竿にかけてある着物を探つて見て

この着物はまだ乾かぬ。こりや、もそつと斯うしておいて、どりやお燈火を上げうかいなア。

ト四ツ竹節の合ひ方、木魚の音になり。お袖は佛壇へ灯を入れ、行燈をともす。この時分、上手のまさ木垣の奥の卒塔婆へ、白張りの提灯に灯をつけて立てる。この鳴り物にて、向うより直助權兵衛、川魚を取る簗を三つ四つ提げて出て來り、門口にて

直助　コレ、日が暮れかゝつたに、干し物がしまはずにあるワ。

ト内へ入り

なんだ、この盥の中にも洗濯物があるな。イヤ、大さうに稼ぐな。それに引かへ、おらア今日はあぶれてしまつた。

そであぶれたとかえ。

直助　隱亡堀へ三つ四つ、土を伏せておいたに、目そつ子にもお目にかゝらねえ。

そで　其やうな事もようござんせう。モウあまり、物の命を取る事は、よして下さんせ。

直助　馬鹿な事を云ふぞ。鰻掻きが殺生をやめては、腮をつるしてゐなけりやアならない。カウ、腮をつるすといへば、米はどうした。

そで　最前持つて來る事は來たけれど、後までと輕く云うておいたぞえ。

直助　それ見た事か。早速お差支へだ。カウト、たつた一枚の廣袖は、大家が立て催促に飛んでしまふし

ト考へて

オット、あるぞ〳〵、天道人を殺さず。いつやら斯ういふ物を拾つた。

ト叺莫入れから前幕の櫛を出して

コレお袖、この櫛はいくらぐらゐ貸すであらう。

お袖、何心なく手に取つて見て、驚き

そで　モシ、この櫛は、どこで拾はしやんしたえ。

直助　二三日あとに、猿子橋の下で、鰻掻きにかゝつて上がつたが、てめえ見覺えでもあるやうか。

そで　ある段かいなア。この櫛は、わたしが姉のお岩さんが、母さんの形見ぢやというて、大抵や大方、祕藏した事ぢやござんせぬ。行く〳〵は、わたしへ讓つて下さんす約束、それがどうして川の中に……それにまだ不思議なは、あの庄七さんが、洗うてくれいと賴ましやんしたこの着物、姉さんが夏中着てゐやしやんした單衣物に、寸分違はぬ

直助　コレ〳〵、てめえも馬鹿な事を云ふものだ。着物の模樣や櫛の形は、世間に同じ物はいくらもあるワ。

そで　イエ〳〵、着る物は兎も角も、この櫛ばかりは、それに違ひはござんせぬ。

直助　そんならそれにしておいて、おれが工面が直つたら、受けててめえにやらうから、ちよいとこれを曲げて米屋の拂ひを

そで　イエ〳〵、どうぞそればつかりは、堪忍して下さんせ。姉さんの大事に差したその櫛、わたしが見ては、どうも其やうな事はならぬ。こりや、あしたお隣りの伯父さんなと賴んで、四谷まで屆けねばならぬわいなア。

直助　コレサ、てめえが貰ふ約束の櫛だといふではないか。そんなら其やうに無駄な事をせずとも、てめえの物にしておくがいゝではないか。

そで　イエ〳〵、貰の姉妹なら、其やうな事しても大事ござんすまいが、義理のある姉さんの櫛、この儘にしておいては、わたしの心が

直助　成る程、てめえも馬鹿律氣な……その心だものを、今時の女に似合はねえ、死んだ亭主へ義理を立つて、斯うしてゐても、夫婦といふはほんの名ばかり。コレ、おらア毎晩變な心持ちだ。

そで　エ、、お前も、わたしも願ひが叶ふまでは、その約束ぢやござんせぬか。それを承知でありながら、又しても〳〵其やうな事を

直助　オットあやまつた。のろい奴だが、どうなりと御意次第。

ト思ひ入れあつて

時に、御新造樣、私しめは甚だ空腹、どうぞ夕飯を一膳、お願え申しやす。

そで　ホ、、、、、何を冗談。ほんにまだ夕飯前でござんすか。そんなら飯持つて來てあげるほどに、必ずその櫛は、どこへもやつて下さんすなえ。

直助　ハイ〳〵、畏り奉りました。

そで　エ、、何ぢやぞいなア。ホ、、、、、。どりや夕飯の支度しようかいなア。

ト唄になり、お袖こなしあつて、のれん口へ入る。直助殘り、思ひ入れ。

直助　へゝゝゝゝ、なんのこつた。姉の櫛であらうが、お袋の足袋であらうが、おれの手に渡つては、安穩におくものか。こいつ質にやるより、いつそのくされ、大家の内儀さんをだまくらかして、バッタりに賣つてしまはうわえ。それにしても女といふものは、親の形見だの妹に讓るのと、大事にするといふは、成る程罪の深いものだぞ。

ト櫛をひねくりながら門口へ出ようとする。一つ鉦、誘らへの合ひ方、薄ドロになり、行燈と佛壇の灯、あかるくなつたり暗くなつたりする。と、盥の着物の中より、細い手スッと出て、直助の足をとらへる。直助、これを見て、仰天して、持つたる櫛を落すと、これにて右の手は盥の中へ引込む。薄ドロやむ。直助、ホッと思ひ入れあつて

はてな。今のはたしか女の手だが、何にしても、こいつは稀有だわえ。

ト腕を組む。合ひ方。暖簾口よりお袖、日光膳の上へ粗末な燗徳利と猪口をのせ、飯櫃と一緒に持つて出て來り

そで　サア、夕飯にしやうぢやないかえ。

直助　もう膳を持つて來たのか。コレ、酒の買つたのはあるか。

そで　アイ、取つておいたわいなア。

直助　そんなく熱く燗をして來て下ッし。

そで　モシ、それに如才があるものかいなア。

ト徳利を見せながら、そこに落ちてある櫛を見附け、取上げ見て

あれほど姉さんが大事がらしやんす櫛ぢやといふに、此やうに捨てゝおかしやんして、ほんに男といふものは。モシ、こりやわたしが預づておくぞえ。

ト直助思ひ入れあつて

直助　何も借り取りにするといふではあるまいし、明日は直ぐに持たしてやるがよい。畢竟おれが鰻掻きへ引ッかゝつたから、てめえにも渡るといふもの。さうでないと水の庭で、腐つてしまふ代物だ。コレ、うぢ〳〵してゐるうち、米屋の野郎が來るとうるさいワ。野暮を云はずと、貸して下つし。

そで　成る程、思うて見れば、云はしやんす通り、お前が見附けたればこそ、姉さんの仕合せ。その上、榮耀に使ふといふではなし、細い暮しの煙りの代。姉さん、ちつとのうち貸して下さんせえ。

ト戴いて

サア、持つて行かしやんせ。

直助　そんなら聞きわけて貸してくれるか。

ト盥は眞中、お袖は上の方、直助の下の方から手を出して、及び腰に櫛を受取らうとする。又薄ドロドロになり、盥の中より女の手出て、櫛を持つたる直助の手を握る。直助見て悚りし

アレ〳〵、また細い手が

トぞつとして、櫛を盥の中へ落し

エヽ、不氣味な

そで　何をお前は其やうに仰山な……櫛はどうしたのぢやえ。

直助　櫛か。櫛は盥の中へ……アヽ、そんならてめえは、今のは見ないか。

そで　そりや何を

直助　こいつはいよ〳〵稀有だわえ。

トぢつと思ひ入れ。

そで　お前もマア何を云はしやんすやら。そして、櫛は盥の中へ落したと云はしやんしたな……エヽモウ、氣味のわるい。そんなら、お前探して見やしやんせ。

直助　いやな事の。もう〳〵あの櫛へかゝり合ふ事は御免だ。てめえ、よく探して見るがよい。

そで　それぢやといふて、無いもせぬものを

トお袖、あちこち探して見る。一つ鉦、薄ドロ〳〵の合ひ方になり、お袖、盥の中の着物をふるつて見ると、初めのうちは本水にて、絞るうちに自然に血汐と變り、したゝる。直助、これを見附けて

直助　エヽ、それ〳〵、その着物は、血だらけだワ〳〵。

そで　エヽ。

ト悚りして、絞りあげた着物を盥の中へ落す。途端に盥より一疋の鼠、櫛をくはへたまゝ飛び出す。

薄ドロ〳〵、一つ鉦。

直助　それ〳〵、鼠が櫛を

ト追ひかけると、鼠は櫛を佛壇へ置き、消える。直助、櫛を取り上げて

何にしても、今夜は變ちきな晩だぞ。コレ、その盥の中から、鼠が櫛を咬へて飛び出して、佛壇へ置いて行つたワ。

そで　そんならその櫛を、鼠が佛壇へ

直助　コレ、その櫛はおらア否だ。てめえ差してゐて、明日早く姉御に居けるがよい●

ト櫛を直さうとして、自分の手を見て

そで　ア、モシ、其やうな所へさしては

ト お袖の髪へ櫛をさしてやる。

エ、、氣味のわるい、どうせうぞいなア〳〵。

直助　今の血が附いたのだ、ドレ〳〵、おれが洗つてやらう。

ト 手桶の水にてお袖の手を洗つてやる。

そで　モシ、早うその盥を、どこぞへ片附けておかしやんせ。

直助　オット合點だ。イヤ、とんだ洗濯物を頼まれたぞ。

ト 門口の外へ出す。

そで　わたしやモウ、怖さも怖し、氣にもかゝる。ひよつとマア、姉さんの身の上に

直助　ハテ、物は氣にかけると方圖のないものだ。必ず案じないがよい。

そで　それもさうかいな。ドレ、そんならわたしや、夜鍋仕事にかゝらうわいなア。

ト お袖は針箱を出し、河岸揚げの肩當てを刺しにかゝる。直助見て

直助　アヽ、なんだ、木場の河岸揚げの肩當てだな。そいつを差し溜めて、賣るといふ始末か。素敵に稼

ぐやつサ。

ト 四つ竹節、木魚の合ひ方になり、寺の門の中より宅悦、頭巾をかむり、足力の杖をかつぎ、笛を吹きながら出て花道へかゝる。直助聞きつけ

オイ、按摩さん〳〵。

ト 呼ぶ。宅悦とつて返して門口へ來て

宅悦　お呼びなされましたか。

直助　オット此方へ入らつしやい。

宅悦　ハイ〳〵、御免なされませ。

ト 内へ入り、頭巾を脱ぐ。

直助　アヽ、足力だな。こいつは奇妙だ。さうして按摩さん、お前は見えるの。

宅悦　左樣でござりまする。

ト 云ひながら直助を、つく〴〵見て

ヤア、こなさんは慥か、淺草でいつぞや逢つた、藥賣りの藤八ぢやアないか。

直助　道理で聞いたやうな聲だと思つたが、その時の灸點屋だな。イヤ、こいつは飛んだ人を呼び込んだ

そで　お前は宅悦さん、どうして爰へ。

宅悦　ヤ、お紋さんか。お前はどうして爰にマア……ハヽア、そんならとう〳〵この人を亭主に持つたのか。イヤ、蓼くふ蟲も好き〴〵だぞ。

直助　これは御挨拶だ……時にこなたは、まだ淺草にゐるのか。

宅悦　ちつとあの邊には居憎い事があつて、この頃まで四谷の方に行つてゐやした。

そで　モシ、四谷は、どの邊にゐやしやんしたえ。

宅悦　水道町の近所サ。ナニ、やう〳〵一月ばかりしか居ませぬて。

直助　お坊も兎角尻が据らない樣子だな。

そで　あんまり色事を稼がしやんすからの事サ。

宅悦　ナニ稼ぎもせぬ癖に……イヤ、時に療治をなされますか。

直助　折角呼び込んだものを只も返されまい。ざつとやらかしてもらひませう。

そで　モシ、一服のましやんせ。

ト莨を吸ひ附けて出す。

宅悦　お前の吸ひ附け煙草も久し振りだ。こいつは仕合せが直りませうよ……サア、致しませう。

直助　どうぞきつく頼みやす。

ト四つ竹節の合ひ方になり、宅悦、捨ぜりふにて、直助の肩を揉み出す。お袖、矢張り縫ひ物をしてゐる。

宅悦　イヤモシ、いつやら中田圃の騷動は、誠に珍事ちうような事でござりました。一體あの一件は

ト云ひかける。直助、思ひ入れ。

直助　アヽ、かゆい〳〵。カウ按摩さん、思ふさま頭を搔いてもらひたいね。

宅悦　それでもお前、まだ昨日あたり結つた頭を、二十八文の出入りだ。お紋さん、ちよつと櫛を貸しなさい。

そで　そんなら待ちなさんせ。ちよつと黃楊の櫛を取つて來て

宅悦　モシ〳〵、お前の頭に、それほど差してゐるではないか。

そで　でも、この櫛で頭を搔いてはたまらぬわいな。

ト奥へ行かうとする。宅悦、無理に櫛を取って

宅悦　この櫛はどこか見たやうな櫛だが……さうだ〳〵。イヤ、この櫛について、とんだ話がありますよ。

そで　エ。この櫛について話があるとは、そりやどのやうな

宅悦　その櫛は、お前どこから買つて差してゐなさるかは知らないが、こりやァ山の手の四ツ谷町で、民谷伊右衛門といふ浪人の女房、お岩どのといふ女の、差してゐた櫛であつたが

直助　コレ、こなたは詳しい事を知つてゐるの。

宅悦　知らないではサ、あの邊は療治場でござりましたて。

そで　モシ、そのお岩さんといふ女中は、どうぞしなさんしたかえ。

宅悦　どうしたどころか、イヤ、大騒動でござりやした。

そで　エヽ、そりやマアどうした譯で

宅悦　モシ、世の中に怖いものといふは、嫉妬深い女と、人切り庖丁を差してゐるお侍ひサ。その民谷伊右衛門といふ侍ひの女房、お岩といふ女は、嫉妬から起つて、亭主に殺されやした。

そで　エヽヽヽ。

直助　お袖、こりやマア大變だぜ。

宅悦　ハヽア、そんならお前方、由縁でもござるかね。

直助　由縁どころか、そのお岩といふは、このお袖が姉だよ。

宅悦　エヽ。

ト宅悦、惝りする。お袖、宅悦を捕へて

そで　モシ、そりやマア誠でござんすか、ほんの事かいなァ〳〵。

宅悦　ほんの事はほんの事だが、わしは又そんな縁引きのある事は知らず、ツイうか〳〵と、飛んだ話をし出して

そで　イエ〳〵、よう云うて聞かして下さんした。してマア姉さんには、何の科あつて其やうな

宅悦　サ、わしもその一件には係り合つて……イヤ〳〵、係り合つたといふ譯ではないゆゑ、詳しい譯は知らないが、早く云ふと、その亭主の伊右衛門どのが、女房に飽きが來て、外の女を足にしようとしたのを、少し燒きかけたから起つた騒動だといふ話だ。それから、その伊右衛門といふ人は、氣が違つたか、自棄になつたか、その外に二三人を殺して影を隱したが、イヤモウ、思ひ出すとゾッとする程恐ろしい事が……イヤ又その筈の事かえ。さして科もないお岩どのを、それは〳〵むごい殺しやう……イヤノ〳〵、この話はやめやせう。何だか目先きへ死骸がちらつくやうだ。何にしても、その民谷伊右衛門どのといふ男は、强惡な侍ひサ。

ト思ひ入れ。直助こなし。お袖、思ひ入れあつて

そで　チエヽ、いかに夫の高下ぢやというて、科もない姉さんを、其やうにむごたらしう殺すといふ事

が……わたしが爲には義理ある姉さんの敵、その伊右衛門どの〻在家を、云うて聞かせて下さんせ。モシ、教へて下さんせ〳〵。

ト こづき廻す。

宅悅　これサ〳〵、どうしてわしがそれを知るものか。こりやァァ、ひよんな話をし出したわえ。

そでイエ〳〵、なんぼでも、お前から詳しく聞かねばならぬ。サ、姉さんを、どのやうにむごたらしく殺したのぢや。サ、もつと云うて聞かせて

宅悅　イエサ、わしやァそんなに詳しくは

ト 宅悅は持てあましたる思ひ入れ、段々門口の方へ出てゆく。お袖、附きまとつて

そでサア、その伊右衛門どの〻在家を早う

宅悅　これは又迷惑な。有やうは、わしも人の話で聞いたが、何にしてもお力落しでござりやす……わしはお暇申しますて。

そでイエ〳〵、もつと聞きたい事がござんす。どうぞ云うて聞かせて

ト 宅悅の足を掴まへる。

宅悅　これはしたり、わしは今夜大事な出入り場の御隱居を療治せねばならぬ。ァァ爰を

そでイエ〳〵、詳しく聞かぬ其うちは、なんぼでも放す事は

直助　コレお袖、可哀さうに、歸してやるがよい。大抵譯は解つてゐるワ。

宅悅　左樣サ、いくら饒舌つてもこんな物。ヤレ〳〵、氣の毒な

ト こそ〳〵逃げ出す。

直助　コレ、療治代を持つてゆかないか。

宅悅　成る程、肝腎な物を

ト 歸りかけて

イヤ、爰が按摩の辛抱どころぢや。

直助　コレサ〳〵、足力の杖もあるよ。

宅悅　それも按摩の辛抱どころぢや。

直助　これサ、道具が無くつては、商賣は出來まいが。

宅悅　それも按摩の辛抱どころだ。

ト 四つ竹節に木魚の入つた合ひ方になり、宅悅、這々の體にて向うへ逃げて入る。直助、ヂツと思ひ入れあつて

直助　コレ、お袖、おれも初めて聞いたが、さて〳〵飛んだ事になつたなァ。

ト氣が持たせるやうにチツと云ふ。お袖、途方にくれたる思ひ入れ、おろ〳〵して

そで　思ひがけない姉さんの、刃にかゝつて果敢ない御最期。さういふ事とは露知らず、明日はこれなる櫛に添へ、文にこまゞ〳〵便りをと、思うてゐたのに今の噂。父さんといひ姉さんまで、非業にお果てなさんすといふは、モシ、わたしやどうせう、どうせうぞいなァ。

ト泣き伏す。直助チツと思ひ入れ。

直助　斯ういふ噂を聞く端か、種々様々な稀有な事。コレ、その櫛もおれが拾うて來て、思はずおぬしが手へ渡るも、死んだ姉御が一念の

そで　わたしに屆けて下さんしたのか。それ程までに姉さんの、妹を思うて下さんす、形見のこの櫛、今は仇なる姉聟の

直助　その伊右衛門も武士の浪人、舅左門どのゝ仇敵、討たねばならぬ身を以て、却つてその身が敵となれば、コレ、親の敵、姉の敵、討つべき者は其方一人。何をいふにもか弱い女。エヽコレ、この直助も、繋がる縁のあるなれば、ナニ安穩に敵をば……左門どのも草葉の蔭で、口惜しからう、無念千あらう。

ト心ありげに云ふ。

そで　いかに甲斐ない女子ぢやとて、ナニ安穏に仇敵

ト口惜しいこなし。

直助　そんなら其方は親左門、姉のお岩に夫の與茂七、その三人の敵をば、見事女の手一つで。その仇討は覺束ない。おれも以前は武家奉公、二人や三人相手にも、仕兼ねぬ手ぶしは持ちながら、赤の他人でゐる時は、粋興らしく助太刀も……エヽコレ、腕がムヅ〳〵するなア。

ト猶もお袖に氣を持たせる思ひ入れ。合ひ方變つて、お袖、思ひ入れあつて、徳利と猪口を持つて、直助が側へ寄り、手酌にて一口飲んで、直助の前へ置き

そで　サ、一つ飲んで下さんせ。

直助　これは御馳走。そんなら一つ注いでもらはう。

ト お袖の酌にて一つ飲み

成る程、女の狭い心では、酒でも飲まずば立ちきれまい。話を聞いてもこの胸が、いはゞ他人のおれでさへ

そで　イエ〳〵、お前を他人にせまい爲、女の方から献した杯。

直助　ヤ。

そで　モシ、もう祝言は濟んだぞえ。

ト思ひ入れ。直助こなし。

親と夫の百ケ日、今日が過ぎれば今宵から、約束通りお前と女夫に

直助　そんならおぬしは、帶紐といて

そで　アイナア。

ト思ひ入れ。

直助　イヤ、そりや惡からう。おれもおぬしに有やうは、のろけ切つた心から、女房になつたら力にな

らうと、約束はしたものゝ、よく〳〵思つて見る時は、草葉の蔭の與茂七へ、それでは其方の

そで　操を破つて操を立てるわたしが心……モシ、其やうな事は捨てゝおいて

ト又手酌でグッと飲んで

お前も、もう一つ飲ましやんせぬかえ、

直助　酒ならいくらでもお辭儀は無しサ。

ト お袖、酌をして、直助また飲む事あつて

そで　酒ならお辭儀無しと云はしやんすが、さうして女子はえ。

直助　イヤ、女といふものは怖いものよ。

そで　それでお辭儀をさしやんすのかえ。

直助　マア、ざつとそんなものよ。

そで　そんならわたしや、一つ飲まうわいな。

トまた手酌で飲む。

直助　イヤ、こいつは素的に今夜は大分出來がよい。

そで　わたしやモウ、氣が揉めてならぬによつて

ト直助にしなだれるこなし。

直助　成る程、氣が揉めるも無理はない。たつた一人の姉貴がひよんな

そで　サ、それぢやによつて、どうぞ力に

直助　そんならいよ〳〵直助と、夫婦になつたその上で

そで　一人ならず二人三人、打たねばならぬ仇敵。

直助　助太刀しよう。

そでエ。

直助　討つてやらうワ。

そでエ、すりやアノほんまに

直助　女房になるか。

そで　必ず見捨てゝ下さんすなえ。

直助　たうとう首尾よく

そでエ。

直助　アヽ、素的に醉つた。

ト云ひながら、脇の方を向いて舌を出し

サア、嚊ア、寢ようぢやないか。

そで　わたしやもつと夜鍋をしようわいな。

直助　そんなら勝手にするがよい。おれも有やうは、赤の他人が勝手だ。

ト云ひながら表を締める。

そでエヽモ、寢る事は寢るけれどナ

ト思ひ入れあつて、佛壇へ手を合せ拜むこと。直助見て

直助　コレ、今に敵は討たしてやるワ。

ト唄になり、直助、お袖の手を引き、そこに立てまはしたる屏風の中へ入り、引きまはす。合ひ方になり、向うより與茂七、一本差し、隱亡堀で手に入つたる鰻掻きを持つて出て來て、花道にて思ひ入れあつて

與茂　いつぞや計らず大切なる、廻文狀を失ひし、その折手に入るこの品に、あり〳〵名前の彫り附けし、權兵衞といふ者こそ、法乘院の門前にて、香花商ふ家なりと、聞き出せしが詮議の手がゝり、主に逢うて廻文の、有無を糺したその上にて、すべによつたら蟻の穴、つゝむ大事にや替へられぬ、不便ながらも……何は兎もあれ、この持ち主に逢うた上。オヽ、さうぢや。

ト思ひ入れあつて舞臺の方へ來かゝる。薄ドロ〳〵になり、門口に干してある小平の着物の裾に陰火燃え立ち、誘らへの小蛇つきまとふ。與茂七これに目を附け

ヤヽ、陰火と共に蛇の、あれなる衣類に附きまとふは、ムウ、非業の最期に世を去りし、正しく死靈の

ト思ひ入れあつて、つか〳〵と舞臺へ來かゝると、ドロ〳〵打ちあげ、陰火、蛇と共に消ゆる。與茂七、

寂かしげに思ひ入れ。

さても不思議な。ハテナ。

ト思ひ入れあつて、氣を變へて門口を叩き

モシ〳〵、お頼み申します〳〵。

トこの聲を聞き、屏風より直助出て

直助　オイ〳〵、誰れだ〳〵。

與茂　どうぞ線香を一把賣つて下さい。

直助　ア、、お氣の毒だが、線香は切れ物でござりやす。

與茂　そんなら爰にある、櫨を賣つて下さりません。

直助　櫨がえ。そりやア滅法界に高い。一本で百より廉くはまからない。そしてそれは賣れてある花だ外へ行つて買はッしやるがいゝ。

與茂　まだ日が暮れて間もないに、怪しからず早く寢たわえ。アヽコレどうぞ

トちよつと考へて

モシ〳〵、外に干してある洗濯物を、盗人が持つて行きます。アレ〳〵、盗人を洗濯物が持つて

行くワ〳〵。

ト大きな聲で云ふ。直助驚き、とつかは起きて、門口を明け

直助　さつぱり忘れて寢てしまつた。お前、よく氣を附けて下さりやした。

ト洗濯物を持つて内へ入らうとして、與茂七を見て

こなたはたしか……

ト暫らく見てゐたりしが恟りし

ヤア、幽靈だ、幽靈が來た〳〵。

トとつかはと内へ飛び込み、門口を押へてゐる。

與茂　ナニ幽靈が、どこに〳〵

トうろ〳〵する。

直助　コレ、幽靈が來た〳〵。

トこの聲にお袖も起きて來り、うろたへ、直助に縋る。

そで　エヽ、氣味のわるい、どこに幽靈が居るわいなア。

直助　門口に立つてゐるワ〳〵。コレ〳〵てめえ、幽靈除けは持たねえか〳〵。

そで　わたしや其やうな物は持たぬわいな。藤八五文は幽靈には驗かぬかいなア。

直助　コレ、近所の衆、幽靈が出た、來て下さい〳〵。

ト無性に騒ぐ。

與茂　無性に幽靈〳〵と云ふが、おれが目にはさつぱり見えない。コレ、幽靈どん〳〵、どこにゐるのだ〳〵。

直助　エヽ、幽靈たけ〴〵しいとはこなたの事だ。

與茂　ナニ、わしが幽靈だ。そりやア人違ひだ。わしやアそんな者ではない。マア、何にしろ、爰を明けて下さりませ。

直助　イヤ〳〵、滅多に明ける事はならない。幽靈に近附きはないぞ〳〵。

與茂　これはしたり、ちよつとお目にかゝりたい事がござりやす。門の戸を明けてもらひやせう。

ト袖聲に聞き耳立てゝ

そで　モシ、今ものを云はしやんしたは、以前の夫與茂七どのに、よう似たものごし。

直助　サア、それだによつて幽靈だといふのだ。

與茂　モシ、幽靈か幽靈でないか、お目にかゝればわかります。マア〳〵爰を明けて、正體を見さつしやい。

ト此聲を聞いて、お袖、直助をかきのけ、門口を明けて、與茂七を見て惘りし

そで　ヤヽ、お前はほんに、與茂七さんぢや〳〵。

與茂　お袖か。コレ、おぬしが在家を探したが、變つた所で、ハテ面妖な。

そで　エヽ、わたしよりお前が面妖な。そんなら屹度幽靈ぢやござんせぬな。サア〳〵、此方へ入りなさんせ。

ト與茂七を内へ入れ、いろ〳〵と思ひ入れあつて

ほんに幽靈ぢやない、正眞正銘、寸分違はぬ、與茂七さんぢや〳〵。……モシ、わたしやお前が人手にかゝつて、死なしやんしたと思うたゆゑ、

ト直助の方を見て、こなしあつて氣を變へ

ようマア、達者でゐて下さんしたなア。

ト云つて俯向く。直助も思ひ入れあつて

直助　そんならいつぞや中田圃で、ばつさりやつたと思つたは

與茂　ヤ。

直助　いつも達者で、おめでたうござりやす。

ト こなし。與茂七、直助を、つく〳〵見て

與茂　たしかこなたは淺草で、見知りごしの藥賣り、たしかその名も直助どの、ハテ、變つた所に……

コレお袖、爰は、てめえの内か。

そで　アイ、マア、其やうなものぢやわいなア。

與茂　して、この人は、なんで今時分來てゐるのだ。

そで　サア、あの人はナ

ト ちよつと目ごもり、そこにある宅悦の置いて行きし足力の杖を取つて

オヽ、それ〳〵、按摩ぢやわいの〳〵。

直助　ナニ、おれを按摩だ

そで　按摩ぢや〳〵、モシ、按摩さんになつてナ、……按摩さんぢや〳〵わいなア。

與茂　ハヽア、藥賣りが按摩と化けたか。

直助　さうサ、藥賣りが按摩と化けるは、まんざら緣のないでもないが、以前は赤穗の御家中が、小間物賣りや袖乞ひと

與茂　どうしましたとえ。

直助　世の中といふものは、さま〴〵なものサ。

與茂　ハテ、思ひがけない女房の内へ、尋ね當つておれも安堵。その上按摩まで呼んでおいてくれるといふは、ハテ氣の附いた……コレ、お前さん、一療治やつてもらはうか。

直助　そんなら、いよ〳〵按摩にするのか。

そで　サア、按摩さんぢやによつて、療治してあげなさんせ。

直助　イヤ、按摩とは、あんまりむごい。

與茂　サア、揉んで下さい。

直助　わしやァ足力療治で、無性矢鱈に踏んで踏み附けるが、それが承知なら、療治さつしやるがよい。

與茂　その荒療治が此方の望み。併し足力の道具は、わしが貸してやりませう。

直助　こりやァ珍らしい。そんなら道具を御持參で

與茂　わしが持參の足力の、杖は即ちこの品だ。

ト 合ひ方、變り、與茂七、持ち來りし饅掻きを出す。直助見て、思ひ入れ。

直助　ヤ、こりやこれ何時やら六ぱ島、隱亡堀で失うた

輿茂 そんならこれはこなさんの

直助 商賣道具サ。

輿茂 その柄にしつかり權兵衞と、あり〳〵彫り附けあるからは、そんならこなたの今の名は

直助 以前は直助中頃は、藤八五文の藥賣り、今は深川三角屋敷、寺門前の借家住み、見世で商ふ代物は、三文花に線香の、煙りも細き小商人、後生の種は賣りながら、片手仕事に殺生の、梁を伏せたり砂村の、隱亡堀で鰻掻き、ぬらりくらりと世を渡る、今のその名は權兵衞と、金箔の附いた貧乏人サ。

輿茂 そんならこなたは、この家の御亭主。して、お袖は何ゆゑ爰に。

直助 この女かえ。こりやァわしが女房サ。

輿茂 ヤ。

そで アモシ、それを云うては

直助 いゝわえ。以前の亭主に在家を知られ、いつがいつまで其やうに、白を切つてもゐられまい。與茂七どのとやら、この女はわしが嚊ァさ。

輿茂 そりや早一旦この輿茂七と、夫婦別れをした女の、再緣するもまゝある習ひ。併し未だに去り狀

を、渡さぬからは女房のお袖、誰れが許して再緣したのだ。

そで サァ、さう云はしやんすも皆尤も。譯を話せば長い事、父さんはじめお前まで、人手にかゝつて

直助 ヤイ〳〵、今となつては百萬だら、云ひ譯するほど罪が深い。所詮穢れたおぬしの體。性根を据ゑて、おれの見る前、先の亭主と別れてしまへ。又こなさんも薄のろく、心の腐つた女のあとをおはへて歩くも恥の上塗り、未練を云はずとこの女は、わしに下さい、貰ひましたよ。

ト圖太く思ひ入れ。與茂七も、こなしあつて

輿茂 成る程こなたも横車、押し手を強くすつぱりと、女房をくれとよく云つた。その大丈夫な氣性に免じ、長熨斗附けてこの女、進上しまいものでもないが、只は遣られぬ、望みがある。

直助 望みといふは古風なお仕着、大概知れた紋切り形、女の手切れは、金と轉んで

輿茂 イヽヤ卑劣な、何しに金を

直助 ムウ。して又何をこなさんは

輿茂 望みといふは金でない。場所は砂村六ぱ島、隱亡堀の闇の夜に、鳴かぬ烏のいどみ合ひ、その時思はず失ひし、小間物仲間の符牒の書附け、拾つた人はこなさんと、知つたはこれなる道具から女房とその品呑へぐに

直助　變つた物と女と引替へ。併し此方は素人で、小間物仲間の符牒は知らぬが、その連名も四五十人徒黨を集める廻文と、この權兵衛は睨んでおいた。

そで　その書き物なら淺草で、わたしもちよつと見たわいなア、

與茂　アヽコレ、……そんならいよ〳〵こなさんは

直助　拾つて持つてゐるならば、握つてゐても益ない反故、返してやりたいものなれど、拾はぬ物は是非がない。外を探すが、マア近道でござりやせう。

ト空うそぶく。與茂七うなづき

與茂　成る程こなたも中々以て、一筋縄ではほぐれぬ氣性、併し云ひ立する時は、見す〳〵間男、密夫の權兵衛、以前の身なれば女敵討、また町人なら術により、耳鼻削ぐか金銀を、強請つて取るもまゝある習ひ。その兩樣にかゝはらず、只管望むはその書き物、渡さぬうちは外へは決して。この家の内にいしかつて

そで　そんならお前は、この家のうちに

與茂　方の附くまでかゝりう人。

直助　腮をつるすが承知なら、そりやアこなたの勝手次第サ。

與茂　一人の女房に二人の男

直助　ハテナ、何方へ札が落ちるであらう。

與茂　そりやア此方が先なれば

そで　蔓一筋に、わたしが心で

直助　二人へ立てる心中を

與茂　見たいはたしか懐中に

ト寄るのをお袖は隔てゝ

そで　モシ、只何事も、わたしが胸に。

直助　上から見えぬ人心。

與茂　鏡にうつるものならば

そで　さぞ恥かしい

直助　昔の御亭主

そで　モシ。

與茂　今宵はさぞかし

與助　ヤ。

與茂　おやかましうござりやせう。

ト三人氣味合ひよろしく、キツパリとなる。唄になり、お袖案内して、與茂七奥へ入る。直助殘り、こなしあつて

直助　ハテ面妖な。いつぞや淺草田圃で、殺らしてのけたと思つた與茂七、生きてゐるのも不思議の一つ。そんならあの時殺したは、何奴であつたか、よく〳〵運の盡きた奴。それは兎もあれ、彼奴が欲しがる廻文狀、この書き物を師直樣の、屋敷へ持ち出し、恩賞受けたその上で、厄病神で敵とやら、あの與茂七めを……イヤ〳〵、それよりいつそ手短かに、この家の内でぐつさりと

ト思ひ入れあつて、そこにある出刃庖丁を取つて奥へ行かうとする。この時、お袖出て

そで　マア〳〵待たしやんせ、こちの人。

直助　そんならわりやア今の樣子を

そで　モシ、與茂七どのも以前は武士、もしもお前に怪我あつては、誰れを力に親姉の

直助　ハヽヽヽヽ、お爲ごかしにあやなして、以前の男の與茂七を、庇ひ立てする詞の端々。

そで　エヽモ、男の癖に廻り氣な。一旦お前に大事を頼み、女房となつた上からは、金輪奈落お前と一

緒に、モシ、與茂七どのを殺す手引きは、ナ

ト直助に囁く。直助こなしあつて

直助　そんなら其方が與茂七を、酒に醉はしてこの所へ

そで　屏風を引いて寢入り端。

直助　合圖はおぬしが行燈の

そで　あかしを消す折忍び寄り

直助　あの與茂七を、たつた一突き。

そで　モシ。

ト押へる。

直助　必ず合圖を

そで　違へぬやうに

直助　合點だ。

ト思ひ入れ。こなし。時の鐘。合ひ方になり、直助下座の藪へ入る。お袖、思ひ入れ。奥より與茂七窺ひ出て、思ひ入れあつて

與茂　お袖、主の權兵衛、いづれへやつた。
そで　慥か遁がれぬ用事とやらで
與茂　他行なしたか。それぞ幸ひ、歸りを待ちうけ
　　トつか〳〵と表へ行かうとするを、留めて思ひ入れ。
そで　モシ、待たしやんせ。あの直助も以前は武士、殊に常から强氣の者、大事を抱へたお前の身に、
　もしも過ちある時は、古主へ不忠になりませうがな。
與茂　その心配もさる事ながら、今も奥にて云ふ通り、一味の廻文、彼奴めに拾はれ、大事を知られし
　上からは、所詮生けては置かれぬ奴。
そで　さう思はしやんすなら、仕樣もやうは……モシ。
　　ト囁く。
與茂　ムウ。すりや、いよ〳〵其方が手引きして
そで　わたしが親も鹽冶樣の御家來なりや、わたしが爲にも矢ッ張り御主人、お爲にならぬ直助どの、
　殺す手引きも御奉公。
與茂　出かしたお袖。して又合圖は

そで　寢酒すゝめて正體なき、折を窺ひ行燈の
與茂　あかりを消すを合圖と定め
そで　枕に立てし屏風越し
與茂　あの直助を、たつた一討ち。
そで　モシ。
　　ト抑へる。
與茂　コレ、必ず共に
そで　怪我せぬやうに
與茂　承知いたした。
　　ト二人ば樣し合せるこなし、あたりを見廻す。時の鐘、しづかに合ひ方。舞臺廻る。
　本舞臺、三間の間、平舞臺、向う鼠壁、眞中のれん口、上の方折りまはし、一間の反故ばり障子屋體。下の方、誂らへの門口。下座の方黑板塀。爰にお熊、蜆の籠より錢を出して數へてゐる。孫兵衛、次郎吉をかばうて捨ぜりふ。合ひ方、禪のツトメにて道具納まる。

くま　コレ、此ざまアなんだ。今日一日擔いで歩いて、賣溜めはこればかり。うぬ、大方錢をくすねたらう。サア、爰へ出せ。

孫兵　コレ、婆どの、可哀さうに子供を、其やうに叱らぬものぢや。して、賣溜めの錢はなんぼある。

くま　見さつしやれ、こればかりだわな。

トそこへ百三十の釣瓶錢を拋り出す。孫兵衞見て

孫兵　ハテ、五つか六つの子供の商ひ、それ程あればよいではないか。コレ、坊や、泣くなよ〳〵。よく稼いだ。坊はよい子ぢやぞ。

くま　エヽ、こなさんがさう甘やかすによつて、兎角商ひに出しても錢をくすねて、買ひ喰ひばかりしやアがる。サア、錢をどこへ隱して置く。出さねえか。この餓鬼は、出しやアがらないのか。

ト抓る。次郎吉、泣き出し

次郎　イエ〳〵、どこへも隱しはしませぬ。婆樣、堪忍して〳〵

孫兵　これはしたり、可哀さうに、どうしたものぢやぞいやい。

くま　こなさんは、そんな結構人だによつて、世間で佛孫兵衞といひますワ。その子も同じ代物ゆゑ、小佛小平。わしは身腹痛めぬ子の所爲かして、一倍間抜に思はれます。其奴がこしらへた餓鬼だによつて、薄馬鹿の筋を引かぬやうに、性根を叩き直さにやならぬ。エヽ、退かつしやい〳〵。

孫兵　コレ、おのれは年端もゆかぬ者を、常住三界ぶち打擲。もう〳〵、手荒い事はおれがさゝぬ。手ぶしかけると、聞く事ぢやないぞ。

くま　こなさんが庇ふだけ猶腹が立つ。うぬ、どうしてくれう。エヽ、小面の憎い餓鬼だ。

ト蜆の籠を持つて立ちかゝる。

孫兵　この鬼婆アめ、何をしをるのぢや。

くま　何を、この提灯爺イめが。

孫兵　おのれ、なんと吐かしをる。

くま　うぬ、餓鬼め、どうするか見やアがれ。

ト籠を持つて打つてかゝる。孫兵衞もお熊に摑みかゝる。禪のツトメをかすめ、佃の合ひ方に時の鐘をかむせたる鳴り物。向うより小平の女房お花、世話女房のこしらへ　手拭をかむり、前垂れ、裾を高からげ、茹で玉子の籠を提げて出て來て、直ぐに内へ入り

はな　ハイ、只今歸りました。

トこの體を見て急いで中へ入り

こりや何事でござります。マア〳〵、御料簡なされませ。

ト双方を留める。

孫兵　お花や、聞きやれ。この婆アが、また坊主を窘めるわいの。

くま　コレ、其方のへり出したこの餓鬼、平常わしが可愛がつてやればよい事にして

孫兵　ヤイ〳〵〳〵、うぬ、この坊主をいつ可愛がつた。大福餅一つ買うてやつた事はあるまいがな。

はな　ハテ、もうようござります。マア〳〵、御料簡なされませ。コレ、次郎吉、何を其方は婆樣の、御機嫌を背いたのぢや、

孫兵　また賣溜めが多いの少ないのと云うて、いぢりをるわいの。

くま　コレ、親仁どの、何も商賣ぢやもの、賣溜めの事云はいでかいの。こればつかりは憎まれても云はにやなりませぬ。コレ、お花、今夜なんぼ程商ひしやつた。

はな　ハイ、まだ勘定は致しませぬが、ちよつと御覽じて下さりませ。

ト玉子の笊をお熊の前へ出す。お熊中を見て

くま　こりや、まだ賣り切らずに持つて來やつたの。

はな　ハイ、三つ剩りました。

孫兵　オヽ、よう賣りやつたの。サヽ、ひもじからう、茶漬でも食うたがよい。コレ、賣溜めはさぞ澤山あらうな。

ト お熊、籠の中の錢を見て

くま　アイ、大方四百五十か、五百ばかりもござりやせうよ。

孫兵　ヤア、そりやマア大枚な商ひぢや。それで其方も機嫌が直つたであらう。オヽ、大儀であつたく

くま　又この位る商ひせねば、水も飲まれるものではない。どこの牛の骨か馬の頭か、知れもせぬ病人を、内へ引摺り込んで、大抵物のいる事ではない。コレ、お花、とてもの事に、なぜ皆賣つてごんせぬのぢや。

はな　ハイ、そりやお前に明日の朝、茶うけにあけうと思ひまして

くま　ホヽヽヽヽヽ、そりやよう氣が附いたが、わしや其やうなもの食ふのは否ぢや。コレ、次郎吉、阿母が野良かはいて賣り殘した玉子、早う賣つて來い。

孫兵　可哀さうに今日一日、蜆かついで歩いて、草臥れたであらう。もう料簡してやりやいの。

くま　イエ〳〵、あのやうな病人のかゝりう人がるるもの、うつかりしてゐると、生きながら餓鬼道へ落ちにやならぬ。サア、よい子ぢや、ちやつと賣つて來や。

ト猫撫で聲をして次郎吉に玉子の籠を持たせ、二人に見えぬやうに次郎吉を抓る。

次郎　アレ、痛いわいの〳〵。

孫兵　オヽ、どうしやつた〳〵。

次郎　婆様がわしをつめつて

くま　エヽ、この子はよう嘘を。あれ程平常いとしがつてゐやしやんすもの、ナニ婆様が其やうな事……コレ、そんな事は捨てゝおいて、早う賣つて來やいの。

次郎　アイ〳〵。

ト泣きながら門口へ出る。

孫兵　エヽ、うぬ邪慳な

はな　アモシ……サア、怪我せぬやうに行つて來やいの。

ト涙ながらにすかして出す。次郎吉は籠を提げながら

次郎　玉子々々〳〵、ゆで玉子〳〵。

ト悲し氣に呼び歩いて向うへ入る。合ひ方、時の鐘。

くま　成る程、瓜の木に茄子の譬へ、其方の亭主ぢやが、あの小平の意氣地ない所に、よう似てゐるわいの。

ト障子の内をちよつと見て

ドリヤ、賣溜めの勘定でもしようか。

ト御熊、籠の蓋へあけた錢を持つて奥へ入る。孫兵衛、お花殘り、顔見合せ、思ひ入れ。

孫兵　成る程、あの婆アも年寄るほど、根性が悪うなる。わしも年寄つて、退去りも外聞が悪さに、捨ておけばよい事にして、附け上りをる。コレ、お花や、わが身もさぞ、うとましからうが、マア辛抱してくりやれ。また仕様もあるであらう。

はな　エヽ、勿體ない。母さんは甲斐々々しいお生れゆゑ、私しどもや連合ひの致す事は、お氣に入らぬも尤もでござります。それはさうと、こちの人が留守の内も、くれ〳〵氣を附けて進ぜろと云うておかしやんした御病人様、今日は少しもお心ようござんすかえ。

孫兵　今スヤ〳〵と寢てござつたが、どうも捗らぬ御病氣、あなたへ對しても、あの婆めが邪慳ゆゑ、おりや氣の毒で……ほんに、藥あけてもよい時分であらうぞや。

の。わしが生んだ子を褒めるぢやないが、そりやこなさん達に見せたい。歴とした侍ひ、それも今は浪人して……ほんに浪人といへば、腰拔けの病人どのは、まだ死ねさうもないが、あれがほんの穀つぶしとやら。